

# 平成24年度共通教育実施機構会議 活動報告書

I	「共通教育実施機構会議」活動の総括	共通教育実施機構会議常任委員会	1
II	カリキュラム等編成部会		
1	カリキュラム等編成部会のまとめ	カリキュラム等編成部会長	6
2	大学基礎論分科会	大学基礎論分科会長	7
3	課題探求実践セミナー分科会	課題探求実践セミナー分科会長	11
4	学問基礎論分科会	学問基礎論分科会長	12
5	人文分野分科会	人文分野分科会長	15
6	社会分野分科会	社会分野分科会長	17
7	生命・医療分科会	生命・医療分科会長	19
8	自然分野分科会	自然分野分科会長	20
9	外国語分科会	外国語分科会長	34
10	キャリア形成支援科目分科会	キャリア形成支援科目分科会長	35
11	スポーツ・健康分科会	スポーツ・健康分科会長	36
12	日本語・日本事情分科会	日本語・日本事情分科会長	38
III	自己点検・自己評価部会		
1	自己点検・評価活動の全体的状況	自己点検・自己評価部会長	39
2	大学基礎論分科会	大学基礎論分科会長	7
3	課題探求実践セミナー分科会	課題探求実践セミナー副分科会長	68
4	学問基礎論分科会	学問基礎論分科会長	12
5	人文分野分科会	人文分野副分科会長	70
6	社会分野分科会	社会分野副分科会長	72
7	生命・医療分科会	生命・医療副分科会長	74
8	自然分野分科会	自然分野副分科会長	77
9	外国語分科会	外国語分科会長	34
10	キャリア形成支援科目分科会	キャリア形成支援科目分科会長	35
11	スポーツ・健康分科会	スポーツ・健康副分科会長	80
12	日本語・日本事情分科会	日本語・日本事情副分科会長	83
IV	FD部会		
1	FD部会の活動報告	FD部会長	84
2	大学基礎論分科会	大学基礎論副分科会長	86
3	課題探求実践セミナー分科会	課題探求実践セミナー副分科会長	-
4	学問基礎論分科会	学問基礎論分科会長	12
5	人文分野分科会	人文分野副分科会長	87
6	社会分野分科会	社会分野副分科会長	88
7	生命・医療分科会	生命・医療副分科会長	89
8	自然分野分科会	自然分野副分科会長	91
9	外国語分科会	外国語副分科会長	92
10	キャリア形成支援科目分科会	キャリア形成支援科目分科会長	35
11	スポーツ・健康分科会	スポーツ・健康副分科会長	89
12	日本語・日本事情分科会	日本語・日本事情副分科会長	93
V	広報部会		
	広報部会のまとめ	広報部会長	94
VI	カリキュラム等開発部会		
	カリキュラム等開発部会のまとめ	カリキュラム等開発部会長	96

発行 平成25年7月1日  
 高知大学共通教育実施機構会議（委員長：大石達良）  
 〒780-8520 高知県高知市曙町2丁目5番1号

# I 平成 24 年度「共通教育実施機構会議」活動の総括

共通教育実施機構会議常任委員会

## 1. 共通教育実施機構会議及び常任委員会について

### (1) 共通教育実施機構会議

共通教育実施機構会議は、計 7 回(5/8、8/6、9/25、12/26、2/19、3/7、3/26)開催された。

第 1 回会議(5/8)において、昨年度総括および今年度中期計画・年度計画を受けて作成した本年度活動方針を承認し、今年度の活動を本格的に始動した。本年度は、以下の 7 つを重点事項として活動を行った。

- ①担当体制原案(各分科会の担当コマ数)作成を早期に行う(カリキュラム等編成部会)
- ②課題探求実践セミナーの教育効果の検証を行う(カリキュラム等開発部会)
- ③「協働実践力・表現力・コミュニケーション力・国際性の育成」に重点を置いた授業科目の評価に取り組む(カリキュラム等開発部会、自己点検・自己評価部会)
- ④授業改善アクションプランを実施する(自己点検・自己評価部会)
- ⑤授業改善アクションプランと連動した授業改善支援や FD を行う(自己点検・自己評価部会、FD 部会)
- ⑥初年次科目の効果の分析と改善のための検討を行う(自己点検・自己評価部会)
- ⑦FD への参加者を増やす方策を検討する(FD 部会)

各部会の努力および各分科会の協力により、上記の重点事項はほぼ全て一定の成果を上げることができた。①の担当体制は、ほぼ順調に作成作業が進んだ。②の課題探求実践セミナーでは、学生アンケートやジェネリックスキルテストにより教育効果の検証が試みられた。③の 4 つの力を育成する授業の評価は、全体として必ずしも十分とは言えなかったが、課題探求実践セミナーにおいて実施された。④の授業改善アクションプランは、今年度から新たな形式で本格的に実施された。⑤の授業改善アクションプラン関連の授業改善支援・FD は、スチューデントフィードバックの取り組みが幾つかの授業で実施された。⑥の初年次科目の検討は、アンケート結果の詳細な分析と提言がなされた。⑦の FD 参加者増加は、内容と宣伝の強化や学部との協力により、昨年度よりも参加者が増加した。これらの取り組みの詳細は、各部会・分科会の報告を参照されたい。

### (2) 常任委員会

常任委員会は、計 9 回開催された。共通教育実施機構会議の議題整理及び事前検討を中心に議論がなされ、また予算や専決事項の審議を行った。

## 2. 部会の取り組みについて

今年度も、「カリキュラム等編成部会」、「カリキュラム等開発部会」「自己点検評価部会」、「FD 部会」、「広報部会」の 5 つの部会を編成し、それぞれの領域における機構会議全体の取りまとめや分科会活動への支援を行った。以下、各部会の取り組みの要点をまとめておく。なお各部会の総括の具体的な内容は、各部会の総括を参照されたい。

### (1) カリキュラム等編成部会

編成部会委員の方々の献身的な努力によって、平成 25 年度のカリキュラム編成作業を無事に終えることができた。

また、人文分野分科会より意見のあった物部キャンパス開講科目の見直しについては、カリキュラム編成部会長の下にワーキンググループを編成し検討を行った。ワーキング部会では、これまでの経緯や問題点の洗い出し等が行われたが最終的な合意形成には至らなかった。

### (2) カリキュラム等開発部会

カリキュラム等開発部会は、環境省「環境人材育成のための大学教育プログラム開発事業」『環境人材育成のための社会協働教育プログラムの開発』(平成 20 年度採択)に基づく教育プログラムを引き続き実施した。

また、課題探求実践セミナー分科会と協力して、課題探求実践セミナー授業の改善を試みるとともに、課題探求力や協働実践力に関する能力の検証に関して、1 年生を対象にジェネリックスキルテストを実施した。

### (3) 自己点検・自己評価部会

自己点検・自己評価部会は、第Ⅱ期教育力向上 3 カ年計画の期間(平成 23~25 年度)に、共通教育授業担当常勤教員の全員が、1 回以上授業改善アクションプランを実施することをめざし、昨年度の試行を踏まえた新形式の授業改善アクションプランを本格的に実施した。その中で、総合教育センター大学教育創造部門の援助を得て、スチューデントフィードバックによる授業改善支援や KULAS 上に記載する授業改善記録方式の導入などにも取り組んだ。

また、初年次科目 3 授業(大学基礎論、学問基礎論、課題探求実践セミナー)に関して、3 年生アンケートの結果を詳細に分析し、授業効果の検証と改善のための提言を行った。

### (4) FD 部会

FD 部会は、FD ニーズ調査を行い、その結果も踏まえ、「学生参加を促す手法」と「課題探求学習担当者研修」をテーマとした FD 研修会を開催した。前者は、教員の関心が高い問題であることもあり、例年になく多くの参加者を得ることができた。後者では、物部キャンパスで実施した研修会で、農学部教務委員会と共同実施という新たな取り組みがなされ、報告および参加の両面で農学部教員との協力がなされた。

また、各分科会が独自に行う FD 活動に対して、それぞれ適時必要な支援が行われた。

#### (5) 広報部会

広報部会は、学生委員会とも協力し、昨年度に電子化された広報誌「パイプライン」を春と秋の2回、編集・発行した。今年度、読まれ方調査を、Google アナリティクスを利用した訪問数調査により行う予定であったが、これは来年度実施となった。

### 3. 分科会の取り組みについて

#### (1) 自律的な分科会活動について

分科会活動は、「カリキュラム編成」「自己点検評価」「FD」という3つの任務を柱として自律的に取り組んでいくことになっている。この自律的な分科会活動を掲げた背景には、共通教育の各分野・領域に対して持続的・総合的に責任を負う組織として分科会を位置づけ、カリキュラム編成だけでなく自己点検評価とFDという任務を重視しそれに対する自覚と取組を高めていくこと、また分科会活動における計画の策定や実施・総括等に関わることを教員のOJT型のFDとすることなどの意図があった。

近年、各分科会は独自に年度活動計画を策定し、それに基づく取り組みを行ってきた。しかし、授業アンケートや授業参観などの独自の取り組みも見られるが、カリキュラム編成以外で分科会独自の活動が活発に展開されているとは言い難い状況があることも事実である。

このような状況をもたらしている要因として、①平成20年度から分科会委員の任期が2年から1年になり経験的・継続的な取組が難しくなったこと、②委員の選出時期が遅く、分科会の立ち上がり時期が遅くなっていること、③自己点検評価やFDがより多様化しており、分科会独自での対応が難しくなってきたことなどの点があげられる。

このような分析を踏まえて、上記②については、選出時期を早めてもらうよう各学部に変更を要請することで改善を図り、また、上記①③の解決については、「カリキュラム等編成部会」「自己点検評価部会」「FD部会」と分科会との連携(相互支援)や部会長のリーダーシップの発揮等の対応を模索してきた。

また、今年度の新たな取り組みとして、分科会委員に共通教育の活動方針を理解してもらうことを目的として、分科会委員が選出された時期に、全分科会委員を対象に、今年度の全体基本方針と各部会方針を説明する機会を設けた(5月16日、電子会議システムで実施)。

しかし、全体として、分科会活動の充実は十分とは言い難く、今後課題を残している。

なお各分科会の取り組みの具体的内容については、各分科会の報告を参照されたい。

#### (2) カリキュラム編成の取り組み

7月頃に担当体制(基本担当コマ数)の決定、10月～1月頃にカリキュラム編成作業および授業担当者の決定を行った。カリキュラム編成は、各分科会内の議論・調整により、全体として順調に進められた。

### (3) 自己点検評価の取り組み

自己点検・自己評価部会全体として、授業改善アクションプランのための 5 週目アンケート・15 週目アンケートが行われており、各分科会で、この取り組みに協力および各分科会授業の 5 週目・15 アンケートの結果分析等を行っているところもある。それ以外に、分科会独自の取り組みとして、次のようなものが実施されている。

大学基礎論分科会…学生自己分析、授業評価アンケート

課題探求実践セミナー分科会…授業評価アンケート、ジェネリックスキルテスト

学問基礎論分科会…各学部単位での授業評価アンケート

人文分野分科会…15 週目アンケートに人文分野分科会独自のアンケート項目の設定

生命・医療分科会…授業評価アンケート

スポーツ・健康分科会…授業評価アンケート

日本語・日本事情分科会…授業評価アンケート

### (4) FD 活動の取り組み

FD 部会全体として、共通教育全体の FD 研修が行われており、各分科会で、この取り組みの企画立案および参加者募集等に協力を行っている。それ以外に、分科会独自の取り組みとして、次のようなものが実施されている。

学問基礎論分科会…各学部単位での授業参観・意見交換会

人文分野分科会…大阪市立大学の視察とその報告

生命・医療分科会…自己点検評価活動に基づく各担当教員の自主的研修の働きかけ

スポーツ・健康分科会…分科会 FD 研修会の実施、授業参観の実施

日本語・日本事情分科会…ピア・レビューの実施

## 4. 共通教育学生委員会について

今年度の学生委員会の活動は、広報誌作成への協力に止まった。

ここ数年、学生委員の減少により、活動が停滞傾向にある。改めて学生委員会の意義や目的を整理し、学生のモチベーションを高める必要がある。また実際の活動の場を創出するという意味で、学生委員会と部会や分科会との接点を意図的に作り出していくというような工夫も大切であるとする。次年度は、各部会で最低一つは、学生委員会と協力する事業を実施することを目標としたい。

## 5. 今後の共通教育実施体制について

平成 22 年度から、新しい共通教育の担当体制の決定方法によってカリキュラム編成が実施されている。この間に発生した問題や課題については、現在の担当体制に基づく全学合意の範囲内で対応してきたが、定年教員ポストの不補充などに伴い、今後は担当体制の全体的・根本的な見直しが必要になってくることが予想される。

現在、教育組織改革実施検討本部で、高知大学の新たな教育組織および総合的教養教育に関する議論が進められている。これらの改革に伴い、共通教育の実施体制の再構築が不可欠になると考えられる。全学的な議論の動向を踏まえつつ、共通教育がさらなる発展を遂げる方向で改革に臨むことが求められる。

## 6. その他

- (1) 『平成 24 年度共通教育実施機構活動報告書』は 4 月中に発刊し、WEB 上で公開する。
- (2) 委員の交代や担当業務の変更に伴う引き継ぎについて、4 月以降も新委員から問い合わせがあった際には協力をお願いしたい。

## II カリキュラム等編成部会

### 1 カリキュラム等編成部会のまとめ

カリキュラム等編成部会長 高橋 俊

#### 1. カリキュラム等編成の経過

2012.5.24 第1回カリキュラム等編成部会

「平成 24年度共通教育担当体制に係る基本方針について(案)」を確認した後、本年度のカリキュラム編成スケジュールを確認し、今年度は特に、人文分野・社会分野の物部開講コマ数の見直しについての議論をWGにて行うことを確認した。

2012.8.1 第2回カリキュラム等編成部会（メール会議）

各分科会の担当コマ数を確認した。

2012.9.18 第3回カリキュラム等編成部会

各分科会の担当コマ数を了承した後、今後のカリキュラム編成のスケジュールを確認した。

2012.12.11 第4回カリキュラム等編成部会

若干の未定部分を除き、次年度カリキュラム表が提出され、未定部分は引き続き編成作業を進めていくことが確認された。また、新規開講科目について確認を行った。

2012.12.25 第5回カリキュラム等編成部会

「24年度共通教育科目授業題目(案)」が、若干の未定部分を除き了承された。また、非常勤講師資格審査、教育学部カリキュラム改編に伴う新規開講・変更科目についての確認を行った。さらに、人文分野の物部開講コマ数WGの経過報告を行った。

2013.3.14 第6回カリキュラム等編成部会（メール会議）

人文学部国際社会コミュニケーション学科の大学基礎論新規開講について了承された。

#### 2. 平成24年度カリキュラムの変更・改善点

・人文分野・社会分野の物部開講コマ数見直しについては、ひとまず次年度は今年度通りの開講となったが、今後も継続して議論を続けていくことになった。

#### 3. 平成24年度への課題・申し送り事項等

・分科会・学部によっては、担当体制確定がかなり遅れたものもあった。これについては、当該分科会の担当者や学部の教務担当者とも十分連絡を取り、期限内での確定をお願いしていく。

・各分科会・学部における教員の減少により、基本開講コマ数を確保するのが困難になりつつある分野もある。これについては、学部ごとの基本担当コマ数を尊重しつつ、さまざまな形で改善を図っていくことが求められる。

## 2 大学基礎論分科会

大学基礎論分科会長 藤山亮治(理学部)

### 1. 平成 24 年度カリキュラム編成

「大学基礎論」では大きく〈大学で学ぶとは〉〈社会はどのような力を求めているか〉〈地域社会における高知大学の役割と意義〉を大学初年次の早いうちに認識し、更にコミュニケーション能力、プレゼンテーションスキル等も習得してもらうことを教育目標とした、演習主体の授業という大枠は決まっているものの、具体的内容は各学部任されている。24 年度に実施された各学部の内容は以下のものである。

#### 人文学部:

3 学科間で少しずつの違いはあるが、大枠としては、大学生活のための基礎的な講習、図書館等の施設利用のガイダンス、レポート作成をはじめとする大学での学びのための入門的なクラスなど、今後の大学での学習・生活の基盤作りを行った。

#### 理学部:

「大学で学ぶとは」(学部長)、「4 年間で有意義に過ごすために」(副学部長、学科長の4名)の講義の後、主に学外講師3名を含む5件の講演を実施し、7クラスでの少人数グループワークを通して、学びの姿勢の転換、コミュニケーション能力の獲得、社会の中の大学の位置づけ等の認識を促すカリキュラムを編成した。

#### 教育学部:

学校教育教員養成課程では、これまでどおり、全体を三つのクラスに分け、それぞれのクラスにおいて、レクチャー(1コマ)・グループワーク(2コマ)・プレゼンテーション(2コマ)というサイクルを3回くりかえした。大学基礎論担当者による2回のFD(7月25日、10月31日)では、授業がもりだくさんすぎて、授業の進行があわただしくなり、学生が消化不良をおこしきみであったとの指摘がなされた。

生涯教育課程では、例年通り、芸文、スポーツ科学、生活環境コース別に専門の授業を用意するとともに全体で、学部長による「大学(教育学部)で学ぶとは」、保健管理センターによる「大学生活とメンタルヘルス」、就職室による「進路について」、図書館による「図書館ツアー」等の講義とそれを受けてのグループワークでカリキュラムを編成した。

#### 農学部:

学部長講義の後、全体を3クラス各10グループに編成し、【全体講義→各クラスでのグループワーク→プレゼン発表】を3クール行う講義形態で実施した。全体講義は、その後のグループワークの基礎となる内容で、3名の学内講師により「FS 実習で農学を学ぶ(農学部の学問の特色と意義)」、「地域社会はどんな力を求めているか」、「国際社会における高知大学の役割と意義」等の講義テーマであった。

### 医学部:

専門職教育の色合いが濃い医学部では、それに見合ったテーマに変えるとともに、医学科・看護学科が併設されているメリットを活かし合同授業として実施している。テーマは「患者さんの視点から見た医療」、「望ましい医療サービス」、「プロフェッショナリズム(プロフェッショナルとは)」である。授業形態は、各テーマについて〈講義→グループ討論→発表〉を繰り返した。グループ討論ではクラスを 20 グループに分けてチューターが指導に当たった。グループ発表は5グループずつ4教室に分かれて実施し、それぞれ1人の教員が担当して授業の運営と評価を行った。最終日には本学を卒業した若手医療従事者2名と学生との対話を行った後、期末試験として最終レポートをまとめさせた。

### 土佐さきがけ:

土佐さきがけプログラムは、平成24年度にグリーンサイエンス人材育成コース、国際人材育成コース、スポーツ人材育成コースが始動した。スポーツ人材育成コースは、副専攻という位置づけであるため、当該コースの学生は、主専攻学部の大学基礎論を受講した。一方、グリーンサイエンス人材育成コースと国際人材育成コースの学生に対しては、学部とは別のクラス(TSP 大学基礎論)を設定し、2コースの学生と一緒に受講した。

TSP 大学基礎論の前半では、オリエンテーション後、「大学で学ぶとは？(TSPで何を学ぶか)」について学長や理事、各コース長からの講義を聞き大学教育に関してディスカッション後、グループで自らの在学中および卒業後の進路のイメージについて創造し発表した。後半の講義では「社会が求める力と高知大学の役割」をテーマに元学長や理事、副学長が講義を行い、グループで自身の社会貢献への目標や高知大学への提言を話し合い発表した。

なお、グループディスカッションの一部では、カリフォルニア州立大学フレズノ校や南京航空航天大学からの留学生(単位を必要としない非正規生)が参加し、英語で討論を行う等、当初の実施計画内容に加え、異文化コミュニケーションや英語力の向上を図ることができた。

## **2. 平成24年度カリキュラムの変更・改善点**

### 人文学部:

3学科それぞれが、学生に大学での学びの基礎を身につけてもらうための工夫を行なっている。たとえば国際社会コミュニケーション学科では、レジュメの作り方、レポートの書き方をはじめとする大学での学びの基礎を身につけるとともに、二年次以降のゼミ形式の授業のための入門として、学科教員が担当するミニゼミ形式での授業を大学基礎論の後半に行った。

### 理学部:

学生との動向を把握するために、アドバイザー教員との面談を2回実施した。また、出席状況を KULAS に入力し、この情報を共有することにより欠席者への指導を丹念に行った。

### 教育学部:

特になし。

農学部:

大きな変更はない。第 2、3 回講義(物部開講)は昨年度までの煩雑な教室運営を簡素化しつつ、教員と学生との討議時間を大幅に増やした。また、各回講義内容や振り返り演習については担当者間で十分協議し、各クラス間で教育方針にぶれが生じない様に努めた。さらに、第一、第二クール終了後の学生意見を取り纏め教員・学生双方に配布することにより、次回授業の意識づけが明確になり、学生の意欲向上が顕著に見られた。

医学部:

最終日の「卒業生との対話」は、毎年、担当者を変えている。

土佐さきがけ:

平成 24 年度からの新規のプログラムであるため、変更・改善点はない。

**3. 平成 25 年度への課題・申し送り事項等**

共通教育自己点検・自己評価部会より、一昨年度に 3 年生を対象として行われた振り返りアンケートの分析と提案が報告された。大学基礎論は各学部により授業形態が異なるため、全体としての分析と提案は適格でない点もあるが、意見交換会などの材料として検討をお願いした。

人文学部:

各学科の取り組みの評価については性急に行うことはできないが、それぞれの取り組みを通じて現時点までに見えてきた利点と問題点を共有し、それを各学科の取り組みに反映させていく必要がある。

理学部:

コミュニケーション能力の獲得、社会の中の大学の位置づけ等の認識についてはほとんどの学生にとって一定の効果は見受けられるが、一昨年度の 3 年生による振り返りアンケートの分析結果のように一部の学生にとって逆効果になっている、また授業の目的が理解されていない点がある。これらの学生に対する対応を検討する必要がある。

教育学部:

学校教育教員養成課程では来年度から、これまで課題探求実践セミナー(フレンドシップ事業)の枠内でおこなわれていた「基礎講座」を、実習系授業全体の基礎講座として位置づけなおし、課題探求実践セミナー(フレンドシップ事業)から独立させ、内容を拡充しながら大学基礎論の枠でおこなうこととなった。

生涯教育課程では、スポーツ科学コース、生活環境コースにおいて欠席学生がやや目立ったこと、芸術文化コースにおいては、音楽と美術の学生による混合チームにおけるグループディスカッションが学生にとって非常に刺激となったことが指摘されている。

#### 農学部:

昨年度同様に FS 実習と連携したことで、クラスやグループの一体感や FS 実習でのグループ活動の活発化などの効果が得られた。さらに、教員間の連携や指導方針を明確にしたことで、過年度に増して学習意欲やプレゼンテーション技術の向上が見られた。ただし、クラス、グループ、個人の各段階での温度差があること、テーマに沿った演習が必ずしも行われていないこと、調査・分析内容に偏りが見られるなど、いくつかの課題が浮き彫りにされた。また、レポート提出時に不正行為が確認された。初回授業で説明した目的などを繰り返し説明するなど、学生への目的意識の周知をより一層徹底すべきである。成績基準を繰り返し説明し、不正行為を未然に防止する対策も必要になろう。

#### 医学部:

授業運営に関わった教員からのコメントを記す。

- ・前年より(学生が)おとなしい印象だ。(大教室での全体討論より)少人数での討論の方がいろいろな意見を出しやすいのかも知れない。
- ・今後も、薬物療法に関わる実例を挙げ、専門職としてのモチベーションを向上させる講義を行いたい。
- ・(発表評価のみを担当するのでは)限られた時間内に評価することに戸惑いがある。グループ討議から発表まで一連の過程に関わるとよいのではないか。
- ・現行の臨床系教員に依頼するシステム(※)では将来的に運営が不安定になることが危惧される。初年次担当教員の増員が必要と考えられる。

※(註)グループ発表評価者に主として臨床系教員を充てていることを指す。

#### 土佐さきがけ:

- (1)TSP 棟の講義室は、講義を受講するには適切なサイズであるが、グループワークを実施する際には、狭く感じた。平成 25 年度からは、生命・環境人材育成コース学生も本大学基礎論を受講することから、グループワーク等の実施に当たり、十分なスペースの確保が必要である(TSP 運営委員会にて対応済み)。
- (2)留学生の授業への参加については、予定が把握できる場合は、それを考慮した授業計画の一部変更等を、早めに学生に知らせるほうがよいと思われた。
- (3)プレゼンテーションの際には、各コース実施委員に広く周知し、授業(プレゼン評価)への参加を促したい。

### 3 課題探求実践セミナー分科会

課題探求実践セミナー分科会長  
俣野秀典(総合教育センター)

#### 1. 平成 24 年度カリキュラム編成の経過

学部開講課題探求実践セミナーについては各学部へ依頼し、それ以外のセミナーについては各担当者に授業実施を依頼した。

##### 平成 24 年度開講授業題目

人文学部開講セミナー	3 題目
教育学部開講セミナー	1 題目
理学部開講セミナー	3 題目
医学部開講セミナー	2 題目
農学部開講セミナー	1 題目
自律協働入門	1 題目
地域協働入門	3 題目
自由探求学習	2 題目
国際協力入門	1 題目
学びを創る	1 題目
学びを考える	1 題目
国際協力入門	1 題目

(※定員は授業ごとで異なる)

#### 2. 平成 25 年度への課題

担当教員が実施しやすく、かつ学生にとっても履修しやすいようなカリキュラム編成となるよう努力したい。

## 4 学問基礎論分科会

学問基礎論分科会長 西村安代

### 分野又は科目の教育目標

各学部の専門分野において必要な知識・素養を学ぶとともに、日本語を含めたプレゼンテーション技法を身につける。

### 平成23年度の活動総括

#### 1. 自己点検評価活動について

教育学部: 授業改善につながる活動として、コースによっては昨年度まで実施してきた 5 週目・15 週目アンケートや授業改善アクションプランを踏まえた授業を実施した。

人文学部: 社会経済学科では、曜日ごとに学生に各ゼミ活動に話し合いをさせ、その内容についてレポートを各教員にださせ、各ゼミの振り返りを行った。

医学部: 授業評価アンケートについては、大学で従来行われていたものを、講義の終盤で行った。医学入門の内容で行っているが、自由記載を書いた 30 名ほどが入学後の motivation 維持のためによかったと記載していた。

理学部: 学期末に授業アンケートを行った。

農学部: 森林科学コース担当グループでは授業参観ならびに 12/12(第 1 クール)と 1/30(第 2 クール)に内容に関する授業評価アンケートを行った。流域環境工学コース担当グループでは授業参観を行った。自然環境学コースおよび暖地農学コースの担当グループではレポートにおいて自由記述で感想を書かせ授業評価とした。

土佐さきがけプログラム: 授業評価アンケートを一部で実施した。

#### 2. FD 活動について

教育学部: 学問基礎論の授業担当教員で意見交換を行い、授業の改善に役立てた。

人文学部: 国際社会コミュニケーション学科では、大学基礎論と学問基礎論をあわせた形で、学科内 FD を実施。来年度の授業計画の参考にする。社会経済学科では第 1 回(7/30)、第 2 回(11/28)、第 3 回(2/20)に FD を実施した。

医学部: 教養系科目の教員が集まり、学生の授業の状況などについて、お互いに feedback をし、また本年度は 2 回、下記の内容で会議を開催した。

第 1 回 1. 期日: 2012 年 10 月 18 日 18:00-19:30

2. 場所: 医学部講義棟チュートリアル教室 14

3. 参加者: 共通教育担当教員を中心に、臨床系教員も含めて 10 名

4. 内容: ①医学部教育の変化について—国際認証への動き—

②1 年生授業における学生の就学状況について

第 2 回 1. 期日: 2013 年 1 月 15 日 18:00-19:00

2. 場所: 医学部講義棟チュートリアル教室 14

3. 参加者: 共通教育担当教員を中心に、臨床系教員も含めて 9 名

4. 内容: ①就学状況に問題のある学生に関する情報交換

理学部: 特になし

農学部: 特になし

土佐さきがけプログラム:学問基礎論の担当授業教員で授業の進め方について意見交換を行い、授業を実施した。

### 3. その他講義内容、次年度計画など(各学部における取り組み状況や改善点など)

教育学部:昨年度の改善点として、学生が授業テーマ(授業担当教員)を選択する際に、最初から授業テーマに基づいて選択するのではなく、授業担当者の講義を一通り受講した後で学生の受講希望を聞き、20人程度のクラスに分けをしていく方法を採用することにしたが、今年度この方法で授業を行った。この手続きは次年度も継続した方がよいと考えられる。今年度は非常に出席率もよく真面目な学生が多かったが、なかなか自分から意見を言う学生が少ないので、積極的に意見を言うようにする工夫が必要だろう。学生は、自分は何に関心があるのかを徹底的に考えたり、それを仲間と議論したりすることで、卒論のビジョンのみならず将来の方向性をも考えるきっかけになったと思う。また本年度は情報収集、資料の整理、文章作成、平面作品や立体作品等を作り検証実験等とプレゼンテーションを行い、プレゼンテーション後には、反省会を開催し意見交換を行った。

人文学部:人間文化学科では、授業担当者が6つの項目(授業の概要・学生の取り組み具合・授業の成果・反省点や今後の問題点・その他・学問基礎論全体の運営)に答える形式の詳細な総括文書を作成した。ここに示された成果と課題を学科全体で共有し、次年度以降の授業の改善に資するよう努める。また、2012年度より大幅な授業内容の変更を行い、これまでよりも専門的な内容を盛り込みつつ、より個別的で丁寧な指導を目指し授業を展開した。先述の「総括」に示されているとおり、初年度においては概ね良好な結果を生んでいる。「新」学問基礎論の2年目となる2013年度においては、1年目の反省と成果を十分に活かしながら授業を実施する。国際社会コミュニケーション学科の来年度計画は、十数クラスに分かれ、各担当教員のもとで「読むこと」を学ぶ。あわせて簡単なレポート指導を行う(学期の前半・後半でクラス変更)。社会経済学科では「平成24年度社会経済学科教育推進事業総括」の中に「学問基礎論総括」の項目を設け、詳細な検証を行っている。また、来年度は担当者の増とゼミの定員を14から12名程度に減らす。学問基礎論の授業内容について検討を行う。

医学部:来年度の講義計画については、今年度同様に導入部で医学部での学習目標や学習の仕方の概論。自学教育などを行い、以下、医学入門、医学英語入門レベルの講義を主体に行う。健康管理(保健管理センター医師)、東洋医学(学会講師)、男女共同参画(医師会医師)の3回も予定している。

理学部:次年度学問基礎論の計画。

- 第1回 ガイダンスとアドバイザー教員との面談、
- 第2~9回 理学入門(各分野)
- 第10回 授業概要教育コースのクラス分け及びガイダンス
- 第11回~第14回 授業概要コース別演習
- 第15回 授業概要課題プレゼンテーション(各教育コースで実施)

農学部:グループワークの実施に関して学生の希望を調査し、第一希望については100%希望をかなえ、第二希望についても70%程度希望をかなえている。昨年度より、農学部で2回講義を開講している。第2・3クールの初回時訪問から本年度は学問基礎論以外の

担当教員にもグループ学習のプレゼンテーションを聞いていただけるように、各クールの最終回に農学部で開講するように変更した。

土佐さきがけプログラム：国際人材コースでは、学生が自主的にリサーチテーマを決定し、授業を進めた。グリーンサイエンスコースでは、学問母体である理学および化学について理解することを目的とし、前半は理学部学生、後半は化学コース希望者に混ざって共通の講義および課題内容で行った。国際人材コースでは、3名の教員で担当し、それぞれの専門分野の講義を交えながら進める計画であり、GSコースは特に変更なしの計画であり、生命環境コースでは、前半1/3は生命・環境入門としてコース担当教員による分野の紹介を行い、残る2/3を2クールに分けて、生物資源の利活用や環境の諸問題に関わるグループワークを農学部生に混ざって計2回行う計画である。

## 5 人文分野分科会

人文分野分科会長 川本真浩(人文学部)

### 1. 平成24年度の次年度カリキュラム編成の経過

(1)平成24年6月の第1回カリキュラム等編成部会(以下、「カリ部会」)において承認された平成25年度の共通教育にかかる担当基本人数(案)が、その後の共通教育実施機構会議ならびに各学部での審議・承認をへて確定した。

(2)平成24年9月の第3回カリ部会において、平成25年度共通教育科目の学域・科目の開講コマ数について決定され、同年度カリキュラム編成にとりかかることになった。ただし、物部キャンパスでの開講授業については、カリ部会長の下に設置された「物部キャンパス開講授業(人文分野・社会分野)に係るワーキンググループ」(座長・同部会長;以下、「WG」)での検討結果が出るまで保留されることとなった。

(3)WGによる検討は11月まで続けられたが、具体的な結論を導き出すには至らず、同月14日に開催された第3回会合をもって実質的な検討が打ち切られた。同会合の議事メモを基にカリ部会長が農学部(学務委員会)と文書による折衝をおこない、それをふまえてカリ部会長から平成25年度の物部開講体制に関する提案があった。これをうけて人文分野分科会は、平成25年度の物部3コマ開講を決定し、カリキュラム編成をおこなった(この件については次項2で詳述する)。

(4)平成24年12月から翌25年3月にかけて平成25年度開講授業題目表を作成した。

### 2. 物部キャンパス開講授業にかかる検討と課題について

#### (1)物部キャンパス3コマ開講にかかる検討と平成25年度カリキュラムの編成作業

平成23年度末に人文分野分科会からの提案によってカリ部会長の下に設置されることとなったWGは、カリ部会長と関係分野分科会長による準備会合(平成24年2月)とカリ部会長、人文分野分科会の会長及び農学部委員、農学部学務委員長による意見交換(同4月)をへて、同7月にメンバーが最終的に確定、翌8月から活動を開始した。会合は8月(1回)と11月(2回)に開催されたが、各会合の間にも資料(データ)の渉猟・作成・分析作業が進められ、物部キャンパス開講数(人文分野・社会分野の各3コマ)決定の経緯、開講条件と手続き、共通教育科目及び学部専門科目にかかる履修規則の改訂、農学部での履修指導のありかた、近年の農学部学生の履修状況を示すデータなどが検討材料として提示された。しかし、ひとつおりの資料やデータをそろえて意見交換をおこなった第3回会合においても、具体的な結論を導き出すには至らず、WGによる検討は同会合をもって打ち切られた。

WGの設置申請から検討作業まで関わってきた人文分野分科会長としての立場から申し上げますと、残念なことに「WGではまともな議論が行われなかった」というのが率直な感想である。いみじくも、座長(カリ部会長)が第3回WG議事メモをもって「WGとしての結論は両論併記となった」と述べた(11月29日付カリ部会長から農学部学務委員長あて文書)とおおり、メンバーの意見が羅列されただけの同議事メモが「議論の不成立」を端的に示す証拠である。たしかに「3コマ」という数字が決定された(1990年代の)根拠となる文書や議論を「発見」することはできなかった。また、異なる立場や過去の役職経験をもつ者が情報を出しあうことで、少なくともWG内で一定の

知見とデータが共有されたことは「ひとつの成果」であった。しかし、「3コマ開講」決定以後の経緯（履修規則の改訂、「開講時間枠の確保」に関するとりきめの反故、農学部の履修指導による授業履修条件の新たな制約など）や学生の履修状況を示すデータ、あるいは朝倉キャンパスにいる学生の履修機会などを考慮に入れたうえでの「議論」が行われた形跡は、同議事メモに全く読み取れない。WGの会合はメンバーがそれぞれの立場から意見を出しあっただけでおわったのである。

第3回WG会合の後、カリ部会長は農学部学務委員長との間で文書による折衝をおこなったうえで、一定の条件をつけて「平成25年度は物部キャンパスで3コマ開講する」よう人文分野分科会に要請してきた。分科会では、WGでの検討内容や同議事メモ、カリ部会長からの要請に伴う条件などをも考慮して、この要請に応じることを決定した。分科会内の各学域とりわけ平成25年度の出講を引き受けた芸術・言語文化・地理歴史の先生方の深慮ある判断と出講のための尽力は特筆に値する。

## (2)平成26年度カリキュラム編成に向けた課題

カリ部会、人文分野分科会ともに、今年度おこなわれた議論のなかでは平成26年度カリキュラムに関する議論やとりきめは一切なされなかった。カリ部会長からの要請はあくまで平成25年度カリキュラムに関するものであったし、人文分野分科会の3コマ出講も同年度のカリキュラムを決定したのみにとどまっている。

人文分野分科会としては、「カリ部会ではなく、より上位の会議において、この問題を議論し結論を出さなければならない、そのために必要な措置を責任あるポジションにある人（組織）が決定してほしい」ということをカリ部会及び共通教育実施機構会議に申し入れたい。今年度設置されたWGでは、現時点で集成可能な情報やデータが示されたにもかかわらず、「議論の不成立」でもって具体的な結論を導き出せなかった。このことは、そもそもこのレベルの会議でこの問題に関する結論を導き出すのは不可能であるということにほかならない（もし「結論を出せなかったのは、WGの座長ないしメンバーが無能だったためだ」というのであれば、その根拠を明確かつ具体的に示してほしい）。さらに当分科会は、「物部開講数の変更を議論するのは、カリ部会ではなく、より上位の会議であるべきだ、との見解が農学部（教授会）の大勢である」との情報を一再ならずつかんでいる。いずれの局面からみても、この問題は、より上位の会議すなわち共通教育実施機構会議本体あるいは全学教育機構学士課程運営会議でとりあげられ、議論されるべき問題である、ということである。

WGの座長及びメンバーの尽力により、検討・議論のための材料は、かなりの程度、出そろった。これらの材料やそのほかの資料・データを基に、共通教育主管あるいはより上位の責任者の下で、すみやかに「真つ当な議論」をおこない、平成26年度カリキュラム編成に向けてよりよい開講体制を整備することを強く求めたい。それは、何よりも農学部学生も含めた全学部生にとってのよりよい共通教育実施体制を構築するために、早急に取り組まなければならない喫緊の課題であるというのが、人文分野分科会としての考えである。

## 6 社会分野分科会

社会分野分科会長 西島文香(人文学部)

### 1. カリキュラム編成の経過

社会分野分科会では、平成 23 年度から社会分野の基本担当コマ数が 40 から 43 へ増加した。共通教育実施機構のカリキュラム編成方針にもとづき、24 年度の担当体制を踏襲したうえで、25 年度のカリキュラム編成作業を行った。

<平成 24 年 10 月～平成 25 年 1 月 カリキュラム編成作業>

社会分野を担当してもらっている人文学部(国際社会コミュニケーション学科、社会経済学科)、教育学部、総合教育センターに依頼して担当者・時間割を調整し決定した。

<平成 25 年 2 月 カリキュラム編成作業終了>

社会分野が担うべき最低限開講数 43 コマ(人文 35、教育 5、総合教育センター1、非常勤 2)の他に多様な科目を関係する学部等の協力を得て開講するカリキュラムを編成できた。

教養科目では基本開講の 35 題目(旧主題別 18 題目、旧分野別 17 題目)に加えて、22 題目を開講する。そのうち 7 題目「企業と労働を考える」、「福島原発事故を考える」、「多変量解析の基礎」、「障がい者支援演習」、「サービスラーニング演習」、「非営利法人経営論入門」、「大学政策論入門」を平成 25 年度に新たに追加した。

共通専門科目基礎科目では基本開講題目数(8 題目)に加えて 4 題目を人文学部の協力を得て学部開講科目として編成することができた。

### 2. 平成 25 年度カリキュラム編成のポイント

- (1) 副数題目において新たな担当者の科目に変更され、開講題目の固定化に一定の歯止めをかけることができた。
- (2) 新規に「企業と労働を考える」、「福島原発事故を考える」、「多変量解析の基礎」、「障がい者支援演習」、「サービスラーニング演習」、「非営利法人経営論入門」、「大学政策論入門」を開講し、多彩な題目を展開することができた。また「障害者ボランティアの理論と実技」の科目名を「障がい者支援の理論と実技」に変更した。
- (3) 「土佐の海の環境学Ⅰ」を社会分野のノルマとしてカウントした。
- (4) 物部キャンパスで開講する 3 科目のうち、1 科目を集中講義とした。

### 3. 課題

- (1) 平成 22 年度に提起された課題(教育学部の負担数の過剰、物部キャンパス開講数の見直し)のうち、後者の「物部キャンパス開講数の見直し」については、平成 24 年度にはカリキュラム編成部会のもとに物部開講 WG が置かれ、これまでの経緯などについて検討が重

ねられた。今後、全学的な教育組織の改編が検討されるなか、社会分野科目の各学部・センターの科目開講や負担の問題もあわせて今後検討していく必要がある。

- (2) 平成 23 年度に提起された、一部の社会分野科目について、教育効果に照らして受講者数が多すぎるという課題については、平成 23 年度は対象事業の開講日時の変更によるものと推測され、本質的には改善されていないと考えられた。平成 24 年度については、受講生 100 人以上の科目を対象に、学生による授業評価アンケートを実施し、大教室講義の現状と課題の把握に努めた。今後これらを解決するためには、授業コマ数を増やす等の措置が必要であるが、上記の負担の問題とあわせて検討が必要である。

## 7 生命・医療分科会

生命・医療分科会会長

野田 智洋(医学部)

### 1. 平成24年度カリキュラム編成の経過

各学部担当教員とメールによる連絡調整を行い、カリキュラム編成の基本方針を確認した上で、下記の通り編成作業を行った。

- ・ 1月16日(水):学部、センター代表者あてに責任者の選任と、開設学期ならびに曜日時限の決定通知を行い、平成24年度授業計画策定の依頼を行った。
- ・ 1月30日(水):すべての部局から授業計画が提出された。川島先生の転出により、看護学科の担当者が野村先生に変更になった。
- ・ 2月8日(金):代表者に授業計画一覧表を送り、シラバス登録を依頼した。
- ・ 3月11日(月):時間割の関係上、実際の授業担当ができないため、看護学科代表者が野村先生から青木先生に変更になった。
- ・ 3月下旬:代表者宛に授業の実施依頼を行う予定である。

開講曜日及び時間の決定に当たっては、時間割の移動を極力おさえ、混乱のないよう配慮した。従って、これまでの木曜日開講をベースとした時間割とした。さらにオムニバス形式にするか部局等が独自で開講するかについて検討したが、偏ることなく広い視野にたつて授業を提供するという観点から、部局等のオムニバス形式とすることとした。

### 2. 平成24年度カリキュラムの変更・改善点

平成24年度に関しては教育学部の矢野先生が加わり、各クラスのバランスが良くなった。来年度、朝倉キャンパスで、理学部の島内先生がアルコール教育をテーマとする授業を開講する予定である。

### 3. 平成25年度への課題

クラス間の受講者数に偏りが生じている。受講者数が多いクラスほど、学生満足度が低い傾向が伺える。受講人数の制限について、共通教育全体で考える必要があるだろう。授業内容については、担当部局の学問特性を生かしつつ、内容が偏ることなく編成したい。

## 8 自然分野分科会

### 平成 24 年度カリキュラム等編成に関する自然分野分科会の活動報告

自然分野分科会長 岩井雅夫(理学部)

#### 1. 自然分野分科会運営体制

平成 24 年度に引き続き、自然分野の教育目標「自然科学に関する基礎的な知識と考え方の習得」を実現すべく、「カリキュラム等編成に関する課題を点検し、カリキュラム編成や実施環境改善する方針」のもと分科会活動を行ってきた。

自然分野分科会構成員は 13 名と構成員が多く一同に会しての会議運営は日程調整だけでも相当な労力を要することとなる。そこで自然分科会は原則メール会議とし、カリキュラム等編成に関する作業や審議依頼に対応した。副分科会長の選任は原則連番性(教→理→農→医→教・・)をしいてきており、平成 24 年度は自己点検担当を理学部、FD 担当を医学部から専任することとなっていた。しかし FD 活動に関しては事業の継続性を鑑み、平成 23 年に引き続き農学部選出池島委員が選出された。自己点検活動については「数学教育に関するニーズと現状を自己点検する」とした平成 23 年度の活動を継承発展させることで、数学を専門とする池田委員が選出された(2012 年 5 月 18 日、自然分野分科会メール会議にて承認成立;以下単に「承認」と表示)。

#### 【自然分野分科会委員】

分科会長:岩井(理)、自己点検担当副分科会長:池田(理)、FD 担当副分科会長:池島(農)  
委員:山口、中城(教)、仲野・上田・峯・三好(理)、柏木・伊藤・斎(農)、麻生(医)

#### 2. 平成 24 年度カリキュラム

##### 単位互換科目に関する単位認定

高知高専開単位互換科目「生命科学」(2 学期)に農学部から 1 名の申込みがあり、審議の結果共通教育基礎科目として認定することで合意された(2012 年 11 月 2 日付け承認)

#### 3. 平成 25 年度カリキュラム

##### (1)平成 25 年度以降教養科目授業担当コマ数の枠組(カテゴリー)

分野別・主題別区分撤廃にともない(平成 23 年度報告書参照)、教養科目枠組み再編が可能となった。各科目の現状・必要性に即してカテゴリーの変更を実施することとなった。

##### (2)平成 25 年度カリキュラム編成作業

第3回共通教育実施機構会議(2012 年 9 月 25 日開催)において共通教育の教育担当体制(基本担当コマ数)が了承されたことを受け、10 月 9 日付けカリキュラム等編成部会長の依頼に基づき平成 24 年度カリキュラム編成作業を開始した。各学部・分野担当科目について自然分野分科会委員が分担し、担当者・科目名・開講学期・時間等の変更・修正作業にあたった。

作業開始が平成 23 年度より約 1ヶ月早かったことが幸いし、11 月末を目安に進めた科目の新規開講、科目名・カテゴリー等変更作業、12 月末を目安に進めた担当者・担当曜日等確定は順調に作業が進められた。

#### 【科目新設】

「植物バイオテクノロジー概論」(共通専門-基礎, 物部開講)

「木の旅を辿る」(教養-自然, 物部開講, 集中)

#### 【題目変更】

「動物の機能」→「動物の進化」

「バイオサイエンスの世界」→「植物・菌類の生き残り戦略」

#### 【カテゴリー区分変更】

「夏の体験授業—自然と農業」:『共通専門—基礎』→『教養科目—自然分野』

#### 【その他】

なお現状では、自然分野科目の各学部担当基本人数は、教育学部 1.5, 理学部 8, 農学部 2, また教育学部「無指定4」のうち 0.5 が自然分野(基本人数に 6 を掛けた値が各学部の担当コマ数)となっている。

#### (3)優先履修

土佐さきがけプログラム(生命・環境人材育成コース)学生に対する共通教育科目各種概論・基礎実験科目の優先履修について審議依頼があり審議したが、選択必修科目に対しては優先履修を認めていない現状に照らし合わせ、「優先履修はみとめない」とした(2013年3月4日分科会承認, 3月7日共通教育実施機構会議決定)。

#### 4. 第 60 回中国・四国地区大学教育研究会参加報告

日程:2012年6月2日-3日 場所:広島大学総合科学部

参加者:自然分野分科会からは分科会長が、他分科会等からの参加者とともに出席。

【基調講演】「開放系としての教養教育」(大学教育学会会長):

教育研究会や教育改革の歴史についてレビューがなされたとともに、「専門教養科目」による教養教育が提唱された。1)「ディシプリンに焦点を置きながら、トランスディシプリンの性格をもつ学習」(絹川正吉「大学教育の思想」東新堂)こそ、これからの学士課程教育カリキュラムを考えるうえで実現していかななくてはならないこと、2)そのために自然科学分野の授業科目の「開放」に努力せよ、また、3)「科学を相対化できる教養教育の力」を身につけよ、と力説された。「専門分野の話を、より多くの人に理解してもらえるように授業を展開するのが教養教育として大事」であるとの主張であると理解した。

【シンポジウム】以下3件の話題提供があり、参加者による質疑応答が交わされた;

(1)学生・教員・職員「協働」、(2)愛媛大学リーダーズスクール(ELS)、(3)広島経済大学興動館プログラム。

【総会】次回担当校愛媛大学ならびに次々回担当校鳥取大学の関係者を議長・副議長に選出し、会計報告や次回開催日程(H25年6月8-9日@愛媛大学)などについて承諾された。

【自然分野分科会】以下2件の話題提供があり、参加者による質疑応答が交わされた;

(1)鳥取大学ものづくり型 PBL 教育、(2)広島大学総合科学部「初修化学」

#### 5. カリキュラム実施環境改善にかかわる活動

##### (1)教育資料整備

共通教育棟3号館東壁面の教育用世界地図掲示版(平成23年度末共通教育実施事業経費追加配分経費で設置)に、差し替え資料として「Geological Map of the World, 3<sup>rd</sup> edition, 2009)」を元にした世界地図が作成された。

## (2)安全体制改善

南海地震等自然災害や野外での活動を伴う共通教育基礎実験科目では、安全性の確保にむけた対策とリスク管理が急務となっている。共通教育棟に配置されている化学実験室は平成23年度対策が施されたが、その他基礎実験科目開講場所は共通教育管理区域外あつかいとなっており整備が進んでいない。

## (3)その他

平成24年度予算では、2011年東北地方太平洋沖地震被災地大学から講師を招くための費用を計上していたが、先方の都合がつかず実現しなかった。代わりに、平成23年度聞き取り調査の結果を再度まとめなおし記録として残すこととした(別添え資料1)。また当時東北大学理学研究科地震対策班班長として現場対応にあたられた東北大学鈴木紀毅博士より当時の状況についてご寄稿いただいた(別添え資料2)。

## 6. まとめにかえて

平成24年度は大きな共通教育改変もなく、委員の大半が2年目ということもあり、自然分野会内では例年繰り返される作業を着々とこなすこととなった。逆に今年度末、分科会委員の3分の1を構成する農学部選出委員全員が交代することになり、議論や事業の継続性には残留委員に負担がかかる。委員のローテーション体制については今後改善が望まれる検討課題として残った。

複数キャンパス間における共通教育の運営に関しては、自然分野分科会内では比較的問題なく運営できている。しかし医学部教養教育との統合は未だ議論が始まっていない。また共通教育と専門教育の連携も今後改善されるべき課題を多数抱えており、特に教育組織の改組や新設に際しては、課題を整理し課題点を十分に把握したうえで周的な計画を準備する必要がある。

## 別添え資料1

### 共通教育自然科学系教育環境改善に関する情報収集調査報告:

#### 2011年東北地方太平洋沖地震ならびに福島原発事故に対する被災地大学の対応状況

出張報告者:岩井雅夫(自然分野分科会)

#### 調査概要:

共通教育自然科学系実験科目等の教育環境改善(安全対策)を進める指針を探るべく、福島大学・東北大学・東北工業大学における東北地方太平洋沖地震(2011年3月11日)の被災状況ならびに、復旧・安全対策等について聞き取り調査を行った。各大学の被災特性に応じ、(1)福島大学においては教員有志による放射線計測・分布図作成過程について、(2)東北大学においては各段階(地震発生直後・復旧過程・復旧後)の対応について、(3)東北工業大学においては被災地・被災証言映像記録活動について、重点的な調査を行った。また津波被害が甚大であった石巻・女川地域において、津波被害と地形の関係、震災後10カ月以上経過した時点での復興状況、について現地調査を行った。各大学関係者からの証言や収集資料をもとに被災状況ならびにその後の取り組みについて整理したので、調査の一部を以下に報告する。

#### 調査経費:

平成23年度共通教育実施機構自然分科会カリキュラム改善経費

出張期間:2012年1月24日(火)~1月27日(金)

#### 行程:

1月24日 高知→福島, 打ち合わせ

1月25日 福島大学聞き取り調査, 移動, 東北大学聞き取り調査

1月26日 石巻・女川被災地現地調査, 東北工業大学聞き取り調査

1月27日 仙台→高知(帰任)

#### 調査協力者:

福島大学共生システム理工学類 長橋良隆准教授, 廣瀬孝太郎特任助教

東北大学理学研究科 長瀬敏郎准教授, 鈴木紀毅助教, 岩石鋳物鋳床学会事務局

東北工業大学ライフデザイン学部 猿渡学准教授, 金井辰郎教授

## 1. 福島大学の被災状況と対応

### (1)被災直後の状況

高層階の実験棚が倒れたり、書類が落下したりしたものの、学生の直接被害はほとんどなかった。しかし、浜通りの津波や原子力発電所事故の影響で、200名以上の学生・教職員が何らかの形で被害にあった。地震発生時敷地内・建物内にいる学生は限定的であり、被害はなかったが、自宅・帰省先に分散していた学生の安否確認には約1週間を要したとのこと。福島第一原子力発電所事故は、地震・津波災害の混乱時「いつになれば学生を受け入れられるのか」という新たな難問を生み出し、対策に頭を悩ましたという。

## (2)被災後の対応

一週間近くたった3月17日以降、国大協や各大学関係者から救援物資の申し出や送付があいつぐようになった。しかし水道は供給元が被災し、復旧までには2-3週間の時間を要したという。福島県下では原子力発電所事故による影響が災いし、受験者数の2割減が予想されていた。またその対処も手探りの状態がつづいていた。そこで学内向けに対しては、1)各種講演会を開催し放射線災害に対するFD活動を行うとともに、2)マニュアルの見直し・策定を行い、対外的には各種取り組みに関する情報公開活動に関する情報発信を、危機対策本部や総務部が中心に行った。

### [講演会]

- 「放射線被爆の健康被害について」(神谷研二氏, 広島大学原爆放射線医科学研究所教授・福島県放射線健康リスク管理アドバイザー, 平成23年4月28日)
- 「大震災と大学・学生」(塩崎賢明氏, 神戸大学大学院工学研究科教授・兵庫県震災復興研究センター代表理事, 平成23年4月28日)
- 「放射線の秘密」(中川恵一氏, 東京大学医学部附属病院放射線科准教授平成24年1月18日)

### [マニュアル・ガイドブック・行動計画]

- 「放射線対応マニュアル(教職員版)」「地震発生時の初動マニュアル(学生版)」「地震発生時のマニュアル(授業中用)」(平成23年4月28日, 福島大学危機対策本部)
- 「放射線ガイドブック」(平成23年7月5日, 福島大学危機対策本部)
- 「原子力発電所事故対応行動計画」(平成23年11月1日, 福島大学危機対策本部)

### [リーフレット]

- 「福島大学の放射線の状況とその対策について」(平成23年8月, 福島大学総務課)

マニュアル類はホームページ上で公開され、放射線に対する相談窓口も開設された;

- 福島大学放射線相談窓口

[http://www.fukushima-u.ac.jp/guidance/top/topics/h23/110608-sinsai\\_madoguchi.html](http://www.fukushima-u.ac.jp/guidance/top/topics/h23/110608-sinsai_madoguchi.html)

## (3)放射線調査

福島大学共生システム理工学類教員有志が「放射線計測チーム」を組織し、5班10名体制で空間放射線量の測定を実施した。2kmメッシュを切り、各メッシュ1点の測定点を現地で選び、γ線線量計TCS-171ならびにTCS-146(ALOKA)を用いて計測。位置情報はGPSで測位・記録し、測定データは市販ソフトSURFERによりコンターマップ(等値線図)を作成した。

同チームの活動記録は以下のサイトにまとめられている;

<http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/FURAD/FURAD/top.html>

また、キャンパスや付属学校における放射線計測データも大学は積極的に公開している;

<http://www.fukushima-u.ac.jp/guidance/top/fukudai-housyasen.html>



Fig. 1. 空間線量測定に用いられたガンマ線測定器(福島大学)

放射線計は静岡大学等からの寄贈で、約 50 台用意されたという。また、日頃野外調査で活動し土地勘があるメンバーと、データの集計・解析に必要な情報処理能力を有するメンバーが連携・役割分担できたことが、活動を円滑に進める原動力となったとのことであった。

#### (4) 震災後のとりくみ

「大地震・津波及び原発事故による災害の実態を調査・研究し、それら成果を元に福島県や関係自治体等とも協力しながら、新しい地域づくりのビジョンと方途を提案する役割を担い活動する」ことを目的に、福島大学うつくしまふくしま未来支援センターが設置され

(<http://fure.net.fukushima-u.ac.jp/>)、地域復興支援、産業復興支援、環境共生(ハザードマップ等作成、減災対策提言)、放射線対策、地域エネルギー対策、こども支援、若者自立支援、歴史資料保管、ボランティア支援、等取り組みがすすめられている。一方で福島大学は「災害復旧研究所」(<http://fsl-fukushima-ujimdo.com/>)を 2011 年 4 月、プロジェクト研究所として設立、被災実態の調査活動、自治体復興支援、避難所運営、普及講演活動等がすすめられている。

(一般的資料)

- 福島大学大学案内 2011
- 福島大学大学院共生システム理工学研究科・理工学群共生システム理工学類
- 福島大学大学院共生システム理工学研究科施設案内
- 共生システム理工学研究科・共生システム理工学類教員紹介
- 福島大学うつくしまふくしま未来支援センター
- 福島大学プロジェクト研究 自然と人間 No.8, 2010

(震災関連公表済み資料)

- 人間発達文化学群東日本大震災教育支援プロジェクト 子供支援ボランティア
- 福島大学の放射線の状況とその対策について(国立大学法人福島大学, 平成 23 年 8 月)
- 福島大学放射線に関する取り組み(国立大学法人福島大学, 平成 23 年 8 月)
- 放射線ガイドブック(福島大学危機対策本部, 平成 23 年 7 月 5 日)
- 特集「フクシマ」を超えて-石油・原子力依存からのエネルギーシフト. GIS NEXT, no.36, 2011.

(別刷り)

- 山口克彦, 2011. 福島大学放射線計測チームの活動について. Isotope News, no.690, p.14-17.
- 長橋良隆・廣瀬孝太郎・柴崎直明, 2011. 2011 年東北地方太平洋沖地震による宮城県亘理

町と福島県相馬市・南相馬市の津波被害. 第四紀研究, 50(3), p.153-156.

- 高貝慶隆・古川真・長橋良隆・高瀬つぎ子・敷野修・亀尾裕, 2011. マイクロウェーブ加熱分解/ICP-MS 分析による土壌中の 235U 及び 238U の同位体比分析と福島第一原子力発電所事故にかかわる広域土壌調査. 分析化学, vol.60, no.12, p.947-957.
- 福島大学放射線計測チーム, 2011. 地域に根差し, 客観的・正確な情報を提供. GIS Next, no.36.p.12-15.

ほか

## 2. 東北大学における被災状況と対策

被災状況とその後の対策については, 鈴木紀毅博士の寄稿(別添え資料2)を参考にされたい。

特筆すべきは, 耐震補強をした建物では上層階での揺れが激しく, 壁面に固定していた戸棚類も留め具等がはずれ倒れることであり, 特に内容物が飛び出さないような工夫が施されていた戸棚・書棚では返って配架物(書籍や顕微鏡等)の重みが加わり棚の倒壊を助長した, というところがある。耐震の取り組みは必ずしも身の安全を保証していないことは肝に銘じておかねばならない。また, 今回の地震は大学の閑散期に発生しており, 地震の規模に比べ人的被害や大学における混乱は極めて限られた特殊状況であったということも念頭に置き情報を理解する必要がある。

震災後, 被災状況報告書等作成が大学の復旧作業には必要で, 身の安全を確保した後は, 冷静になって被災状況を写真等の記録に残すことが不可欠となってこよう。

東北大学においては, 震災直後から一部の教員が独自に市内や津波被災地に赴き調査を行った。津波遡上評価等については土木学会が中心に組織的対応を講じた。一方で地価にかかわるような利権がらみの情報は, 表立った調査報告が難しいとのこと。学内の復旧作業に一定のめどがたった後は博物館メンバーが中心になり, 津波で被災した三陸沿岸域に点在する自然史系博物館の標本レスキュー活動を行っている。

その後東北大学には災害科学国際研究所(IRIDeS; <http://irides.tohoku.ac.jp/>)が分野横断組織として新たに設置され, 災害リスク評価・都市計画・人材育成・災害医療等の活動を開始している。



Fig. 2. 東北大学における薬品庫の安全対策. キャビネットは固定せず, 実験台で落下物から保護する対策を講じている (固定すると薬品の入ったガラス瓶が破損するリスクが高まる).



Fig. 4. 津波の直撃ならびに押し寄せた車両火災により壊滅的な被害を被った石巻市立門脇小学校. 校舎最上階まで被災. 海岸からの直線距離は約 750m. 津波が遡上した北上川河岸からは約 500m.



Fig. 3. 被災状況や被害調査を伝えるポスター(東北大学)



Fig. 5. 津波で横転した4階建てのビル(宮城県女川町). テレビでもたびたび目にする光景ながら, 現地では「重量物」の横転を改めて実感した.

### 3. 東北工業大学にける被災地・被災証言映像記録活動

東北工業大学ライフデザイン学部経営コミュニケーション学科では、猿渡准教授を中心に、震災後の被災地の様子を記録映画として映像に残すとともに、映像作品作成を通しての地域復興を試みている(<http://www.youtube.com/user/sarumfilms>)。

活動を通して記憶を残すことともに、被災地にたびたび赴くことで見えてくる現実や芽生える問題意識が、やがて被災地域に還元され復興に繋がると期待できる。

### 4. 共通教育授業、実験科目実施環境の点検・安全対策提言

東日本大震災の記憶が薄らぐ前に、自然災害時被害軽減を目的とした講義・実験・実習環境の点検・安全対策を進め、来るべき南海地震に備えることが求められている。

特に安否確認を円滑に進めるためには、

- 1) 教室内が外から確認できる構造になっているか？
- 2) 避難経路の表示(蛍光板・反射板による表示)はなされているか？
- 3) 建物内の安否確認、救護に必要な、ヘルメット・懐中電灯・パール等を、だれもが取り出しやすい場所に整備しているか？
- 4) ガラス飛散防止対策は施されているか？
- 5) 薬品庫の安全対策はなされているか？(背の低い薬品庫を床面には固定せず使用し、落下部による破損対策が講じられていること、が望ましい)

といったことが重要であると、被災地大学の自然科学系教員から指摘された。実験室のみならず講義室も早急に対策していく必要がある。

また、愛媛県の伊方原発は中央構造線の近傍に位置し、従来想定されていた活断層の連動性が見直されるようになった。想定しなければいけない地震規模がこれまでより大きなものとなり、従来の想定にもとづき耐震設計された原子炉は、将来発生する地震に耐えられない可能性がでてきたことを意味する。南海地震連動時の津波、中央構造線活断層活動時における直下型地震により、福島第一原子力発電所同様の事故が発生しかねない。「原子力発電所事故対応行動マニュアル」作成が必要と思われる。仮にマニュアルを作成しても、実際にはそれを見て行動できるようなものではないのが現実であることは、今回の調査でも指摘された。しかし、想定外を想定内にし、新たな想定に備える指針にはなり得よう。東海村 JCO 臨界事故(1999年9月30日)発生を受け、高知大学にも放射線測定装器が数台配備され「実験安全教育」が行われていると聞く。しかし大学全体での備えを掌握し、日頃よりバックグランド値を測定・公開しておくことが必要と思われる。

岩手県宮古市では、鶴住居地区が壊滅的な被害を受けたなか小中学生の犠牲者を出さなかったことを受け、1) 率先避難者となる、2) 状況に応じて最善を尽くす、等を核とした防災教育の重要性が注目されるようになった。教職を目指す学生が多く受講する教職関連科目においては、こうした観点に即した教育も歓迎されよう。

## 別添え資料2（特別寄稿）

### 2011年東北太平洋沖地震による被災状況と2011年12月までの災害対応状況概要： 東北大学理学部事業場における例

寄稿者：東北大学理学研究科・地学専攻 鈴木紀毅

#### 1. 東北大学の被災状況

東北大学における被災状況及び災害対応状況の概要については、以下サイトに公開されている：

<http://www.bureau.tohoku.ac.jp/president/open/idrrr/230611.pdf>

理学研究科についての災害情報サイト「Disaster」を作成し集約しているが、公開情報は限定的なものとなっている(<http://www.sci.tohoku.ac.jp/saigai/311/>)。

被災状況はキャンパスによって大きく異なるので、理学部事業場での状況を紹介する。

**【建物全体】**耐震工事を終えた建物で倒壊・半壊したものはなかった。建物が本棟&エレベータ棟のような棟続きになっているものについては、接続部が激しく損傷した。揺れの最中は、離れたりしたため大変危険に感じた。非構造部位に多数の亀裂が生じた。外壁が落下した部分もあるが、もともと軽量に作られたもので、見かけほど建物への深刻なダメージはない。むしろ屋上に設置していた天体観察ドームなど、重い構造物があった場合の被害が深刻で、ドームは事実上全損となった。

**【建物の内部】**建物内部では、建物にかかわらず6階以上が被害が多く、3階以下は耐震固定が効いたのか、棚の転倒やものの落下は軽微だった。私がいた地学棟6階では棚に入っているものがほとんど落下した。棚の転倒状況はまちまちであるが、十分な耐震固定を施したもののほど被害がおおきく、部屋の片付けが悪くて棚の足元が埋もれていたものがかえって転倒を免れていた。耐震固定は、壁付と床付、突っ張り棒などで行っていたが、壁ごと抜けてしまい、床付したスチール棚が引きちぎれてしまう形で転倒した例が多発した。建物・階によって異なるが、地学棟6階では突っ張り棒固定は転倒を免れた。ロープで落下防止をした棚の被害は深刻で、棚板が振動で外れることで内容物が飛び出してしまった。むしろ、ロープでの落下防止をしていないことで内容物が早めに床を埋め、棚の転倒を防いだという例が多々あった。

耐震固定していた恒温器は落下した。地震対策であえて床固定をしなかった薬品庫(実験机の下に収納している)、キャスター付きビーカー棚はほぼ無傷であった。顕微鏡やパソコン、モニターは、先に落下した書籍などがクッションとなり無事だった例が多数見受けられた。財布や鍵など貴重品、靴、カバンなどは、落下した荷物に埋もれてしまい、帰宅準備が大変であった。また、安全対策用に用意していた各種物品・資料は居室の奥に置いていたため、取り出すのに一月以上かかったものもあった。

**【ライフライン・インフラ】**地震動の最中に電気はシャットダウンした。ある研究棟では薬品火災が発生した一方、スプリンクラーが誤作動して所蔵品が水びたしになった所もあった。あらゆる通信手段のなかで唯一、公衆電話だけ、消防署への通報が可能であった。別キャンパスの本部との内線電話回線は不通となった。幸いエレベータに閉じ込められた事例は確認されていない。

**【人的被災】**理学研究科等事業場では、幸いにも人的被害は皆無であった(擦り傷レベルは除く)。学生にインタビューした限りでは、机の下に隠れるなどの避難行動を各自とっていたようである。

#### 2. 地震災害発生後の対応状況

大学としての公式の動きは、以下 website の「災害対策本部動向」で公開しているので参照され

たい; <http://www.tohoku.ac.jp/japanese/kinkyu.html>

### (1)地震直後の対応

- 1) 火災の有無の確認, 電気, ガス, 水道の閉塞(5分程度?)。
- 2) 建物内行方不明者の探索(10~15分?憶えていないが, 暗くて手間取った)。
- 3) 建物外へ脱出し, 専攻ごとの指定一時避難場所へ集合, 点呼。
- 4) 居たはずの人の情報収集, 理学研究科の対策本部への報告(20~30分)。
- 5) 情報収集と本部からの指示を受けるために一時指定避難場所で待機(20~30分)。
- 6) 当日は真冬並みの寒さだったので, 上着や貴重品の回収のために班を結成し, 入棟者のリスト作りをし, 順番に建物に出入り(30~40分)。
- 7) 電池式のポータブル・テレビを用意してくれた人がいて, 唯一の公共情報源であった(時間的には, ちょうど仙台空港が津波に吞まれるライブ映像が流れていた)。
- 8) 本部で今後の対応を相談。備蓄しているペットボトルと食糧(かんぱん)の配布を決定, 道路情報。本部にはラジオがあるのみ。
- 9) その場にいた人の名簿作成と, 連絡先を記録し, 帰宅指示(記憶にないが, 16時30分くらいだったか?)。
- 10) 道路渋滞が激しいので, 一部の人間は日没くらいまで外で待機。

\* 理学研究科等事業場は, 指定避難場所ではないので, 全員帰宅が原則。

### (2)地震発生後数日~1週間における対応

#### [安否確認]

- ・通信インフラが当日深夜頃までにすぐにダウンしたため, 電気が復旧する2~3日後まで何も出来ず。
- ・一部の者を除き, 帰宅し, 生活の確保を優先。
- ・停電からの復帰後, 大学のメール関連サーバーがダウンしているため, メールによる安否確認不可能に。
- ・安否確認システムに頼らず, 教員や学生各自が持つ情報伝達ルート(ネット)を網の目のように駆使し, 情報収集。数名を除き, 1週間以内に情報収集終了。連絡の取れなかった数名は, 実家に戻っていたことが判明(あとで事情聴取をしたら, 大学に連絡しなくていいと思っていたとのこと)。情報収集は, Mixi, Twitter もふくめ, ありとあらゆる草の根手法。
- ・一部の学科では, google の伝言掲示板を立ち上げ, そこで情報集約・情報伝達をしていた。その学科がもっとも早く全員の無事を確認した。
- ・大学として, 学生は仙台を離れることを指示(食糧・燃料難であること, 大規模余震などの二次災害を避けるため)。

#### [建物対応]

- ・地震は金曜日だったので, 翌月曜日に教職員集合し, 現状の説明。その時点では, 応急危険度判定は終わっておらず, 理学研究科の執行部の許認可によって建物に教職員のみ入ることになった。
- ・薬品がある部屋, ガスの臭いがする部屋をまわり, 窓を開放(約1週間)。
- ・電気復旧のために, 全部屋をまわってブレーカを落とすなど, 通電火災対策をした。
- ・地震当日に回収できなかった貴重品を取り出す。
- ・建物の応急危険度判定が終了するまで建物内立ち入りを原則禁止。
- ・出勤体制の打合せ。メール・サーバー不通のため本部指示が分からないため, 家庭の被災・生活状況・交通手段を鑑みて, 安衛として自己判断することを提言(公的には決定権がないことによる)。

- ・余震があまりにもひどいので、大きな余震を念頭に復旧活動にとりくむように指示。
- 〔建物内のもろもろ〕
- ・被災状況の写真を手分けして撮影。事務室パソコンで集約し、部屋毎に写真を整理。
- ・ほとんどの人がすぐに片付けることはせず、徐々に片付けていった(私の場合はヒト月かかった)。
- ・しばらく、学内に廃棄場所が指定されていなかったため(そんな時間的余裕がなくて)、ゴミの山がほうぼうに発生。安衛として、分別と火災注意を喚起。
- ・人によるが、居室の片付け→実験室の片付け。不意の事故を避けるため、学生の出入りは原則禁止。

#### 〔交通網〕

- ・一部のバス路線のみ動いていた。複数の公共交通機関があっても、電車がストップ(私の場合は約ひとつき)していたため、困窮者続出。
- ・地震直後、司令所の指示で市営バスは全車が営業所(駐車場)に戻った。その事実は知らされていないため、バス停で待っている帰宅難民が大量発生。道路状況が分からないため、乗客の安全を確保できないことがその理由であった。
- ・バス路線も、橋の安全点検が終了していないルート、崖崩れの恐れのある(あるいは起きていた)ルートは運休。
- ・停電したため、電車はすべて運休。タクシーはほとんど掴まらない状況になった。
- ・ガソリン不足のせいか、自家用車は少ないが、ガソリンスタンドに並ぶ車が公共バスの通行を妨げる恰好となった。
- ・自転車に役に立った。

#### 〔放射線・被害対策〕

- ・大学として、学生は帰省指示。サーバー等が復活したので、東北大学のホームページに伝達事項を掲載。教員もこれ以上の情報を学内で得ることはほとんどできず。

<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/kinkyu.html>

- ・放射線については正確な公的情報が得られなかったが、学内の研究者が情報を提供していたので、それを参考に、「雪の日や雨の日は外出を控えるよう」とののみ情報を発信。なお、公的メールだったので、放射線には触れず。
- ・地学専攻のため、津波堆積物調査にすでに入っていたが、余震による津波被災に備え、情報集約を事務で行った。ガソリン不足のため、調査にできなかったのはごく一部でした。
- ・学生については、津波被災地へ入ることと、福島第一原発の近くに行くことは原則禁止と通達。

### (3) 中・長期的対応

- ・本学の方針が3月下旬頃から決まってきたので、それへの対応。
- ・新学期の開始時期の通達。
- ・建物への立ち入りを学生に許可。
- ・大きな余震や倒壊・転倒による二次災害を防止する指針の通達。
- ・大きな余震に備えた片付け。
- ・被害状況の記録や、余震への緊急対策を施しながらの片付けとなったので、おおむね片付くまでに約ヒト月(その数日後大きな余震が発生、一部は"現状復帰")。
- ・ゴミの大分別。

### 3. 2011年12月末までの復旧活動状況

2011年3月下旬～4月: 出入りの業者が機能不全だった(会社の方針で、放射能をさけるために

東京から新潟一山形経由での仙台入りなどが、震災被害品の動作確認、修理の可否の判断、全損の場合の復旧見積をとる作業を行う。大型機器は動かさないと壊れているかどうか分からないため、指示された締切に間に合わせるために大変な労力を払った。

2011年3月下旬: 専門業者による建物検査の他に、安衛委員・技術職員・事務の共同で担当部屋の全室調査。多くの壁に大小のヒビを確認し、施設担当者へ報告。今年度中に修理がはいるらしいが、生き死にや業務に差し支えないので、2011年12月時点ではまだ修理は入らず。

2011年4月上旬: 教室行事の調整。開講が実質的に1ヶ月遅れ、崖崩れ等によって野外実習の短縮(5日間→1日間, 15日間→7日間, など)などを行い、後期開始までできるだけ行事を正常化するプランを実行。

2011年4月上旬: 学生の精神的ケア。学生の親戚が行方不明だったり、親族が避難所暮らし(当時)などの事実が確認されているので、震災のことに授業で触れる場合の注意の徹底。

2011年5～8月: 価格が60万円以上の震災被害品の復旧費用申請書類の準備、被害状況調査、業者による見積の作業の繰り返し。申請が認可されたものについて、予算執行の許可が出てから順次発注。

2011年11～12月: 価格が60万円以下の震災被害品の復旧費用申請。破損物品の写真を丹念に撮影した学科の復旧費用はすみやかに予算確保が出来たが、証拠が残っていないものについては、予算申請に苦労した。申請しようとした代替品は同等品が原則で、生産中止品や機能拡張タイプしかない場合は、準備期間が短いなか、他社製品の調査をするなどを強いられた。

#### 4. 地震災害発生前と被災後の自然災害対策

##### (1) 地震発生前

理学研究科では、想定宮城県沖地震を念頭においた防災対策を継続的に進めていた。約10年かけて、理学研究科等事業場の建物の多くは耐震化が行われていた。また、数年前から防災訓練を年一回行っている。あらかじめ各専攻が一次避難所を指定。震災当日は、順調に避難が行われ、点呼を無事に行うことが出来た。

建物内部については、安全衛生管理室の巡視を月に一回行っており、整理整頓、避難路確保、地震対策の固定、などを改善指示を出し続けている。巡視の成果として、廊下に荷物をおく人が減った、ポンペを固定するようになった、などが上げられる。

想定宮城県沖地震に備え、簡易トイレや自家発電装置などの緊急時備品を理学部対策支部が備えている。

##### (2) 地震発生後

・地震を経験したのちの自然災害対策は、出来るところから行っている。耐震固定については、固定具もろとも外れる事例があったので、耐震固定は脱出までの時間かせぎとの認識となりつつある。

・不要品の廃棄。

・高い場所にものを置かない。

・書棚のロープ固定について、固定したせいで棚ごと転倒し、書籍が落ちたおかげで棚が壊れずに済んだ、という事実がある。ロープ固定については意見が割れており、各自の判断となっている。

・避難スペースの徹底確保。学生部屋のジャングルみたいな什器をすべて廃棄し、シンプルなものに変更。

・理学部事業所は丘陵地にあるため、津波の対策はとっていない。

## 5. 学生に対する安全講習実施状況

地質教室では、年2回、1時間半かけて行っている。内容は、地震対策、火災対応、薬品取り扱いの注意、実験の注意、薬品廃棄、ボンベ取り扱い、窒素(窒息ガス)の取扱い。

## 6. 災害地域拠点としての機能・役割

理学部等事業場は、山の上にあることで住宅地から隔離されている。そのため、災害地域拠点としての役割は想定されておらず、実際に避難所指定は受けていない。そのため、公的機関からの応援物資は原則として配布されない。

別キャンパスである川内北キャンパスも避難所指定を受けていなかったが、今回の地震の際は、近隣住民が同キャンパスの体育館に集まってしまい、開放することにした。そのキャンパスでは、急遽、独身者(家族があると、家族の世話のために戻る必要があるから)を担当にあてた、との事である。

## 7. 被災して見えてきた課題

・安否確認方法:伝言ダイヤルなどがあるが、教員はそれをほとんど使っていない。ほんの一握りの学生と連絡をとるのに数日を要した。研究室に所属してない学生、登校拒否状態の学生、普段から連絡がとりづらい学生である。このような学生とどのようにして連絡体制を確立するかが重要。

・貴重品の回収:建物から脱出したのはいいが、着の身着のまま出てきたため、財布も家の鍵もおいてきたため、建物に一度戻らなければならなかった。しかし、建物の安全性が不明だったため、公式に許可はだせなかった。許可したことで死亡した場合に責任問題が生じかねないので、解決策は今のところない。

・「お客様」対応:震災があった日は、大学入試・後期試験の前日であったため、受験生がそれなりに下見でいた。訪問先が特にない「お客様」の一時避難場所・点呼(?)、などのルール作りは大切。現在、本学では「外来者一般」というカテゴリで検討を始めている。

## 8. その他

安全上の問題が生じたときに、もっとも手に負えないのが薬品関係と火災である。地質教室では、以下の本を常時利用して、薬品火災のリスクを減らすように努力している;

- 東京消防庁(編)「化学薬品の混触危険ハンドブック 第2版」日刊工業新聞社。ISBN4-526-04019-3。

過去の事故例も具体的に載っているので、対策をねるには良い本。

地震については、さまざまな資料が出版されていますが、教員として、もっとも分からないのが建物被害の想定であった。以下3冊の本を紹介する;

- 日経アーキテクチュア編「東日本大震災の教訓 都市・建築編 覆る建築の常識」日経BP社。
- 日経ホームビルダー編「東日本大震災の教訓 住宅編 震災に強い家」日経BP社。
- 日経コンストラクション編「東日本大震災の教訓 土木編 インフラ被害の全貌」。日経BP社。

建物の専門家がポイントをおさえた写真とその説明は具体的かつ冷静(感情論ではない)ため、良い参考になる。この3冊を揃えれば、「地震と建築関係」について知りたいことはかなり満足できる。

(2011年12月27日付メール内容を再編し原稿として作成)

## 9 外国語分科会

外国語分科会長 吉門 牧雄(人文学部)

### 1. カリキュラム編成の経過

2012年4月 「英会話」・「大学英語入門」プレースメントテスト

2012年10月 「英会話」・「大学英語入門」プレースメントテスト

2012年2学期 次年度のカリキュラム作成を行う。

2013年3月 「英会話」・「大学英語入門」集中講義実施

### 2. カリキュラムの変更・改善点

2011年度に共通教育に係る担当体制に関し、人文学部において基本人数の割り振りが変更されたことにより、外国語分科会開講コマ数は、担当ノルマを完全に満たすことになった。上記の変更により、「大学英語入門」の開講数が2コマ減少した。2012年度は前年度の方針を基本的に踏襲して、カリキュラム編成を行った。

### 3. 2013年度への課題

共通教育全体の見直しに伴って、外国語分科会が担当する授業の見直しを行う必要がある。特に、担当教員の人数が年々減少している現状で、適切な授業負担を実現するためにノルマの見直しが喫緊の課題である。

## 10 キャリア形成支援科目分科会

キャリア形成支援科目分科会長 鈴木啓之(人文学部)

### 1. カリキュラム編成に関する報告

キャリア形成支援科目分科会では、共通教育実施機構会議のカリキュラム編成方針に基づき、今年度の担当体制を踏襲した上で、学芸員資格教育の変更計画なども踏まえ、カリキュラム編成を行った。

基本的なカリキュラム編成は、10月中旬から検討に入ることとし、12月中決定した。

平成24年度から開講した「ふるさと活性演習」については、本学の教養教育全体の中でどこに位置づけるべきかという検討課題があったが、審議を進めることができず、今後の検討課題として残さざるを得なかった。

#### 平成24年度開講授業題目

共通専門科目基礎科目(教職に関する科目)10 題目

共通専門科目キャリア形成支援科目(教職に関する科目)10 題目

共通専門科目キャリア形成支援科目(博物館実習)2 題目

共通専門科目キャリア形成支援科目(CBI 関連科目およびキャリアパス演習・チームワークを考える、ふるさと活性演習等)13 題目

計 35 題目

### 2. 自己点検評価活動に関する報告

一昨年度はキャリアパス演習などでは独自の評価を試みたが、十分な分析等の態勢が取れなかったため成果を上げることができなかった。そのため今年度は、態勢を整えることが難しいとの判断から、部会委員の選出以外に特に実施できなかった。

### 3. FD活動に関する報告

キャリア形成支援は、共通教育の範囲だけで完結する者ではないため、どうしてもキャリア形成支援科目分科会の枠を越えるようなテーマが構想されることになり、単独の開催は予算的にもテーマ的にも困難であった。そのためもあり、今年度は、独自のFD活動ではなく、共通教育全体のFD活動に依拠することにした。

## 11 スポーツ・健康分科会

スポーツ・健康分科会長 駒井 説夫

### 1. カリキュラム編成の経過

- 6月18日 カリキュラム編成にあたっての改善点について検討した。
- 10月8日 共通教育の負担(ノルマ)について検討し、次年度も従来通りのコマ数開講を確認した。
- 10月15日 平成25年度スポーツ・健康分野時間割について原案に基づき検討した。
- 11月14日 平成25年度スポーツ・健康分野時間割修正案について検討した。
- 11月30日 平成25年度時間割・担当者について提出した。
- 2月12日 平成25年度健康の授業担当者について追加分を提出した。
- 3月13日 スポーツ・健康分野の24年度総括をおこなった。
- 3月21日 平成25年度に向けての改善点について検討した。

### 2. カリキュラム編成の確認・変更点及び改善点

#### (1) 平成24年度を振り返って

スポーツ科学実技に関して、平成23年度は1学期の木曜2時限の受講者が少なく、その対応策として、平成24年度は時間割を変更した。1学期木曜2時限開講科目のうちバドミントンと卓球の時間割を移動することとした。(バドミントンは2時限から4時限へ、卓球は木曜2時限から3時限へ、)これらの変更によりバドミントンは18名から38名へ増加 卓球についても16名から20名(定員を20名と設定した)へ増加した。

平成24年度北体育館改修に伴い2学期北体育館を使用する授業科目について屋外種目への種目変更と南体育館の利用、時間割の変更により対応することとした。その変更による大きなトラブルはなく概ね良好であった。

今年度も健康及びスポーツ科学講義において200名(健康A:229名 D:241名 スポーツ科学講義A:222名 D:260名)を超える受講者があった。一方、スキー・スノーボードは4名、ゴルフ集中は2名と極めて少ないクラスも見られた。

#### (2) 平成25年度に向けて

開講コマ数は従来通りとした。従来開講してきたバレーボールは非常勤講師変更により次年度は開講しないこととし、硬式テニスを開講することとした。受講者数の観点からフィットネスの時間割を2学期木曜3時限から1学期木曜3時限に変更した。エアロビクスも1・2学期水曜の2時限とすることとした。1学期木曜の4時限バドミントンは実施場所を北体育館から南体育館に変更した。

### 3. 課題等

スポーツ科学講義の受講者数が極端に多いクラス(260人)があり、授業効率が非常に悪いことなどが指摘された。評価の更なる厳格化を含めてさらに検討することが確認された。

スキー・スノーボード及びゴルフ(アドバンスコース)は平成24年度受講生が極端に少なくその対応が今後必要となる。平成25年度は、学生への早めの周知、さらにはスキー・スノーボードの場合プロモーションビデオを作成し広報に当たる予定である。

スポーツ科学実技の場合、現在の履修登録システムでは、クラスによっては4年生がほとんどを占める場合がある。履修登録はしたものの、1度も授業を受けない学生、気ままに休む学生がいずれのクラスも多くおり、授業に支障をきたす場合も見られた。そこで、平成25年度はオリエンテーションを実施し、履修意思を確認し、定員オーバーの場合厳正な抽選を実施し、適切な履修ができるよう対応したい。

## 12 日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情分科会長  
神崎 道太郎(国際・地域連携センター)

### 1. カリキュラム等の編成経過

9 月～翌 2 月 カリキュラム等、分科会で話し合う内容についての提案の依頼と  
分科会日程調整(メール会議、電話、個別)

1. 2013 年度コマ数と担当配分について
2. 開講科目名と担当教員の決定
3. 2013 年度コマ数と担当配分、ならびに開講科目名と担当教員  
(曜日等を含む)最終確認

### 2. 問題点と今後の課題

カリキュラム編成の流れについては、基本的に前年度をベースに踏襲した。ただ、前年度から留学生の種別、能力の差、単位取得の必要性の有無等が、複雑に絡み合っているため、その複雑な様相をどう解決していくかが、問題点として浮かび上がってきており、同様の問題を抱えたままになっている。能力別に編成するか、また、一定の能力以上の学生のみ受講可能とするか、あるいは留学生の種別の特別編成にするか等、考えられるところではある。さらに、学部の日本語関連科目とうまく噛み合わせる問題もある。何種類かある日本語関連科目との整合性のある関係性を持たせたものになれば学生への効果もさらに期待できると思われる。

今年度は人文学部から提案のあったセンター、人文学部教員の担当部分について、センターは日本語科目を、人文学部は日本事情科目を、予定通りそれぞれ統一して分担した。科目構成も、日本語科目 I～IV、日本事情科目 I から VI への変更を実施した。

ただそれでも、交換留学生と正規留学生との比率において、どんどん交換留学生の比率が増大してきている。ある授業では、三十五人中たった五人が正規留学生である。さらにその五人中リピーター、つまり単位は修得しているにも関わらずさらに自己の日本語勉学のため単位取得とは関係なく出ている学生が三人で、事実上新規正規学生は二人という状態になっている。通常の共通教育の想定する学生構成とはかけ離れた状況と言わざるを得ない。

どういったカリキュラム等の中にそれぞれ位置づけていかなければならないのか、全学的な視点からも検討していただくことを切に願うものである。

## Ⅲ 自己点検・自己評価部会

### 1 自己点検・評価活動の全体的な状況

自己点検・自己評価部会長 松井 透(理学部)

#### 1. 今年度の自己点検・評価活動の特徴

今年度の自己点検・自己評価部会では、共通教育実施機構会議活動基本方針に従い、(1)「授業改善アクションプラン」の本格実施、(2)初年次科目アンケート結果の分析と改善のための議論、(3)4つの能力(協働実践力・表現力・コミュニケーション力・国際性)育成に重点を置いた授業科目の評価・検証、を活動の柱として位置づけるとともに、各分科会独自の自己点検評価活動を行った。

(1)の「授業改善アクションプラン」の本格実施については、昨年度の試行結果に基づき本格的な実施を行った。

(2)の初年次科目アンケート結果の分析と改善のための議論は、データを詳細に分析し部会としての提言を行った。

(3)の4つの能力育成に重点を置いた授業科目の評価・検証は、大学教育創造部門が開発する評価法を用いて教育効果の評価を行うもので、今年度は一部の課題探求実践セミナーにおいて試験的に実施された。

以下、本項では上記(1)と(2)について述べる。

#### 2. 「授業改善アクションプラン」の本格実施

昨年度の試行を踏まえ、今年度は本部会作成の選択式アンケート(資料1)と記述式アンケート(資料2)を準備した。

1学期の授業改善アクションプランの実施状況を図1に示す。約60%にあたる50の授業で授業改善アクションプランが実施された。アンケートの実施方法を図2に示す。「独自」には学生聴取や独自調査(毎回の学生コメント)などが含まれる。約80%の授業で本部会作成の学生アンケートが用いられていた。学生アンケート実施媒体を図3に示す。約70%の授業で紙媒体による選択式のアンケートが実施されていた。なお、昨年度本部会と大学創造部門が開発したスチューデントフィードバック(SFB)は1件のみの実施であった。

2学期の授業改善アクションプランの実施状況を図4に示す。1学期と同様、約60%にあたる38の授業で授業改善アクションプランが実施された。アンケートの実施方法を図5に示す。「独自」には学生聴取や教員聴取、独自調査(毎回の学生コメントやフィードバックシート)が含まれる。1学期と比較し、SFBの実施数が増加しており、教員間に少しずつSFBという手法そのものが浸透し始めているものと思われる。学生アンケート実施媒体を図6に示す。1学期と同じく約70%の授業で紙媒体による選択式のアンケートが実施されていた。

授業改善アクションプランは平成23～25年度に全教員が1回以上の実施を目指している。次年度に向けて、さらなる教員への働きかけが必要であろう。

#### 3. 初年次科目アンケート結果の分析と改善のための議論

昨年度は単純集計のみが報告されたが、今年度はさらに踏み込んだ分析を試みた。学生アンケートは平成23年1月に、平成20年度入学生(当時3年生)を対象に実施された。アンケート結果の詳細は資料3を参照されたい。この結果から本部会として以下の提言を行った。

- (1) 大学基礎論:授業目的をしっかりと学生に周知させ、学びの基礎をこれまで以上に身に付けさせるとともに、学生の意見をくみ取りつつ、各教員の具体的な研究内容を紹介するなど、より興味をひく内容に変更していくことも必要であろう。
- (2) 学問基礎論:本授業は1年生2学期開講ということもあり、学びの基礎については大学基礎論にまかせ、専門教育に関する事項をさらに深めるべきではないかと考える。
- (3) 課題探求実践セミナー:学部による授業に対する温度差が顕著である。課題発見後の問題解決能力を中心に授業内容のさらなる改善が必要であると思われる。

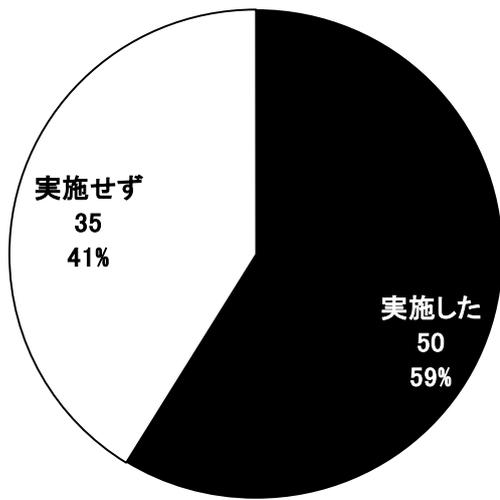


図 1. 1 学期アクションプラン実施状況。  
上から順に項目名、実数、%を示す。  
以下同様。

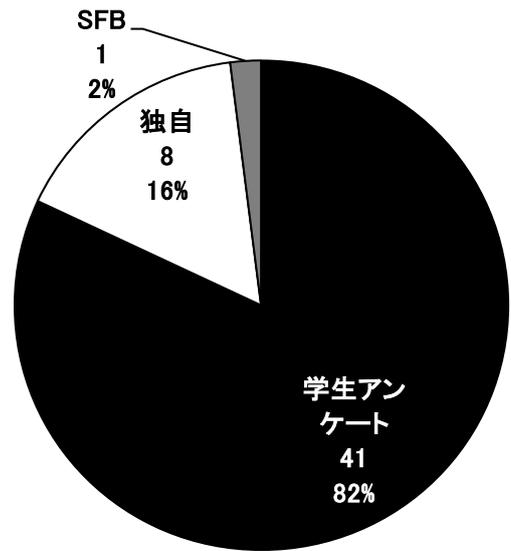


図 2. 1 学期アンケート実施方法。  
独自：学生聴取、独自調査など。  
SFB：スチューデントフィードバック。

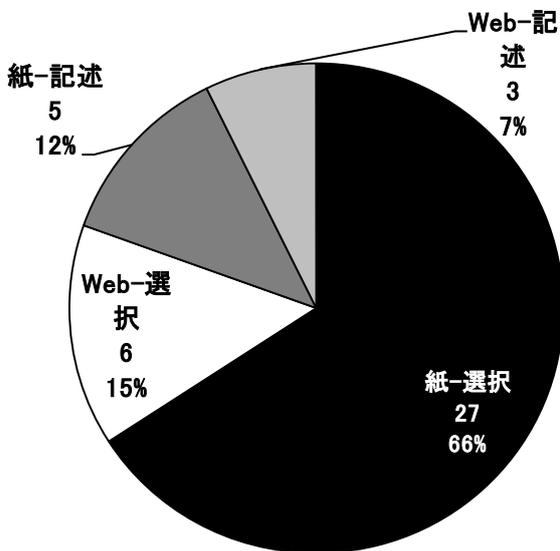


図 3. 1 学期アンケート実施媒体。

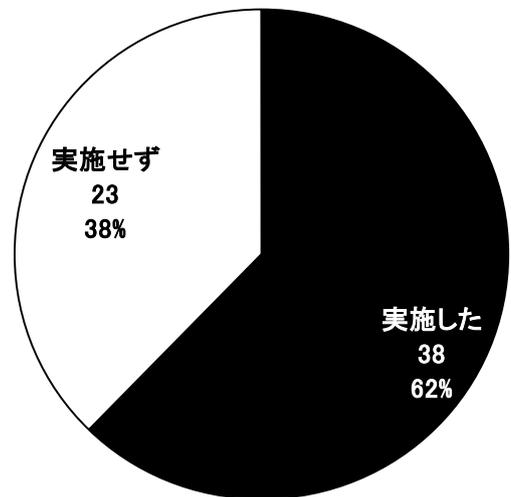


図 4. 2 学期アクションプラン実施状況。

# 学期末アンケート（授業改善アクション検証アンケート）【共通教育】

はい  
いいえ

このアンケートは、教員が第5週目アンケートをもとに実施した授業改善アクションについて検証するためのものです。趣旨をよく理解してアンケートに教えてください。

(記入例)

良い例  悪い例

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

1	毎回の授業の目的や課題は、明確にされていますか？	①	②	③	④	⑤
2	教員の声の大きさや話し方は、聞き取りやすいですか？	①	②	③	④	⑤
3	教員の授業内容の説明は、分かりやすいですか？	①	②	③	④	⑤
4	授業の進み方や内容量は、あなたにとって適切ですか？ (速すぎる・多すぎる=① 適当=③ 遅すぎる・少なすぎる=⑤)	①	②	③	④	⑤
5	配布資料・視聴覚教材・テキストなどは適切に利用されていますか？	①	②	③	④	⑤
6	教員は、受講生が質問や意見を述べる機会をつくり、それらに答えていますか？	①	②	③	④	⑤
7	授業に対する教員の熱意を感じますか？	①	②	③	④	⑤
8	あなたは、この授業に意欲的に取り組んでいますか？	①	②	③	④	⑤
9	あなたは、この授業の予習や復習をしていますか？	①	②	③	④	⑤
10	あなたは、この授業によって、この分野への学問的興味・関心が高まっていますか？	①	②	③	④	⑤
11	あなたは、この授業で身につけることを期待した知識や能力を得ていますか？	①	②	③	④	⑤
12	全体としてこの授業にあなたは満足していますか？	①	②	③	④	⑤
13		①	②	③	④	⑤
14		①	②	③	④	⑤
15		①	②	③	④	⑤
16		①	②	③	④	⑤
17		①	②	③	④	⑤
18		①	②	③	④	⑤
19		①	②	③	④	⑤
20		①	②	③	④	⑤
21		①	②	③	④	⑤
22		①	②	③	④	⑤
23		①	②	③	④	⑤
24		①	②	③	④	⑤
25		①	②	③	④	⑤

◆この授業に関して、あなたが感じていることを自由に記述して下さい。



ありがとうございました。

## 共通教育「5週目アンケート」(回答理由選択肢式)

このアンケートは、授業期間内にこの授業を改善するために受講生の意見を聴くものです。  
 教員を評価するものではなく、また皆さんの成績に関係するものでもありません。  
 その点をよく理解した上で、この授業を良くするという観点から、適切な回答をお願いします。

	どちらかというといえ	どちらかというといえ	どちらかというといえ	はい
	はい	はい	はい	はい

### 【全授業共通質問】

★下記の質問に、はい①～いい⑤の5段階評価で回答して下さい。

また、そのように回答した理由を答えて下さい(理由は複数回答可)。[いずれも回答番号を塗りつぶして下さい]

<b>1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか</b> ①授業で学問の最先端に触れる話をしている ③授業内容が学問や社会の現代的課題に込えている ⑤授業内容が受講生の関心・興味に合っている ⑦その他→( )	① ② ③ ④ ⑤ (⑦にチェックした方は左の( )に理由を記述して下さい)
<b>2. この授業で教員は、受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っていると思いますか</b> ①シラバスに受講に当たって求められる能力などを明示している ③授業開始時または授業期間中に学生の能力やニーズに関する調査(アンケートや小テストなど)をしている ⑤受講生の反応を見ながら授業を行っている ⑦学生の理解度を確かめるような問い掛けをしている ⑨その他→( )	① ② ③ ④ ⑤ (⑨にチェックした方は左の( )に理由を記述して下さい)
<b>3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか</b> ①授業の目的・目標を明確にしている ③声の大きさや話し方が適切である ⑤説明の仕方が適切である ⑦授業を進める速度が適切である ⑨配布資料・視聴覚資料・教材などが適切である ⑪板書が適切である ⑬その他→( )	① ② ③ ④ ⑤ (⑬にチェックした方は左の( )に理由を記述して下さい)
<b>4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか</b> ①授業の予習・復習を促している ③学生が時間外学習を行うための課題を提示している ⑤学生の自主的学習に対する助言や支援をしている ⑦質問に対して丁寧に答えている ⑨課題やレポート提出物に対してフィードバックをしている ⑪授業に参加型学習を取り入れている ⑬その他→( )	① ② ③ ④ ⑤ (⑬にチェックした方は左の( )に理由を記述して下さい)
<b>5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか</b> ①授業を良くするための工夫や熱意が感じられる ③アンケートやレポートで得た意見を授業に反映させている ⑤学生に対して授業を良くするために「皆さんには～～して欲しい」といった努力を求める要求をしている ⑦その他→( )	① ② ③ ④ ⑤ (⑦にチェックした方は左の( )に理由を記述して下さい)
<b>6. この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか</b> <b>【回答の理由】</b>	① ② ③ ④ ⑤ 左に理由を記述して下さい

### 【授業別の質問】(授業担当教員から指示がある場合、その指示にしたがって回答して下さい)

	はい	はい	はい	いいえ
	はい	はい	はい	いいえ

1	① ② ③ ④ ⑤
2	① ② ③ ④ ⑤
3	① ② ③ ④ ⑤
質問1の回答理由	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩
質問2の回答理由	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩
質問3の回答理由	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩

### 【自由記述】

あなたが、この授業に関して感じていることを、自由に記述して下さい

とくに、この授業の「良い点」および「改善して欲しい点」について、強く感じていることを記述して下さい

## 共通教育「5週目アンケート」(回答理由記述式)

このアンケートは、授業期間内にこの授業を改善するために受講生の意見を聴くものです。  
 教員を評価するものではなく、また皆さんの成績に関係するものでもありません。  
 その点をよく理解した上で、この授業を良くするという観点から、適切な回答をお願いします。

はい	どちらかというとはいいえ	どちらかというといいえ
----	--------------	-------------

### 【全授業共通質問】

★下記の質問に、はい①～いいえ⑤の5段階評価で回答して下さい。〔回答番号を塗りつぶして下さい〕  
 また回答の理由について記述して下さい。

1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか 【回答の理由】	① ② ③ ④ ⑤

2. この授業で教員は、受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っていると思いますか 【回答の理由】	① ② ③ ④ ⑤

3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか 【回答の理由】	① ② ③ ④ ⑤

4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか 【回答の理由】	① ② ③ ④ ⑤

5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか 【回答の理由】	① ② ③ ④ ⑤

6. この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか 【回答の理由】	① ② ③ ④ ⑤

### 【授業別の質問】(授業担当教員から指示がある場合、その指示にしたがって回答して下さい)

はい	いいえ
----	-----

1 【回答の理由】	① ② ③ ④ ⑤

2 【回答の理由】	① ② ③ ④ ⑤

3 【回答の理由】	① ② ③ ④ ⑤

### 【自由記述】

あなたが、この授業に関して感じていることを、自由に記述して下さい  
 とくに、この授業の「良い点」および「改善して欲しい点」について、強く感じていることを記述して下さい

## 共通教育「15週目アンケート」(回答理由選択肢式)

このアンケートは、教員が第5週目アンケートをもとに実施した「授業改善アクションプラン」について、その効果を検証するものです。

教員と学生と一緒に授業を良くしていくという趣旨をよく理解して、アンケートに回答して下さい。

### 【全授業共通質問】

★下記の質問に、はい①～いい⑤の5段階評価で回答して下さい。  
また、そのように回答した理由を答えて下さい(理由は複数回答可)。[いずれも回答番号を塗りつぶして下さい]

	どちらかというとはいい	どちらかというともいいえ	どちらかというともいいえ	はい
--	-------------	--------------	--------------	----

1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか ①授業で学問の最先端に触れる話をしている ②授業で学問の最先端に触れる話をしていない ③授業内容が学問や社会の現代的課題に込んでいる ④授業内容が学問や社会の現代的課題に込えていない ⑤授業内容が受講生の関心・興味に合っている ⑥授業内容が受講生の関心・興味に合っていない ⑦その他→( )	① ② ③ ④ ⑤ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ (⑦にチェックした方は左の( )に理由を記述して下さい)
2. この授業で教員は、受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っていると思いますか ①シラバスに受講に当たって求められる能力などを明示している ②シラバスに受講に当たって求められる能力などを明示していない ③授業開始時または授業期間中に学生の能力やニーズに関する調査(アンケートや小テストなど)をしている ④授業開始時または授業期間中に学生の能力やニーズに関する調査(アンケートや小テストなど)をしていない ⑤受講生の反応を見ながら授業を行っている ⑥受講生の反応を見ながら授業を行っていない ⑦学生の理解度を確かめるような問い掛けをしている ⑧学生の理解度を確かめるような問い掛けをしていない ⑨その他→( )	① ② ③ ④ ⑤ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ (⑨にチェックした方は左の( )に理由を記述して下さい)
3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか ①授業の目的・目標を明確にしている ②授業の目的・目標を明確にしていない ③声の大きさや話し方が適切である ④声の大きさや話し方が適切でない ⑤説明の仕方が適切である ⑥説明の仕方が適切でない ⑦授業を進める速度が適切である ⑧授業を進める速度が適切でない ⑨配布資料・視聴覚資料・教材などが適切である ⑩配布資料・視聴覚資料・教材などが適切でない ⑪板書が適切である ⑫板書が適切でない ⑬その他→( )	① ② ③ ④ ⑤ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ (⑬にチェックした方は左の( )に理由を記述して下さい)
4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか ①授業の予習・復習を促している ②授業の予習・復習を促していない ③学生が時間外学習を行うための課題を提示している ④学生が時間外学習を行うための課題を提示していない ⑤学生の自主的学習に対する助言や支援をしている ⑥学生の自主的学習に対する助言や支援をしていない ⑦質問に対して丁寧に答えている ⑧質問に対して丁寧に答えていない ⑨課題やレポート提出物に対してフィードバックをしている ⑩課題やレポート提出物に対してフィードバックをしていない ⑪授業に参加型学習を取り入れている ⑫授業に参加型学習を取り入っていない ⑬その他→( )	① ② ③ ④ ⑤ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ (⑬にチェックした方は左の( )に理由を記述して下さい)
5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか ①授業を良くするための工夫や熱意が感じられる ②授業を良くするための工夫や熱意が感じられない ③アンケートやレポートで得た意見を授業に反映させている ④アンケートやレポートで得た意見を授業に反映させていない ⑤学生に対して授業を良くするために「皆さんには～して欲しい」といった努力を求めている ⑥学生に対して授業を良くするための努力を求めている要求をしていない ⑦その他→( )	① ② ③ ④ ⑤ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ (⑦にチェックした方は左の( )に理由を記述して下さい)
6. この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか 【回答の理由】	① ② ③ ④ ⑤ 左に理由を記述して下さい

### 【授業別の質問】(授業担当教員から指示がある場合、その指示にしたがって回答して下さい)

1	① ② ③ ④ ⑤
2	① ② ③ ④ ⑤
3	① ② ③ ④ ⑤
質問1の回答理由	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩
質問2の回答理由	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩
質問3の回答理由	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

### 【授業改善アクションプランの効果】

1. 授業改善アクションプラン「○○○○○」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか	
2. 授業改善アクションプラン「☆☆☆☆☆」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか	
3. 授業改善アクションプラン「△△△△△」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか	

※「○○○○○」等の部分は、当該授業担当教員が作成した「授業改善アクションプラン」

### 【学生の諸能力の獲得(授業到達目標の達成)】

1. あなたは「●●●●●」を達成できたと思いますか	
2. あなたは「★★★★★」を達成できたと思いますか	
3. あなたは「▲▲▲▲▲」を達成できたと思いますか	

※「●●●●●」等の部分は、当該授業のシラバスに記されている授業到達目標

### 【授業改善アンケートの効果と負担】

1. 授業改善のためのアンケートに回答することにより、受講生の声によって授業が改善されたと感じますか	
2. 授業改善のためのアンケートに回答することを負担に感じましたか	

### 【自由記述】

あなたが、この授業に関して感じていることを、自由に記述して下さい  
とくに、この授業の「良かった点」および「改善して欲しい点」について、強く感じていることを記述して下さい

## 共通教育「15週目アンケート」(回答理由記述式)

このアンケートは、教員が第5週目アンケートをもとに実施した「授業改善アクションプラン」について、その効果を検証するものです。教員と学生が一緒になって授業を良くしていくという趣旨をよく理解して、アンケートに回答して下さい。

	どちらかというといいいえ		どちらともいえない	
はい	①	②	③	④
はい	⑤			

### 【全授業共通質問】

★下記の質問に、はい①～いいえ⑤の5段階評価で回答して下さい。[回答番号を塗りつぶして下さい]  
また回答の理由について記述して下さい。

1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか 【回答の理由】	①	②	③	④	⑤
2. この授業で教員は、受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っていると思いますか 【回答の理由】	①	②	③	④	⑤
3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか 【回答の理由】	①	②	③	④	⑤
4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか 【回答の理由】	①	②	③	④	⑤
5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか 【回答の理由】	①	②	③	④	⑤
6. この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか 【回答の理由】	①	②	③	④	⑤

### 【授業別の質問】(授業担当教員から指示がある場合、その指示にしたがって回答して下さい)

	はい		いいえ	
①	②	③	④	⑤

1 【回答の理由】	①	②	③	④	⑤
2 【回答の理由】	①	②	③	④	⑤
3 【回答の理由】	①	②	③	④	⑤

### 【授業改善アクションプランの効果】

1. 授業改善アクションプラン「○○○○○」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか					
2. 授業改善アクションプラン「☆☆☆☆☆」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか					
3. 授業改善アクションプラン「△△△△△」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか					

※「○○○○○」等の部分は、当該授業担当教員が作成した「授業改善アクションプラン」

### 【学生の諸能力の獲得(授業到達目標の達成)】

1. あなたは「●●●●●」を達成できたと思いますか					
2. あなたは「★★★★★」を達成できたと思いますか					
3. あなたは「▲▲▲▲▲」を達成できたと思いますか					

※「●●●●●」等の部分は、当該授業のシラバスに記されている授業到達目標

### 【授業改善アンケートの効果と負担】

1. 授業改善のためのアンケートに回答することにより、受講生の声によって授業が改善されたと感じますか					
2. 授業改善のためのアンケートに回答することを負担に感じましたか					

### 【自由記述】

あなたが、この授業に関して感じていることを、自由に記述して下さい  
とくに、この授業の「良かった点」および「改善して欲しい点」について、強く感じていることを記述して下さい

# 初年次科目アンケートの分析と提言

## 共通教育自己点検・自己評価部会

### 1. はじめに

平成20年から高知大学共通教育新カリキュラムは初年次科目、教養科目、共通専門科目に区分された。初年次科目は「学びの転換」、「基礎的スキルの習得」、「学問への動機付け」、「キャリア形成支援」を柱に、入学後すぐに学びの転換を図り、自分で考え行動できる能力、コミュニケーション能力、表現力の習得を目指している。また、キャリア形成への動機付けを図ることで、学士課程における自律的な学習を支えることが期待されている(高知大学共通教育実施機構会議2012)。

初年次科目は「大学基礎論」(2単位)、「学問基礎論」(2単位)、「大学英語入門」(2単位)、「英会話」(2単位)、「情報処理」(2単位)、「課題探求実践セミナー」(2単位)からなる(ただし人文学部では課題探求実践セミナーを必修指定していない)。今回、語学と独自にアンケートを実施している「情報処理」をのぞく初年次科目の教育効果を検証するため、平成20年入学生を対象に学生アンケートを実施した。

貴重な授業時間を割いて学生アンケートの実施にご協力頂いた教員の皆様に感謝いたします。

### 2. 調査方法

学生アンケートは平成23年1月に、平成20年度入学生(当時3年生)を対象に専門科目の授業中に実施され、全体の41%にあたる573名から回答を得た。アンケート内容については資料1を参照されたい。アンケートデータの分析にはR Version 2.15.1(R Core Team 2012)を、自由記述欄の分析にはMeCab Ver. 0.994(工藤 2012)およびKH Coder Ver. 2.b.29.g(樋口 2004, 2012)をそれぞれ用いた。

### 3. アンケート結果

#### 【1】所属学部・受講授業科目

##### (1-1) 調査対象学生の学部別割合(図1)

学生数と比較して、医学部と人文学部からの回答がやや少なくなっている。

特に医学部の3年次は、多数の授業に学生が分散するため、アンケートの実施そのものが難しかったためと考えられる。

##### (1-2) 課題探求実践セミナー履修科目(図2)

課題探求実践セミナーは各学部開講授業のほか、「自立協働入門」、「地域協働入門」、「自由探求学習」、「国際協力入門」、「学びを創る」、「学びを考える」の6科目が開講されている。

46%が各学部開講科目を履修している。「履修していない」と回答したのは人文学部の学生で、これは必修ではないためである。

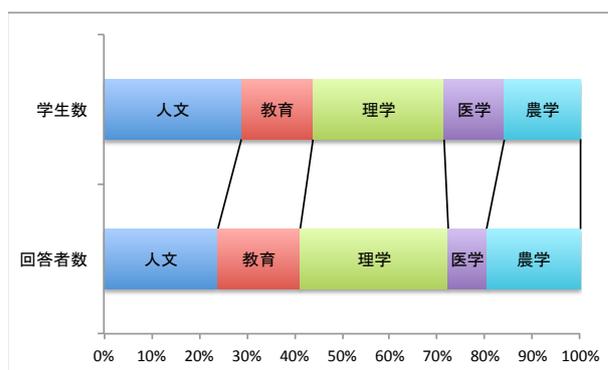


図1. 学生数と回答者数の割合。

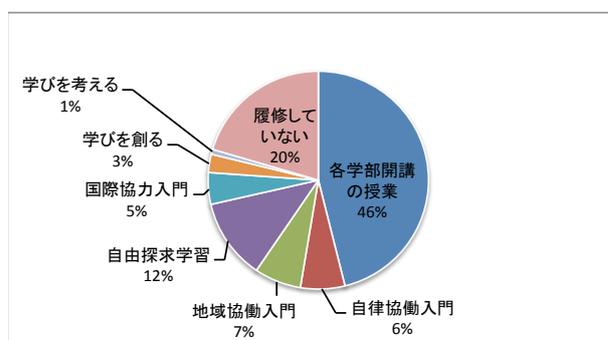


図2. 課題探求実践セミナー履修科目。

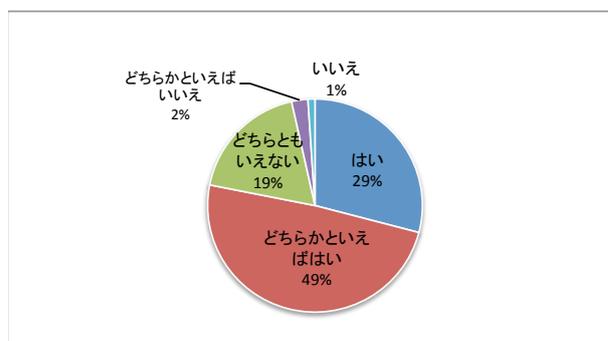


図3. 大学で学ぶことの意義と目的についての理解。

#### 【2】現在のあなたの状況について

##### (2-1) 大学で学ぶことの意義と目的についての理解(図3)

78%の学生が学ぶことの意義と目的意識を持っていると考えられるが、明確に「はい」と回答した学生は29%にとどまっていた。

##### (2-2) 「教わる」から「学ぶ」への姿勢転換(図4)

67%の学生が学びの転換を意識して学習しているが、明確に「はい」と回答した学生は23%にとどまっていた。

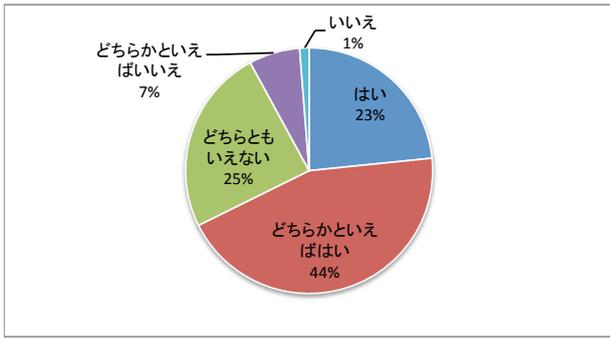


図4. 「教わる」から「学ぶ」への姿勢転換の理解。

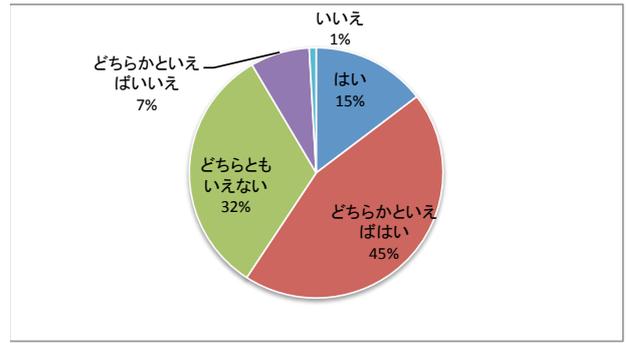


図7. 課題を発見し問題を理解し解決する能力。

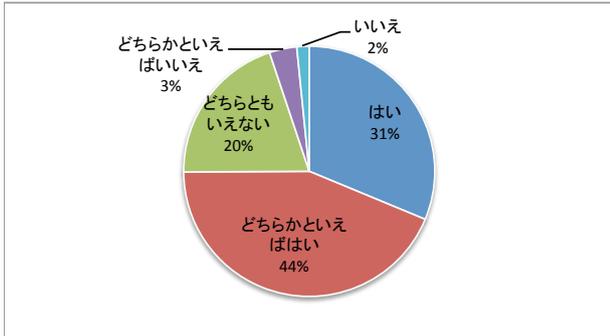


図5. 卒業時に身につけておくべき能力。

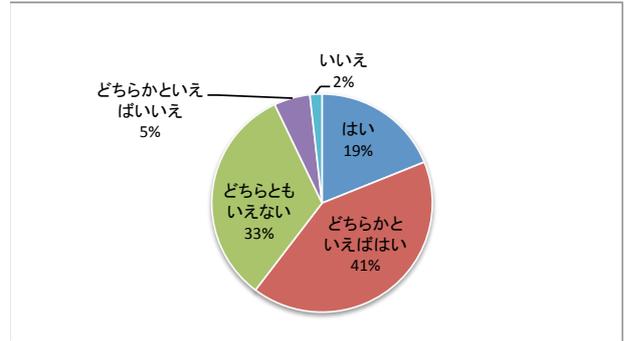


図8. 双方向コミュニケーション能力。

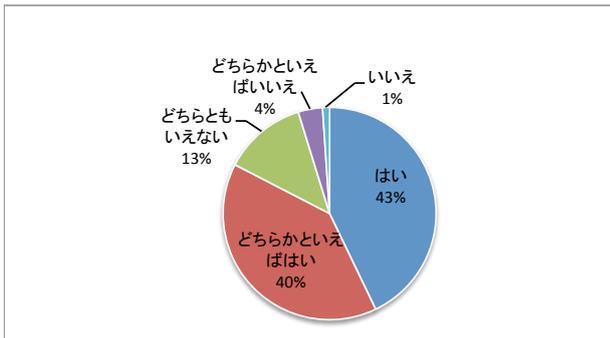


図6. 専攻する学問への関心。

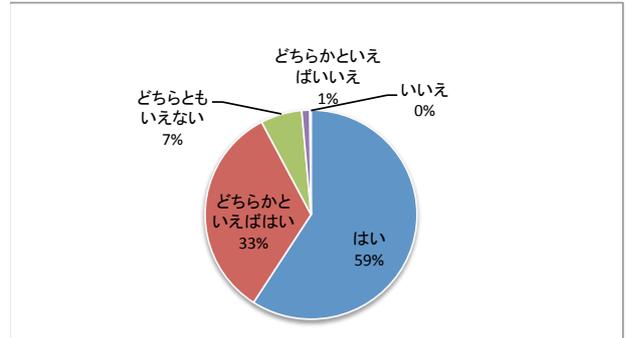


図9. 異なる価値観を持つ人と接することの重要性。

(2-3) 卒業時にどのような能力を身につけておくべきかの理解(図5)

75%の学生が卒業時に必要な能力理解し考えて学習を行っている。このことは次設問である専門教育への関心とも関係していると思われる。

(2-4) 専攻する学問(専門教育)への関心(図6)

83%の学生が専門に関心を持ち意欲的に学習している。明確に「はい」と回答した学生は43%であった。専攻する分野への興味は高いと考えられる。

(2-5) 課題を発見し問題を理解し解決する能力(図7)

60%の学生が課題を発見、問題の理解、解決方法を考える能力が身についたとしている。しかし、明確に「はい」と回答した学生はわずか15%であり、また、40%近くの学生は、これらの能力が身についたとは言えないと回答している。

(2-6) 双方向のコミュニケーション能力(図8)

(2-5)の質問と同様の結果で、40%近くの学生が双方向コミュニケーション能力についてしっかりと身についたとは考えていないものと思われる。

(2-7) 異なるものの見方や価値観をもつ人と接することの重要性(図9)

90%以上の学生が異なるものの見方や価値観をもつ人と接することの重要性について理解している。

(2-8) グループで議論し合意形成するための手法を身につけているかどうか(図10)

(7)や(8)の質問と同様の回答結果となった。40%近くの学生はしっかりと身についたとは考えていないものと思われる。

【3】大学基礎論について

(3-1) 学びの基礎としての大学基礎論の効果について(図11)

大学基礎論に効果があったと回答した学生は42%で

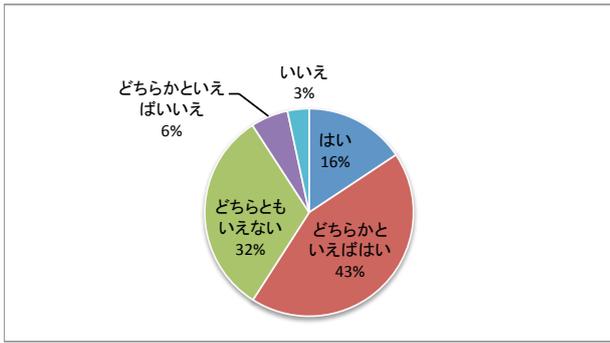


図10. グループ議論での合意形成の手法.

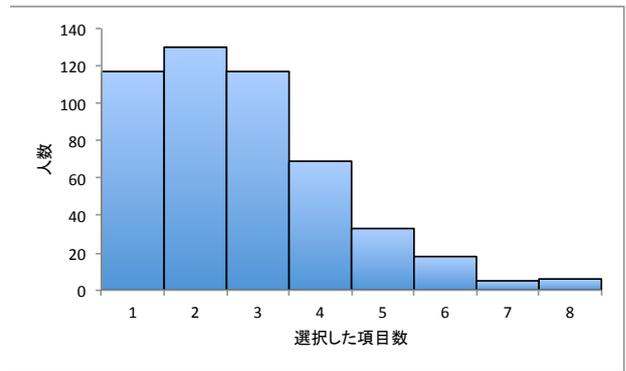


図13. 大学基礎論の効果. 選択項目数.

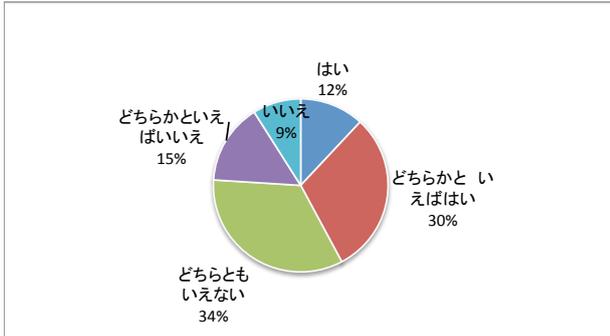


図11. 学びの基礎としての大学基礎論の効果.

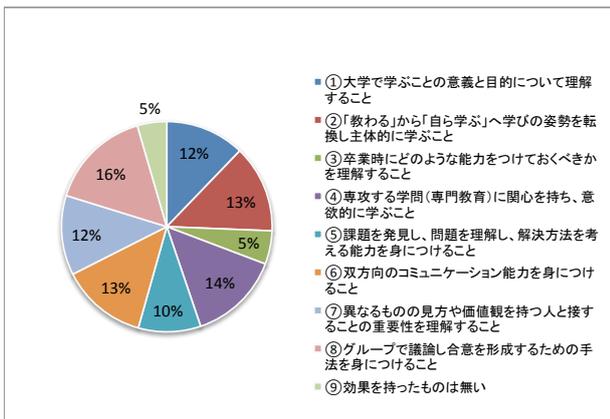


図12. 大学基礎論の効果. 項目別.

あるが、明確に「はい」と回答した学生は12%にとどまる。

### (3-2) 大学基礎論の効果 項目別(図12)

「卒業時にどのような能力を身につけておくべきか」が低いほかは、効果があったものはどれも大きな差は見られなかった。これは、この設問が複数回答可能であったため、回答が分散した可能性が高い。

学生一人が選択した項目数を調べたところ、2項目を選択した学生が最も多く、1~3項目を選択した学生は全体の3/4近くになった(図13)。

そこで、学生個人の反応パターンや設問間の関係を見るため、まず各学生がどの項目を選んだのかが在不在データに変換した。このデータをもとに、類似度ユークリッド距離を用い、Ward法による2次元クラスタ

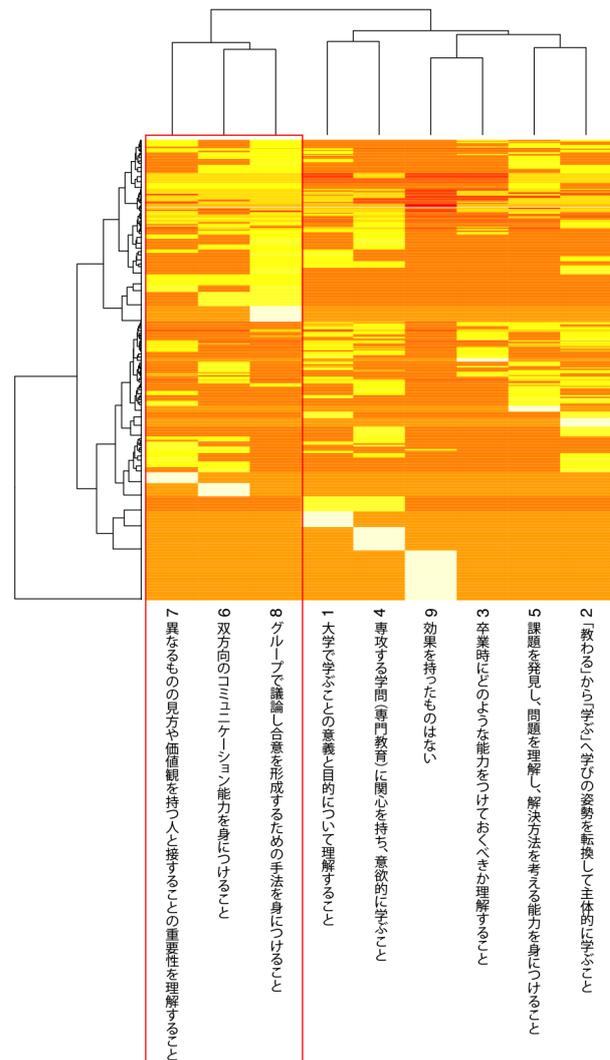


図14. 大学基礎論の効果. ヒートマップ.

分析を行いヒートマップ(Eisen et al. 1998)を作成した(図14)。縦軸に各学生を、横軸に設問をとっている。ヒートマップでは色が薄いほど回答が多くなっている。例えば最下行の学生は「効果を持ったものはない」だけを回答している。この結果、設問についてはコミュニケーションに関連する質問のグループと、その他の回答に大別された。また、複数回答者が多いことが分かる。

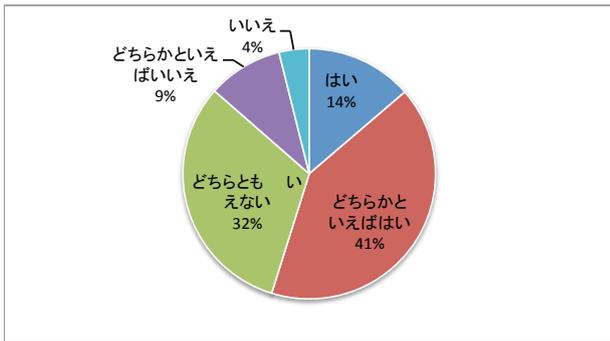


図15. 大学の役割理解のための大学基礎論。

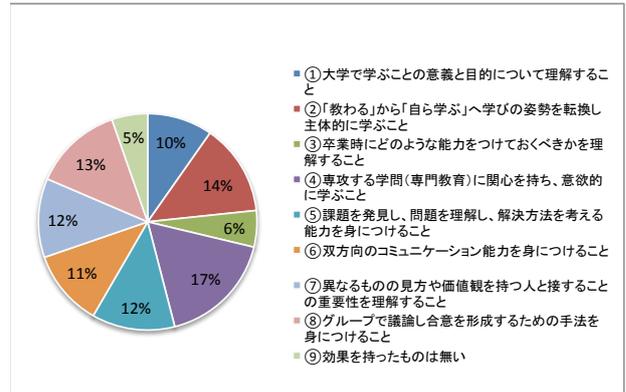


図18. 学問基礎論の効果。

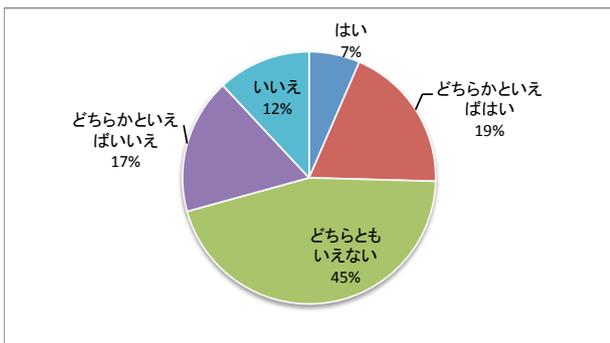


図16. 大学の役割と大学基礎論の効果。

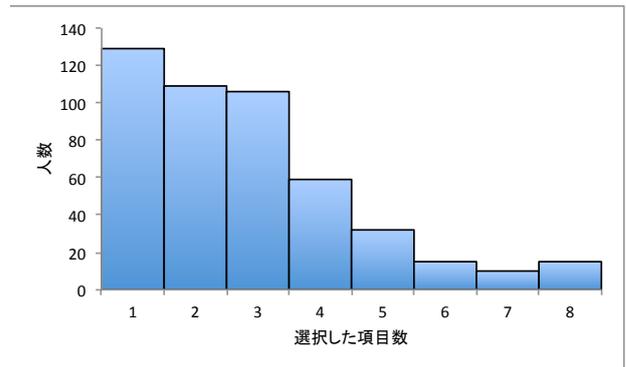


図19. 学問基礎論の効果. 選択項目数。

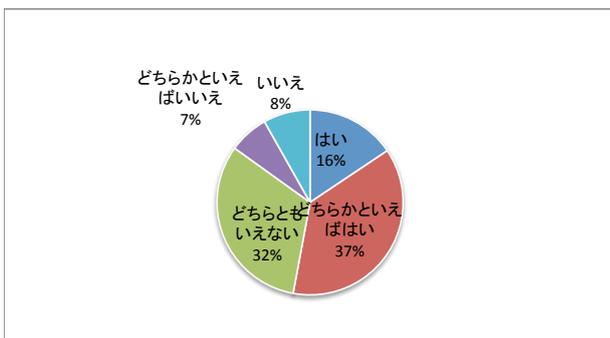


図17. 学びの基礎としての学問基礎論。

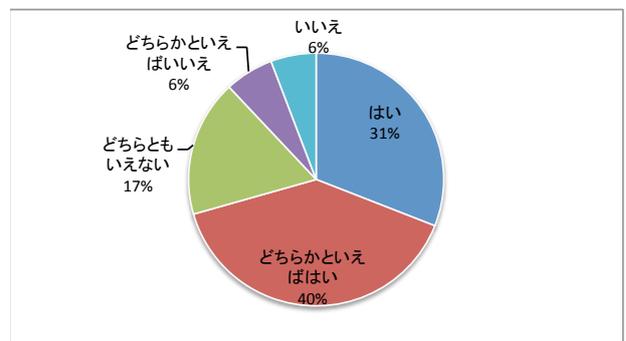


図21. 学びの基礎としての課題探求実践セミナーの効果。

(3-3-1) 地域社会や国際社会における大学の役割についての理解 (図15)

設問がやや漠然としているためか、「はい」と回答した学生はわずか14%、「どちらかといえばはい」を含めても55%にとどまった。

(3-3-2) 大学の役割と大学基礎論の効果 (図16)

地域社会や国際社会における大学の役割について、大学基礎論の効果があつたと回答した学生は、わずか28%に過ぎなかった。また「どちらともいえない」と回答した学生は45%にもなる。

【4】学問基礎論について

(4-1) 学問基礎論は大学での学びの基礎を培う授業としての効果 (図17)

学びの基礎を培う授業として、学問基礎論に効果ありと回答した学生は53%にとどまっている。

(4-2) 学問基礎論の効果 (図18)

「卒業時にどのような能力をつけておくべきか」が低い以外は、どの項目も大差ない結果となった。学生一人が選択した項目数は1項目が最も多く、1~3項目を選択した学生は全体の3/4近くになった (図19)。

この設問も複数回答可能であったため、大学基礎論と同様にクラスター分析を行い、ヒートマップを作成した (図20)。この結果、「大学で学ぶことの意義と目的」や「卒業時に必要な能力」、「効果なし」からなるグループとその他の設問からなるグループに分かれた。

学問基礎論はその目的として「専門教育に対する学びの展望を構築すること」があげられる。この事について、アンケートの回答割合としては最も高くなっており、やや効果があつたものと思われる。

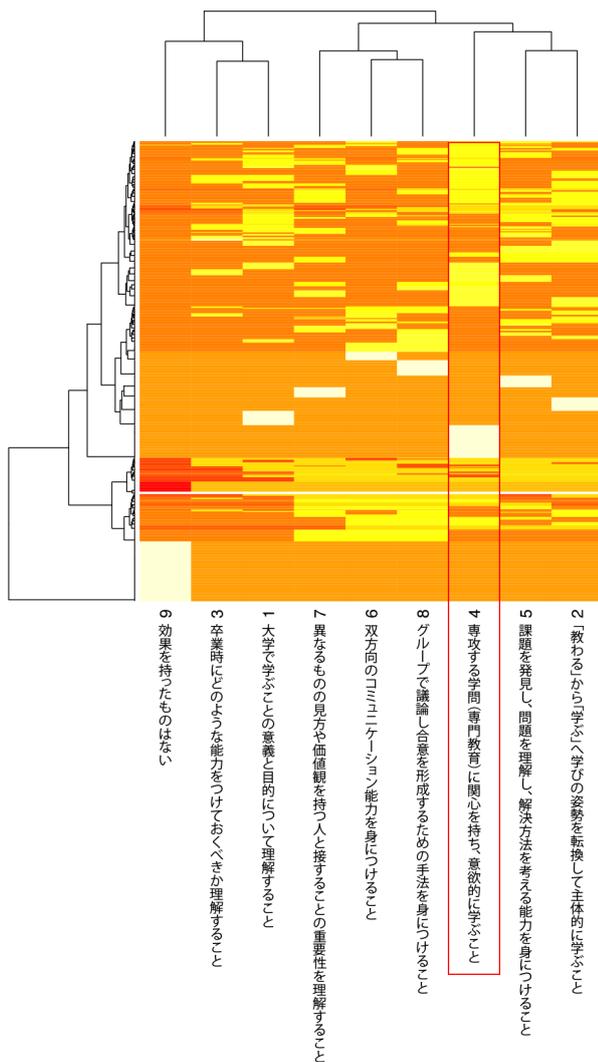


図20. 学問基礎論の効果. ヒートマップ.

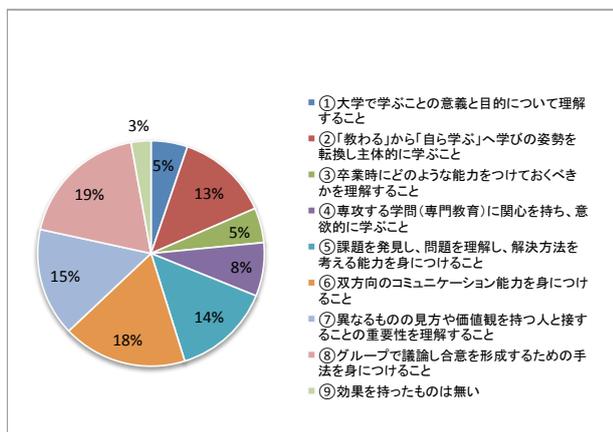


図22. 課題探求実践セミナーの効果.

【5】課題探求実践セミナーについて  
 (5-1) 大学での学びの基礎をととしての課題探求実践セミナーの効果(図21)

70%以上の学生が課題探求実践セミナーに学びの基礎としての効果があると回答している。

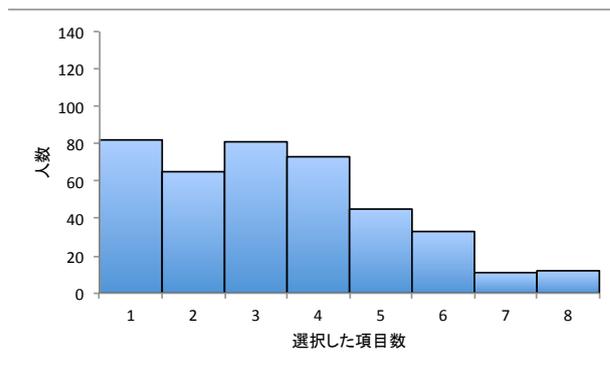


図23. 課題探求実践セミナーの効果. 選択項目数.

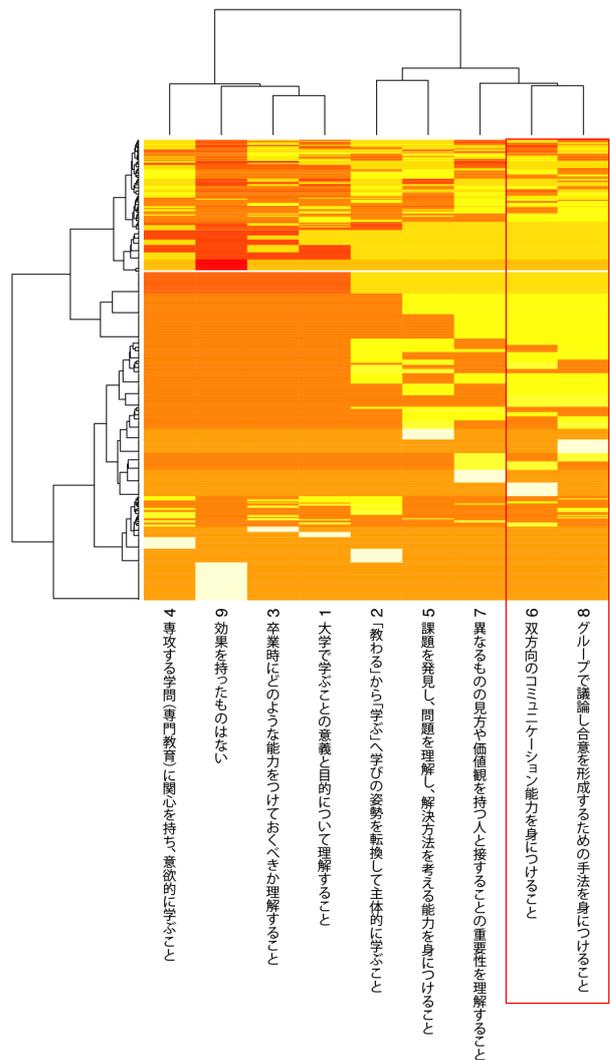


図24. 課題探求実践セミナーの効果. ヒートマップ.

(5-2) 課題探求実践セミナーの効果(図22)

課題探求実践セミナーはグループワークを基本とするため、グループ議論や双方向コミュニケーションの割合が高くなっていった。学生一人が選択した項目数は1項目と3項目が多いが、1~4項目までは極端な差は見られなかった(図23)。

この設問も複数回答可能であったため、大学基礎論と同様にクラスター分析を行い、ヒートマップを作成した

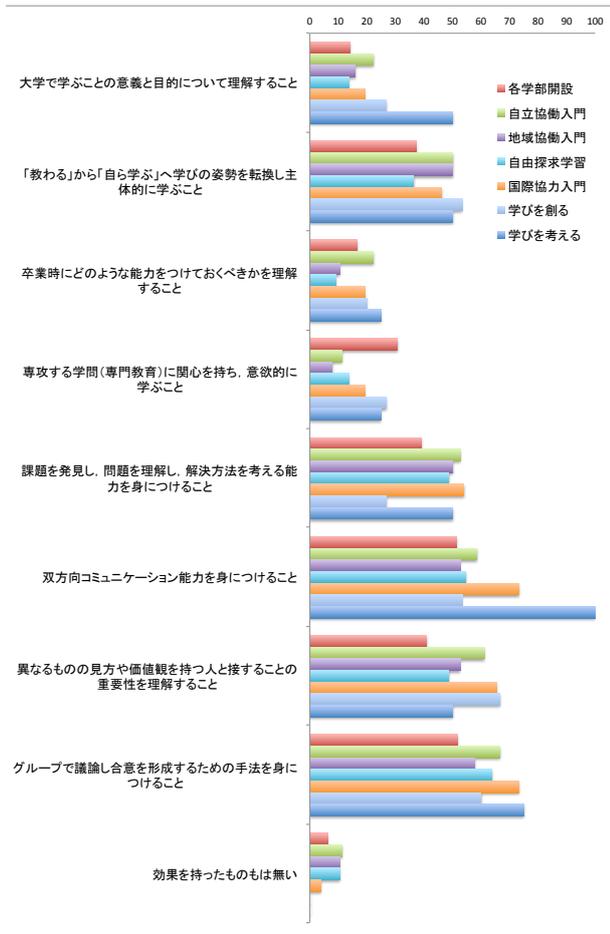


図25. 課題探求実践セミナーの効果. 授業別.

(図24). この結果からもグループ議論や双方向コミュニケーションがよくまとまっていた。課題探求実践セミナーは多くの授業が開講されているため、授業ごとの比較も行った(図25)。この結果、少人数のものほど効果が高い事がわかる。

(5-3-1)「何が問題なのか？」を考える意味(図26)  
82%の学生が「何が問題なのか？」を考える意味を理解している。課題探求実践セミナーの目的のひとつである「課題発見」について、学生に浸透しているものと思われる。

(5-3-2)答がない課題に取り組む意味(図27)  
76%の学生が答がない課題に取り組むことを理解している。課題探求実践セミナーで重視されている問題解決能力の少なくとも一部は学生に浸透しているものと思われる。

(5-3-3)授業時間以外の学習をする意味(図28)  
時間外学習も84%が理解している。ただし、それを実践しているかどうかの質問は行っていないため、学生が実際に時間外学習を行っているかどうかは不明である。

## [6] 自由記述の分析

今回のアンケートでは、大学基礎論、学問基礎論、課題探求実践セミナーそれぞれで自由記述形式の項目が設定されており、いずれの科目も約40%の学生が回

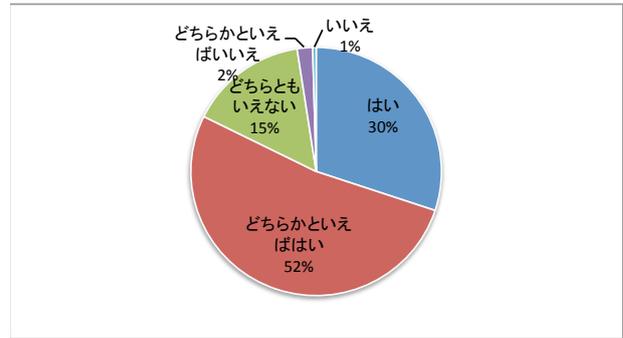


図26. 「何が問題なのか？」を考える意味.

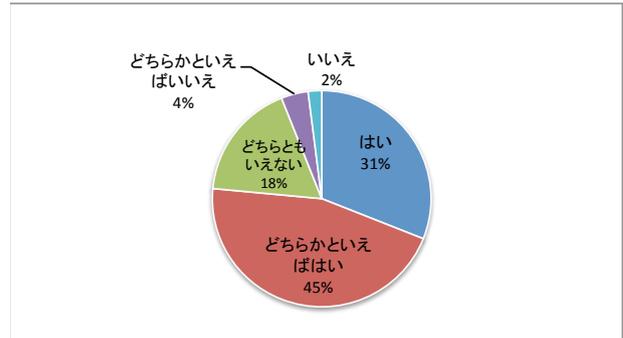


図27. 答のない課題に取り組む意味.

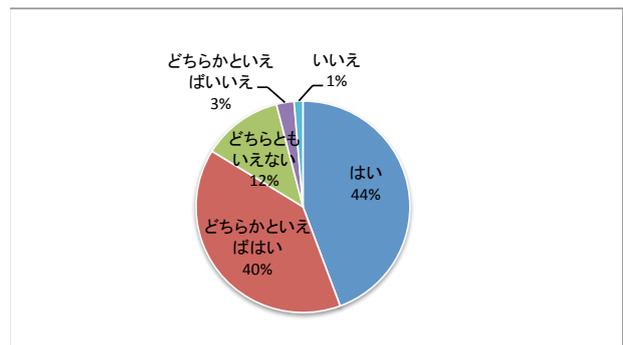


図28. 時間外学習の意味.

答していた。そこで、自由記述形式の回答内容を客観的に分析するため、テキストマイニング技術(那須川 2006, 金 2009)を用い、記述された文章を形態素(意味の最小単位)に分割しその出現数を調べる事で、書き込み内容の大まかな傾向の把握を試みた。自由記述欄の回答全文は資料2を参照されたい。

今回はさらに、分割された形態素から出現回数を算出し、最小出現回数が5以上のものを用いた共起ネットワークマップ(樋口 2012. 出現パターンの類似した語、すなわち共起の程度が強い語をKodama & Kawai 1989の方法で結んだ図。ただし、語と語が近くに配置されているだけでは、それらの間に強い共起があるわけではない)を作成した。

### (1) 大学基礎論での自由記述(表1左, 図29)

回答数は228で、記述された268の文章から539の形態素が区分された。出現回数の多い20位までを表1左に示す。最も多く出現したのは「ない」の94回で、「する」、「思う」、「大学」の順に続く。

「ない」を含む最も多くの語からなるクラスターAは、授業内容全般に関するもので、下方に「よい」や「できる」などの肯定的でポジティブな語が位置し、上方には「ない」や「ん」(今回の分析では否定的助動詞として扱われている)など否定的でネガティブな語が位置していた。「覚える」は「ない」と共起しているが、これは表2に示す通り形態素分析では「覚え」で区別され、「覚えていない」、「覚えてない」のように「ない」と結びついている場合が多いためである。「分かる」も同様である(表2)。また、否定的助動詞「ん」は「大学基礎論」と共起しており、授業そのものに否定的な意見とみなす事ができる。

クラスターBは、「人」、「様々」、「話」、「聞く」、「考える」、「コミュニケーション」などの語からなり、大学基礎論の目的の一つである「相手の話をよく聞き理解し、自分の考えを分かり易く伝える」という基本的コミュニケーション能力の向上を図ることに関連しているクラスターであると考えられる。同様にクラスターDは、「グループ」、「話し合い」、「作る」などからなり授業形態に関するものであると考えられる。

クラスターCは、「パワーポイント」、「発表」、「慣れる」など、プレゼンテーションに関連した語からなり、「楽しい」や「とても」も含まれる事から、極めて肯定的かつポジティブな意見とみなすことができる。

クラスターFは、「意味」や「ない」などの語からなり、実際の回答も「意味がない」などの授業そのものに否定的な意見のクラスターであると考えられる。クラスターHでは「印象」と「残る」が非常に強く共起しているが、表2のように「残る」は「残っていない」や「残らない」など否定的な意見が多くを占めていた。このため、このクラスターも「印象に残らない」とする意見の集まりとなっている。

クラスターEは、「先生」、「研究」、「内容」、「もっと」からなり、教員に対する研究内容をより詳しく紹介してもらいたいという要望であると考えられる。

## (2) 学問基礎論での自由記述(表1中央, 図30)

回答数は218で、記述された262の文章から553の形態素が区分された。出現回数の多い20位までを表1中央に示す。最も多く出現したのは「する」の82回で、「ない」、「思う」、「ある」の順に続く。

「する」を含む31もの語からなるクラスターAは、授業内容全般に関するものとなっていた。クラスターBは、「グループ活動」、「人」など授業形態に関するものであると考えられる。また、クラスターDはこの授業が「考える」、「機会」、と「なる」意見で、クラスターEからは授業そのものが「グループ」を「作る」、「場」となっていることが分かる。クラスターGは「コース」、「選択」、「分かれる」からなり、理学部や農学部で行われているコース選択に関係しているものと考えられる。

クラスターCは授業題目である「大学基礎論」と「学問基礎論」、否定的助動詞「ん」、「よく」、「分かる」(ただし、「ない」と共起する否定的なもの)、「記憶」からなる。これらは授業内容が記憶にない、学問基礎論と大学基礎論の違いが分かりにくいなど、授業内容への意見と考えられる。同様にクラスターFは授業内容を覚えていない意見となっている。

## (3) 課題探求実践セミナーの自由記述(表1右, 図31)

回答数は181、記述された241の文章から654もの形態素が識別された。これは、大学基礎論や学問基礎論と比較し、受講生数・回答数とも少ないにも関わらず多用な表現が用いられていることを意味する。出現回数の多い20位までを表1右に示す。最も多く出現したのは学問基礎論と同様に「する」の136回で、「自分」、「ない」、「できる」の順に続く。

「する」を含むクラスターCは、「グループ」、「自分」、「できる」、「人」、「発表」などからなり、授業内容に関連したものと思われる。

16の語からなる最も大きなクラスターAは、「ボランティア」、「地域」、「環境」、「子供」、「教師」などからなり、クラスターDも「小学校」、「行く」、「ゲーム」などからなり、両者とも教育学部で課題探求実践セミナーとして行われている「フレンドシップ事業」に関連するものと思われる。また、教育学部開講授業は自由記述欄の記入数も多くなっていた(図32)。課題探求実践セミナーが必修指定されていない人文学部はともかく、医学部と農学部は受講生数に比べて自由記述欄の記入数は少なくなっていた。

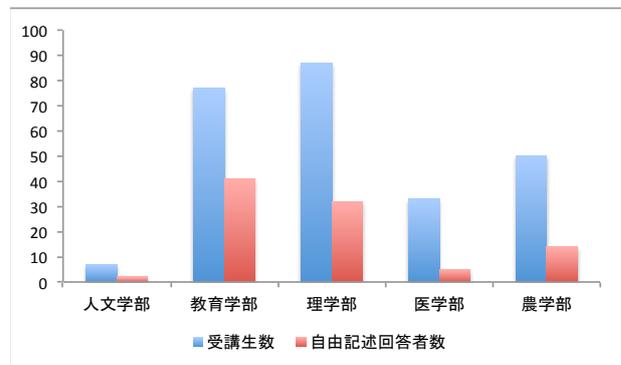


図32. 各学部開講の課題探求実践セミナー受講生数と自由記述回答者数。

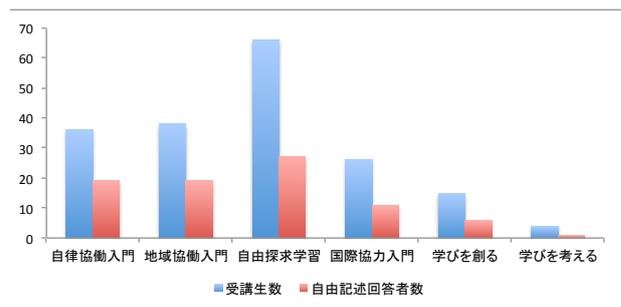


図33. 課題探求実践セミナーの受講生数と自由記述回答者数。

クラスターBは、「ある」、「とても」、「話」、「交流」、「専攻」、「違う」などからなり、学部開講以外にも多くの授業が開講されている課題探求実践セミナーの特徴が良く現れたクラスターであると考えられる。また、「印象」、「残る」は大学基礎論とは異なり、「印象に残る」という回答のみであった。各授業の受講生数と自由記述回答者数を調べてみると、40%以上の学生が回答しており、各学部開講授業よりも多くなっていた(図33)。

## 5. 提言

今回のアンケート結果から 共通教育自己点検・評価部会として以下の提言を行いたい。

### (1) 大学基礎論

学びの基礎を培う授業としての効果は十分とは言えず(図11)、中でも地域社会や国際社会における大学の役割の理解については大幅な改善を行う必要がある(図16)。また、本授業そのものに否定的な意見や内容を覚えていない学生も多い事(図29)から、授業目的をしっかりと学生に周知させ、学びの基礎をこれまで以上に身に付けさせるとともに、学生の意見をくみ取りつつ、各教員の具体的な研究内容を紹介するなど、より興味をひく内容に変更していくことも必要であろう。

### (2) 学問基礎論

大学基礎論同様、学びの基礎を培う授業としての効果は十分とは言えないものの(図17)、専門教育に対する展望の構築についてはある程度の効果が認められた(図20、図30)。本授業は1年生2学期開講ということもあり、学びの基礎については大学基礎論にまかせ、専門教育に関する事項をさらに深めるべきではないかと考える。

### (3) 課題探求実践セミナー

学びの基礎を培う授業としての効果は、大学基礎論や学問基礎論と比較して高く(図21)、「課題発見」についての意識は学生に浸透しているものと思われる(図26)。しかしながら「(2-5)課題を発見し問題を理解し解決する能力」では40%近くの学生がこれらの能力が身についたとは言えないとしている(図7)。学部による授業に対する温度差が顕著であることを含め(図31、32)、課題発見後の問題解決能力を中心に授業内容のさらなる改善が必要であると思われる。

今回のアンケートは3年生を対象に行われたが、記憶があいまになっている学生も多く、初年次科目の授業効果を直性検証しづらい部分もあった。今後、3年次でのアンケートに加え、授業終了直後にも同様のアンケートを実施し、授業の効果をより詳細に分析する必要があると考えられる。

## 6. 引用文献

- Eisen, M.B., P.T. Sellman, P.O. Brown & D. Botstein (1998). Cluster analysis and display of genome-wide expression patterns. PNAS 95: 14863-14868.
- 樋口耕一(2004). テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—. 理論と方法 19: 101-115.
- 樋口耕一(2012). Rを用いた多変量解析と可視化. [http://khc.sourceforge.net/scr\\_r.html](http://khc.sourceforge.net/scr_r.html)
- 高知大学共通教育実施機構会議(2012). 平成24年度履修案内. 共通教育編. 高知大学.
- 金 明哲(2009). テキストデータの統計科学入門. 244pp. 岩波書店.

Kodama, T. & S. Kawai (1989). An algorithm for drawing general undirected graphs. Information Processing Letters 31: 7-15.

工藤拓(2012). MeCab: Yet Another Part-of-Speech and Morphological Analyzer. <http://mecab.googlecode.com/svn/trunk/mecab/doc/index.html>

那須川拓哉(2006). テキストマイニングを使う技術/作る技術. 236pp. 東京電機大学出版局.

R Core Team(2012). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. <http://www.r-project.org/>

(2013年2月18日 文責: 部会長 松井透)

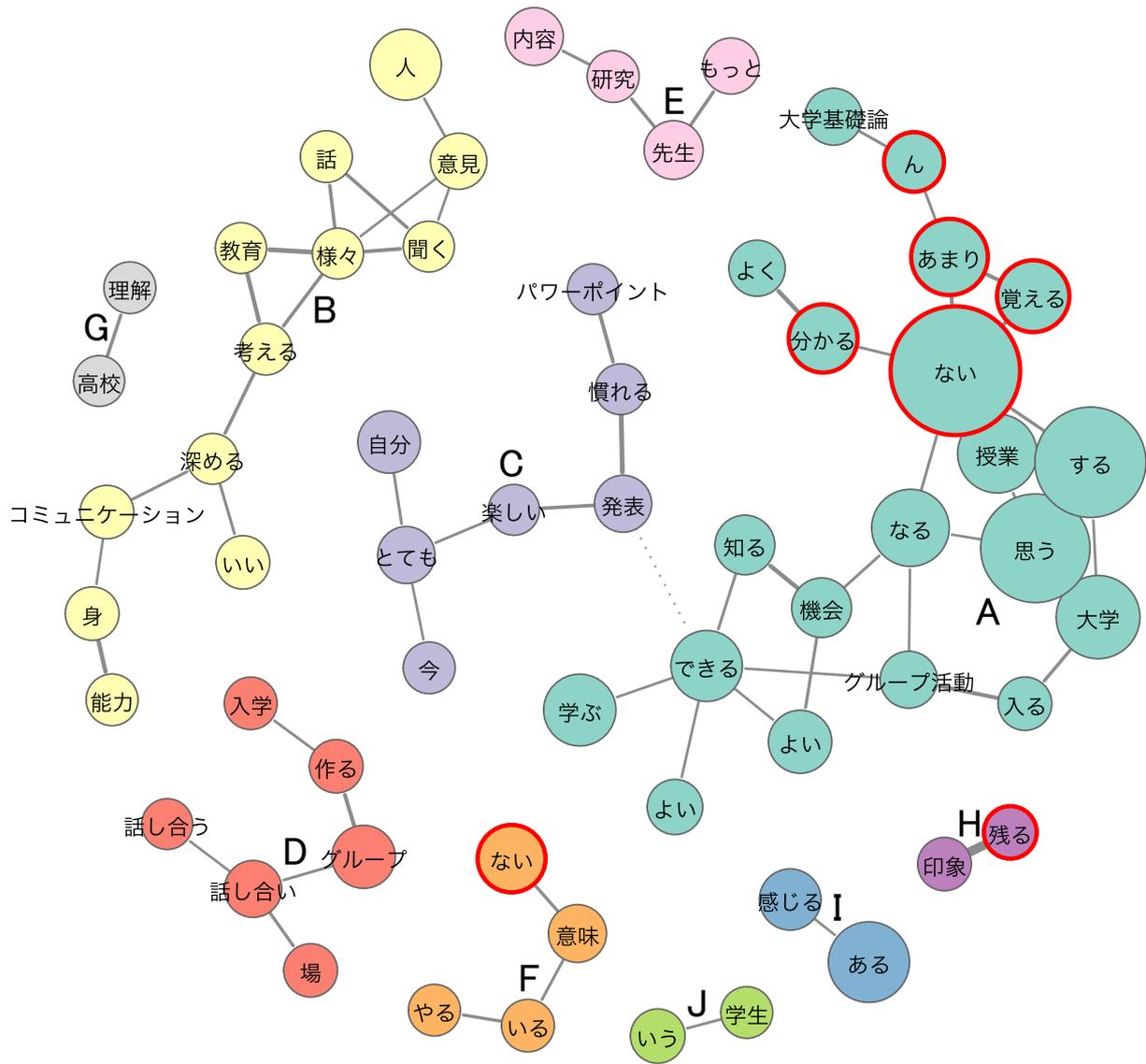


図29. 大学基礎論の共起ネットワークマップ. A~Jのクラスターごとに色分けを行っている. 円の直径は出現頻度を, 円の赤線は否定的な語をそれぞれ示している, 円と円を結ぶ線の太さは, つながりの強さを示しており, 破線は弱いつながりを示す.

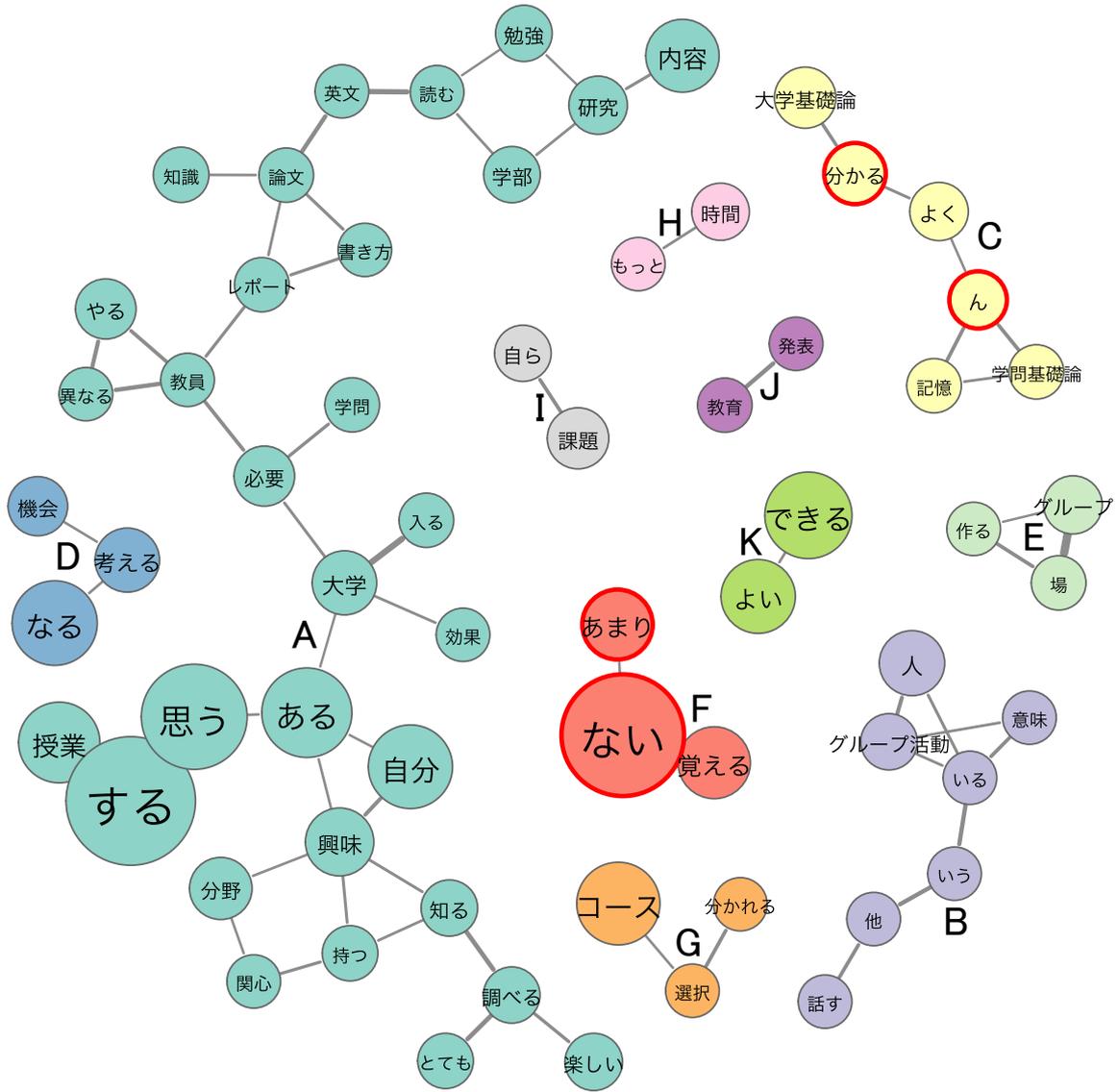


図30. 学問基礎論の共起ネットワークマップ。A~Kのクラスターごとに色分けを行っている。円の直径は出現頻度を、円の赤線は否定的な語をそれぞれ示している。円と円を結ぶ線の太さは、つながりの強さを示しており、破線は弱いつながりを示す。

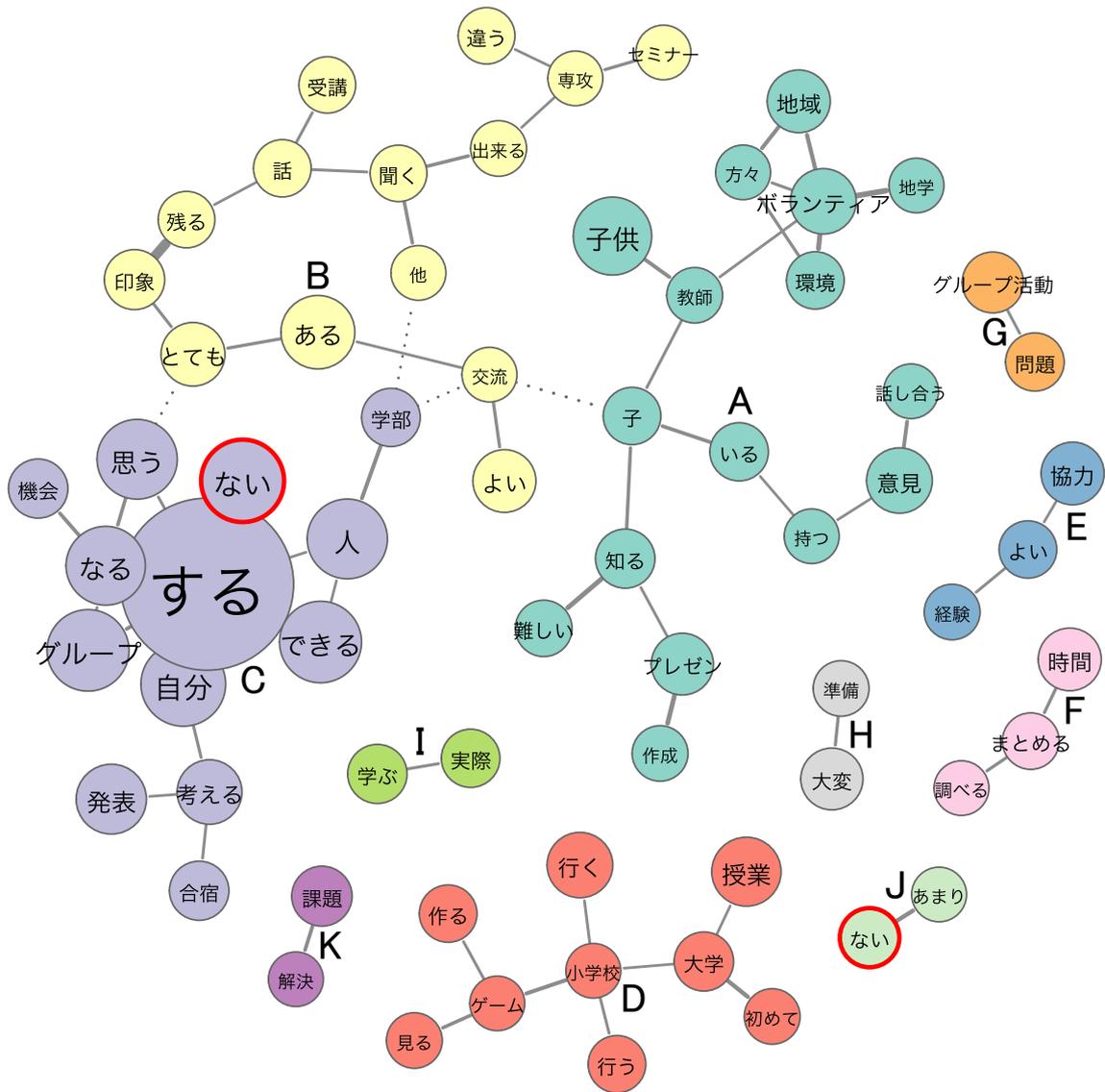


図31. 課題探求実践セミナーの共起ネットワークマップ。A~Kのクラスターごとに色分けを行っている。円の直径は出現頻度を、円の赤線は否定的な語をそれぞれ示している、円と円を結ぶ線の太さは、つながりの強さを示しており、破線は弱いつながりを示す。

表1. 形態素解析の結果. 各設問の出現回数の多い順に20位までを抽出.

順位	大学基礎論			学問基礎論			課題探求実践セミナー		
	抽出語	品詞	出現回数	抽出語	品詞	出現回数	抽出語	品詞	出現回数
1	ない	否定助動詞	94	する	動詞	82	する	動詞	136
2	する	動詞	73	ない	否定助動詞	75	自分	名詞	38
3	思う	動詞	71	思う	動詞	58	ない	否定助動詞	36
4	大学	名詞	42	ある	動詞	42	できる	動詞	35
5	ある	動詞	39	できる	動詞	39	グループ	名詞	35
6	授業	サ変名詞	37	なる	動詞	37	思う	動詞	33
7	なる	動詞	35	自分	名詞	36	人	名詞	33
8	あまり	副詞	34	コース	名詞	35	なる	動詞	32
9	覚える	動詞	29	授業	サ変名詞	33	子供	名詞	31
10	学ぶ	動詞	29	学ぶ	動詞	27	ある	動詞	26
11	できる	動詞	28	ない	形容詞B	26	発表	サ変名詞	22
12	人	名詞	28	よい	形容詞(非自立)*	26	授業	サ変名詞	21
13	分かる	動詞	25	内容	名詞	25	楽しい	形容詞	19
14	ない	形容詞	24	よい	形容詞	24	ボランティア	名詞	17
15	よい	形容詞	19	覚える	動詞	24	意見	サ変名詞	17
16	グループ	名詞	19	あまり	副詞	22	行く	動詞	17
17	自分	名詞	18	興味	名詞	20	考える	動詞	16
18	感じる	動詞	17	感じる	動詞	19	とても	副詞	15
19	ん	否定助動詞	15	専門	名詞	19	よい	形容詞	14
20	機会	名詞	15	人	名詞	17	協力	サ変名詞	14

\*形容詞(非自律)は動詞の連用タ接続に後接する形容詞. 例:「～(て)よい」など.

表2. 大学基礎論における抽出語の例とその活用および実際の文. 括弧内の数値は出現回数を示す.

抽出語	活用形	実際の文
覚える	覚え 運用形	覚えていない(17) 覚えてない(4) 覚えていません(3)
		覚えています(2) 覚えてません(1) 覚えているわけでは(1)
		覚えた(1)
残る	残っ 連用タ接続	残っていない(3) 残っていません(1) 残っていて(1)
	残ら 未然形	残らない(1)
	残り 運用形	残りません(1)
分かる	分から 未然形	分からない(8) 分からなかった(5)
	分かっ 連用タ接続	分かった(6) 分かって(1)
	分かり 連用形	分かりません(2) 分かりやすい(1)
	分かる 基本形	分かる(2)

## 初年次科目3年生向けアンケート

( )の選択肢の中から該当する番号を○で囲んで下さい。

## 【1】所属学部・受講授業科目

1-1 あなたの所属学部はどこですか

( ①人文学部 ②教育学部 ③理学部 ④医学部 ⑤農学部 )

1-2 あなたが履修した「課題探求実践セミナー」科目は何ですか

( ①各学部開設の授業 ②自律協働入門 ③地域協働入門 ④自由探求学習  
⑤国際協力入門 ⑥学びを創る ⑦学びを考える ⑧履修していない )

## 【2】現在のあなたの状況について

2-1 あなたは、大学で学ぶことの意義と目的について理解していますか

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

2-2 あなたは、「教わる」から「自ら学ぶ」へ学びの姿勢を転換し主体的に学んでいますか

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

2-3 あなたは、卒業時にどのような能力をつけておくべきか理解していますか

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

2-4 あなたは、専攻する学問(専門教育)に関心を持ち、意欲的に学んでいますか

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

2-5 あなたは、課題を発見し、問題を理解し、解決方法を考える能力を身につけていますか

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

2-6 あなたは、双方向のコミュニケーション能力を身につけていますか

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

2-7 あなたは、異なるものの見方や価値観を持つ人と接することの重要性を理解していますか

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

2-8 あなたは、グループで議論し合意を形成するための手法を身につけていますか

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

## 【3】大学基礎論について

3-1 現時点(3年生末)で振り返ってみて、「大学基礎論」は、大学での学びの基礎を培う授業として、効果がありましたか。

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

3-2 下記の能力や理解などを修得するために、「大学基礎論」が効果を持ったものを回答して下さい(該当するもの全てに○をつけて下さい)

- ①大学で学ぶことの意義と目的について理解すること  
②「教わる」から「自ら学ぶ」へ学びの姿勢を転換し主体的に学ぶこと  
③卒業時にどのような能力をつけておくべきかを理解すること  
④専攻する学問(専門教育)に関心を持ち、意欲的に学ぶこと  
⑤課題を発見し、問題を理解し、解決方法を考える能力を身につけること  
⑥双方向のコミュニケーション能力を身につけること  
⑦異なるものの見方や価値観を持つ人と接することの重要性を理解すること  
⑧グループで議論し合意を形成するための手法を身につけること  
⑨効果を持ったものは無い

3-3 地域社会や国際社会における大学の役割について、次の問いに回答して下さい。

・あなたはその役割について理解していますか

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

・その理解のために「大学基礎論」は効果をもっていましたか

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

3-4 「大学基礎論」について、あなたが感じていることを自由に記述して下さい。

## 【4】学問基礎論について

4-1 現時点(3年生末)で振り返ってみて、「学問基礎論」は、大学での学びの基礎を培う授業として、効果がありましたか。

裏面もご回答ください。⇒

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

4-2 下記の能力や理解などを修得するために、「学問基礎論」が効果を持ったものを回答して下さい(該当するもの全てに○をつけて下さい)

- ①大学で学ぶことの意義と目的について理解すること
- ②「教わる」から「自ら学ぶ」へ学びの姿勢を転換し主体的に学ぶこと
- ③卒業時にどのような能力をつけておくべきかを理解すること
- ④専攻する学問(専門教育)に関心を持ち、意欲的に学ぶこと
- ⑤課題を発見し、問題を理解し、解決方法を考える能力を身につけること
- ⑥双方向のコミュニケーション能力を身につけること
- ⑦異なるものの見方や価値観を持つ人と接することの重要性を理解すること
- ⑧グループで議論し合意を形成するための手法を身につけること
- ⑨効果を持ったものは無い

4-3 「学問基礎論」について、あなたが感じていることを自由に記述して下さい。

【5】課題探求実践セミナーについて (※課題探求実践セミナーを受講していない人は回答する必要はありません ⇒ アンケート終了)

5-1 現時点(3年生末)で振り返ってみて、「課題探求実践セミナー」は、大学での学びの基礎を培う授業として、効果がありましたか。

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

5-2 下記の能力や理解などを修得するために、「課題探求実践セミナー」が効果を持ったものを回答して下さい(該当するもの全てに○をつけて下さい)

- ①大学で学ぶことの意義と目的について理解すること
- ②「教わる」から「自ら学ぶ」へ学びの姿勢を転換し主体的に学ぶこと
- ③卒業時にどのような能力をつけておくべきかを理解すること
- ④専攻する学問(専門教育)に関心を持ち、意欲的に学ぶこと
- ⑤課題を発見し、問題を理解し、解決方法を考える能力を身につけること
- ⑥双方向のコミュニケーション能力を身につけること
- ⑦異なるものの見方や価値観を持つ人と接することの重要性を理解すること
- ⑧グループで議論し合意を形成するための手法を身につけること
- ⑨効果を持ったものは無い

5-3 あなたは、現在、下記の点について理解していますか。

・「何が問題なのか？」を考える意味を理解していますか？

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

・「答え」がない課題に取り組む意味を理解していますか？

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

・授業時間外の学習をする意味を理解していますか？

( ①はい ②どちらかといえばはい ③どちらともいえない ④どちらかといえばいいえ ⑤いいえ )

5-4 あなたが受講した「課題探求実践セミナー」で、印象に残っているエピソードを思い出して、自由に書いてください。

# 資料2 初年次科目アンケート 記述形式回答

一部括弧書きで注釈を挿入しました

## 大学基礎論

・忘れました。  
・1年生同士が互いにコミュニケーションをとり、仲を深められるのはいいことかもしれない。  
・1年生のときの大学基礎論についてはあまり意味がなかったと思う。  
・1年時に学ぶものなのでまずレポート、プレゼン等の基本的技術を学びたかった。  
・2年前なので覚えていない点がある。  
・2年前のことなので、具体的にどんな授業だったかは思い出せないが、自分の学科にどのような先生がいて、どんな内容を研究しているのかがわかり、どのゼミに行くかの参考になった。  
・PBLやTBLで必要な能力は大学に入ってくる者なら、身につけてから入学してくるので、大学基礎論はあまり必要やないと思う。  
・新しい友達との出会いがあったので良かった。  
・あっても良いが、なくても困らない。  
・あまり印象に残っていないというのが逆に印象でした。  
・あまり印象に残っていません。先生が交代で話していたような気もしますが、それぞれの先生がそれぞれの主観で話されるので、何が大切だったか印象に残りません。  
・あまり印象に残らない内容だった。  
・あまり覚えていない。  
・あまり覚えていないが、様々な方の話を聞いたのは為になったと思う。  
・あまり覚えていません。  
・あまり覚えていません。  
・あまり覚えていません。  
・あまり覚えていない。  
・あまり覚えていません。課題探求セミナーにおいては非常に良かったです。  
・あまり覚えていません。  
・あまり知らない子と話す機会。  
・あまり大学基礎論について記憶がありません。  
・あまり仲よくなっていない人たちとききなりディスカッションをするということは、大学に入ったばかりの人にとってはきびしい人もたくさんいます。グループワークではやる気のない人もそれなりの評価になるので意味がないと思います。  
・あまりはっきりとした印象が残っていない。  
・あまり役に立たなかったように感じる。  
・あまり理解できない。  
・意義がよく分かりませんでした。  
・今思い出してみても、あまり大学基礎論について思い出せません。  
・今になって振り返ってみるとよく覚えていない  
・意味があまりない。  
・意味なし  
・いろいろな先生の話や研究内容を知れる良い機会だった。  
・色々な授業とごちゃごちゃになって、あまり覚えていません。  
・印象に残っていない。  
・イ組、ロ組などに大きく分けて実施されるこの授業では、イ組、ロ組との関係は深まりますが、私はこのようなくりは必要ないのではないかと思います。いずれ、教育実習などでイ組、ロ組が力を合わせて頑張らないといけないときもくるので、早い段階からコミュニケーションなどをとれるような状況があればもっと効率的ではないかと思えます。  
・受身な感じがしたが、大学で学ぶことはどうということもわかった。  
・多くの人の意見を聞ける場である。  
・大勢の前で発表する機会が大学に入るまでなかったため、パワーポイントの作り方や発表の仕方が学べた。  
・行い必要性を感じられない。  
・同じ学科の同回生と、お互い入学して間もない頃に知り合うことができ、人の輪を広げるといふ点でよかったと思う。  
・思い出せない  
・面白かった  
・主に「大学での学び方」を学ぶものであり、本アンケートの、3-2、3-3のような効果は薄いと思った。  
・各学部の中の各コースについて毎回述べていたイメージがあり、自分が興味のない既に行くコースを決めていたものは退屈に感じた。  
・各学科の内容が聞けるので、自分に合った学科が見つかりやすかった。  
・学部の中でどのような学問があるかを知る機会にはなったが、右も左もわからない状況だったので何か得られたものは大きいとかきかされると答えられない。  
・学問基礎論とあまり内容が変わらない。  
・教少ないコミュニケーション力を身に付けられる授業であると位置づけています。また、自ら行動して研究を進められると感じています。  
・課題を意欲的に取り組む人とそうでない人の差が大きく、イライラする時があった。  
・課題をただこなすのではなく、自分のためだと思つてとりくむのが大切。  
・係だっていなかったイメージがあります。  
・聞いていない人も多かった。  
・記憶にあまりありません。  
・企業の人の話はためになった。  
・基礎論で身につくというよりも大学生生活を送るなかで身についたことのほうが多いと思う。  
・教育を学ぶ最初の段階として、身近な教育問題についてみんなで議論できたのでよかった。仲間意識を持つこともできたと思う。  
・教授達も手探りの授業という感じ。先生も学生も何を教えるのか、とか目的が不明確だったように思う。  
・教授とのコミュニケーションを取る大事な場だと思う。  
・国コミの先生達の研究や授業を一通り知ることができ、学ぶことにもっと意欲をもった。  
・グループ学習を学ぶにはいいかもしれないが考えを深めるとかはない。  
・グループ活動の機会があり、コミュニケーション力や意見の対立に対する備えなど社会に出て身につけておくべきものを知ることができた。また、主体的な学び方を知る良い機会となった。ただ、講義室にネットの回線が繋がってなかったので調査しづらかったし、調査時間が短かったのでその点を改善してほしい。  
・グループでPPを作り時に、人それぞれの意見をきくことやその根拠を探す作業はこの授業で一番大切なものだと思います。  
・グループで集まってプレゼンを行うことを学んだ。  
・グループディスカッションなどをできるようにするためには良い。

グループディスカッションや自分一人では取り組みづらいことに取り組みめる場なように思います。  
・グループで話し合いが多く、大学らしさを感じました。  
・グループで話し合い、目的を持って何かを作るのは非常に良い経験になったと思う。  
・グループ討論だったが、学部間での発言の差があり、いても意味ない気がして嫌だった。  
・グループによって差が大きかった。ばくぜんとしていた。  
・グループワークが楽しかった。  
・グループワークはとても重要であると思う。グループワークで話し合いに参加し、時には自分の意見をおし通すことができれば、今後の為にならない。  
・グループワークを増やし、大勢の前で発表したり、討論することを始めるのうちに慣れていた方がいいと思う。  
・講義が漠然としていて、基礎論という感じがあまりしなかった。  
・高校から大学へと学問を学ぶことにおいて、物事に対しての考えることやそれを理解しようとする自発的な姿勢を初めの1年で身に付けるためには重要なものであると思います。  
・高校生から大学生への変化のパイプとしての役割を果たしていると思う。  
・高校の授業から大学の授業へ気持ちを切り替えるための貴重な時間だった。  
・高校までの一方的に教わる学習ではなく、自ら学び発表するという学習のやり方を学んでいくうえでいいきっかけになったと思う。  
・高校までは自分の楽器の実技のこと以外知らなかったけど、楽器の歴史を調べられる機会を与えてくれることで多方面から音楽を知るきっかけになったと思う。  
・講師の方の貴重なお話が聴けて良い。  
・この授業を受けて、あることやものに関する考え方が変わったと思う。  
・個別のクラスに分かれましたが、先生のグループ分けに不満に思うことも多いと感じました。特に理学部の先生はやる気がなく10人以上のグループを作っていました。もっと4~5人のグループで討論すべきだと思います。  
・コミュニケーション能力はついたように思う。  
・コミュニケーション能力低い人には辛い。  
・これがキッカケで友人ができたので良かった。  
・これは「先生の持論なのでは？」と思う場面もあったが、大学で学ぶことの基礎は高校までとは違うということは理解できた。  
・最初のうちからグループで学べたので話し合う力がついたと思う。  
・最初の授業として、農学部生と意見を交わす事が出来て良い時間だったと思います。  
・最初は全く知らない人たちとグループになって不安を感じましたが、すぐにうちとけられて友達ができました。  
・様々な切り口から「教育」を考え、学生同士で意見を交わし、全体で発表するなどの機会が多く設けられており、教育について自分の考えを深めたいということができた。  
・様々な社会人の方の話を聞くことができ勉強になった。  
・さまざまな人と話ができることは良いことである。  
・様々な人の意見や考え方がきけて有意義だった。  
・自主的に調べて発表まで行うのが楽しかった。勉強になりました。  
・自身のこれからの研究において、何をするかを理解・自覚できました。  
・質問の意味がわかりません。  
・自分にとってはとてもよかったです。  
・自分の行きたい専攻を決めることができる。  
・自分の受けた授業では、グループワーク形式だったので、同じコースの人と打ちとけられるきっかけになって良かったと思う。  
・自分の知らないことがとても多くて、発表が近づくにつれて大変だったけど楽しかったです。大学という所をよく理解できていない状態でのこの授業は、(みんなが手探りだったので)どうして良いのかもとてもまどいました。でも、同じ学科生と親しくなれるとても良い機会でした。  
・自分の専門性を考える上では役に立ったように思う。  
・社会に出ていくにあたって、じぶんの身の回りのこと1つ1つに意味があるように感じられ、学ぶことに対しての抵抗感が減った。  
・集団の考える事をまとめる事の難しさ。  
・授業形式がやりにくかった。1回1回の授業時間内でまとめてほしかった。  
・授業にはきちんと参加したが、今になって何を学んだか覚えてないくらい印象が薄い。  
・授業の存在の意味がわからない  
・主体性をもって学ぶべきだということ学べたと思う。  
・主体的な学びへと気持ちをきりかえる良い機会になりました。  
・主体的に学ぶという意味ではあまり効果は感じなかった。ディスカッションは、とてもためになった。コミュニケーション能力、意見のまとめ方が身についた。もっとディスカッションなど、自分と相手の意見を対立(→まとめ)させる場があればいいと思う。  
・上記のような能力は、一つの授業というより、多くの授業で色々な学び、集団にいることで手にしていったように感じる。やることに意味はあるが、これ単体のものではない。  
・正直言って内容も覚えていない。教育学部らしい事をもっと取り入れた方が良いと思う。  
・少人数でやりやすいと思う。  
・しょーもない。これに効果があると思う大学の気がしれん  
・初対面の人と話す能力が向上した。  
・初年時にあるということは、入学したばかりで閉鎖的になっている状況を変えるいい機会だと思う。  
・調べては発表するというのに慣れた。授業外の時間を使うということも覚えたのではないかと感じる。  
・新せん味を感じた講義だった思い出がある。  
・人選が面白かった。特にNTTの松山氏の行った、人体実験とも言える「視線の暴力」の思い付きの実験は、下手をすると被験者に精神的負担を後々まで背負わせたかも知れない。  
・すみませんが、あまり覚えていません。  
・座って受ける講義とは違い、自ら動くもの。  
・ゼミみたいなのがこういうものなのだとわかった授業。  
・先生にもっと発表の批判をしてほしい。そして、評価できる所は評価し、学生の学びへの意欲を育ててほしい。  
・全体的にあまり効果を実感しなかったため、少し改善すべきだと思う。  
・双方向のコミュニケーションって何ですか。  
・そこまで効果があったかは疑問がある。  
・大学1年の前期に開講されるので、知り合ったばかりの人とグループを組んで話し合いをするということが役に立ったと思う。  
・大学がどのような場所なのかを知るきっかけになったと思う。  
・大学基礎論が他の授業と比べて特別に役に立ったかという点と微妙だと思えます。  
・大学基礎論と学問基礎論の違いがよく分からなかった。  
・大学基礎論に関してあまり記憶がありません。  
・大学基礎論の授業はほとんど覚えていません。  
・大学基礎論は、大学での学びの基礎を培うことでなく、大学教育の必要性に対する様々な思想を考えるためのものだった。  
・大学生らしい勉強の入り口のように思う。

・大学での「学び」やグループでの討論を学べただけでなく、クラスのメンバーとの関わりを深くするとともにいい機会となり、よかったです。  
・大学での新しい生活、一人暮らしなどで手いっぱい内容をもっと覚えていない。  
・大学での学習の方向性を探すのに役立った。  
・大学で学ぶモチベーションになった。  
・大学と小中高等学校のちがいを理解するために必要な科目だと思います。  
・大学とはどういうところなのかを知るには、いい授業だと感じた。  
・大学に来て間もない頃だったので、大学基礎論は大学生生活を送るきっかけみたいな感じだった。  
・大学に対する不安を軽くしてくれる。  
・大学に入学して、さあ、大学生活を楽しもうというスタンスの学生を、グループ作らせていきなり主体的に課題にとりくめというのはあまり効果がないのではと思う。とはいえ、仲間を作る場ではあった。  
・大学に入学して、大学は、こんな所なんだということを学べました。  
・大学に入った当初にあったので、当時はまだ自ら学ぶ意欲が低かったため、あまり効果的でなかった。(自分のやる気が低かったため)  
・大学に入ってからすぐにあるグループワークなので知り合いを作るという意味でもよかったですと思います。  
・大学に入ってからすぐにある授業で、グループ活動を通じてコミュニケーションを深めようということができ、大学で学ぶことの意義を考えるきっかけになったと思う。  
・大学に入ってから初めてのグループ活動がある授業で、色々な考えを知ることができ自分の視野が広がったと感じる。  
・大学の授業の難しさと頑張らなくてはいという気が起こる。  
・大学の授業はこんなかんじで流れるんだと思った。  
・大学の過ごし方が分かって、時間の使い方も分かった。  
・大学の雰囲気がいま少し分かった気がした。  
・大学の雰囲気を掴むのに役立ったと思います。  
・大学入ってから少人数で行う授業があることに驚いた。  
・大学始めのイントロダクションとしては良いと思う。  
・大事だと思う。  
・大切だと思う。  
・大分前のことなので覚えてないです。  
・代返について非常に甘いと感じた。  
・他学部の大学基礎論の内容を比較してみることができればよいと思う。  
・他者と交流する上で意見を言い合う大切さは学んだ。  
・多種多様なことを学び、ためになったのと同時に、何を学ぶべきかということについては逆に混乱した。  
・他の2つとの違いがよくわからない。  
・単位をとれるよう願います  
・担当教員によって効果(得るもの)は大きく変わってくると思う。  
・担当の先生によって授業が全く異なりました。ゼミのように担当の先生を選択出来たらもっと早くから自分の興味ある分野を深められたのかもしれないなと思います。  
・チームワークの大切さがわかる。  
・ちょっとインパクトがうすかったです。  
・ディスカッションや話し合いの場を設けられたのは大きな意味があると思う。  
・どういったことを学生に学ばせたいのか全くわからない。  
・特に覚えていない。  
・特に覚えていないのであまりインパクトがなかった。  
・友達とのコミュニケーションの場としては、とてもいい授業だったと思う。  
・友達もできたし、課外に出たり楽しかった。  
・どんな授業だったか忘れました。  
・内容がありきたりでつまらない。  
・仲間って・・・大事  
・なくてもいい  
・何をしたら覚えていないので、よく分からない  
・何をしたら、コース紹介をしていた事くらいしかあまり覚えていない。  
・何を学びに来たのかを確認することができて、すごく良かったです。  
・何をやったかも覚えていないので何とも言えない。特に役に立つようなこともなかったで、それほど重要でないと思う。  
・なんだかよく分からなかった  
・何のために修習となっているのかわからない。しかし、グループワークはどんなもので、どのように進めて行くのが望ましいかなどは知ることができた。  
・何のための授業かわからなかった。  
・入学してで分からない点も多かったが、今後の参考になり役立ったと思う。  
・入学したばかりの理由もあり、グループを作り、知り合いを増やすといった役割も果たしていると感じた。  
・農学部はキャンパスも遠く、なかなか先輩や先生方と話せないので大学基礎論は貴重な交流機会になった。  
・能力を身につける場ではなく、ゼミの担当を決める為のクラスだった。  
・廃止して、語学や古典に時間を使った方がためになる。  
・初めて受ける授業としてはいいと思う。  
・初めて出会った友人と、協力しながらプレゼンテーションに向けて準備を進める過程はとても楽しかったのを見ています。慣れないパワーポイントを使いながら、班のみんなでひとつのテーマについて研究した内容を発表するという経験を、1回生前期にできるのはとても大きいです。  
・初めてプレゼンをする機会があり、パワーポイントを実際に使う機会でもありました。グループで協力する難しさを知り、その後の他の授業で役立つことも多くありました。  
・はっきり覚えてません。  
・はっきり覚えていないわけではありませんが、私の場合はすこしかたちだけになってしまったと思います。  
・発表にまだ慣れていない時期で大変だった。  
・話し合いに参加する人、しない人が分かれてしまい、少し残念だった。知らない人や興味のない人と話し合う難しさはわかった。  
・パワーポイントに慣れることや、考え方の違う仲間と話し合うことができたことがよかったし、力になったと思う。  
・班での発表などを通して、他の人の意見を聞くことができてよかったです。  
・班の中でやる人とやらない人がいるのに、同じプレゼンをして同じ評価をもらうのは疑問に思う。  
・必要ないのでは？  
・必要なかった。  
・普通に座学を受けていただけでは気づけなかったであろう発見やおもしろさが身近にあることに気づき、特に神社について、実際に足を運んで教えて頂いたことは、今もとても感動が残っていて、新たな分野への関心が広まりました。  
・プレゼンテーションの経験がなかったため、役に立ったと思います。  
・プレゼン能力を身に付けられる所が良い。  
・プレゼンの能力がついた。  
・プレゼンの練習になったと思います。  
・プレゼン等を作成するにあたり、あまりにも他の人が用事が多く、結局1人であらからたプレゼンを作成したが、周囲に受け入れてもらえず苦労した。  
・他の学科の人たちと交流をもち、広い視野をもつことは非常に重要なことだと思いが、1年生の初めに行うのはおかし。同じ学科の人ともまだほとんど初

対面だったので、グループワークがなかった。  
・毎回違う先生が教えてくれるので、新鮮味がありました。  
・学びたいゼミに所属できない選抜制度は不満。学生にとって意味がないと思う。  
・まるで自己啓発のセミナーの様な感じだった。メンバーのレベルが低いと自分もそのレベルに堕ちないと会話にならないのが辛い。  
・まわりくどい事が多かったように感じます。もっとあからさまにというか、素直に話してほしいと感じたのを見ています。  
・自ら学ぶという姿勢についての練習になった。  
・みんなで協力してプレゼンをつくり、友人間の関係はふかまったと思います。  
・メディア森の使い方を学んだこと以外あまり覚えていません。すみません。  
・もう少し内容の濃いものにしてほしかった  
・もう少し有意義なものにしてほしかった。  
・目的が受けた当時はわからなかった。  
・目的がよくわからなかった。  
・もっと、大学の3、4年生で役に立つものをしての方がよいと思う。  
・もっと詳しい授業がいいと思う。今はただ流すだけ。  
・もっと濃い内容にすることが必要です。  
・良かったです。  
・よく覚えてないが、話し合いを大切に、大学生のうちに社会に必要なことを学ばなければいけないことを話し合っただけ。  
・よくわからない内容だった。  
・履修などがよく分かった。  
・レポートの書き方などを教えていただいたので、今ではとても助かっています。  
・分かりやすい講義でした。

## 学問基礎論

・“学び”をする上で必要な理解のための努力や事象に対しての様々な視点を持つということの基盤を形成するものであり、大学での学問を受講にとっては必要不可欠だと思います。(?)

- ・自ら学ぶという姿勢を身につけられた。自分で課題を見つけ考えることは難しいが、確実に自分の力になっていると思う。
- ・1年前であるが覚えていない点がある。
- ・2回生からのゼミナールのステップになったと思います。
- ・3-4と同じ(大学基礎論の記述項目です)
- ・3-4に同じ
- ・3-4に同じ
- ・3-4に同じ
- ・あったほうが良いと思います。
- ・あっても良いがなくてもよい。
- ・あまり覚えていない。
- ・あまり覚えていません。
- ・あまり覚えていません。
- ・あまり覚えていません。
- ・あまり覚えていないが、“学ぶ”ということに対し考えさせられたと思う。
- ・あまり記憶にありません。
- ・あまり記憶にない。
- ・あまり授業の雰囲気自分とあわなかった。
- ・あまり理解できない。
- ・生物コースから科学コースに変更したため、最初から科学コースを希望していた人との知識差が大きく、おいつくのに苦労した。なので、最初から学科を決定してほしい。
- ・意味なし
- ・いろんな分野の学問に触れることが出来るので良いと思います。
- ・印象に残らなかったせいか、内容をほとんどおぼえていない。興味がもてなかった。
- ・上に同じ
- ・英語を翻訳して発表するという授業で、英語をほとんど勉強することがなかったので良い刺激になりました。
- ・英文を読んで勉強になった。
- ・行う必要性を感じない。第一、教員が自らやりたくないというようなことを告げている時点でどうかと思う。
- ・教われる先生に限られていたのが残念でした。
- ・覚えていない
- ・覚えていない
- ・覚えていない
- ・覚えていない
- ・覚えていません。
- ・覚えていません。
- ・覚えていません。
- ・覚えていません。
- ・主にパソコンと向き合う授業形式であったのでExcelについて学ぶことができたのは良かったが、もう少し話し合う機会もあれば良かったと思う。
- ・音楽についての基礎を学ぶことができた。
- ・音楽の基礎を学ぶ意欲をつけられたと思う。自分からいろんな編成の音楽を聴こうと思う。
- ・各コースが何をやっているのかが知れて面白かった。1学期にやれば、もっと良いと思う。
- ・各コースの具体的な内容について知り、調べたりすることで興味がもてた。
- ・学問基礎論に関してあまり記憶がありません。
- ・学問基礎論についてあまり記憶がありません。
- ・学問基礎論のグループワークは同じ学部の人と、大学基礎論は他学部の人とのグループワークがあってもいいと思う。前半:理系×文系 後半:理系×理系など
- ・学問の内容について知ることができてよかった。
- ・関心を持たない分野に触れて、視野が広がった。
- ・記憶にございません。
- ・気になる分野により興味を持つことができた。
- ・厳しい講義だったが、自分で課題をえらんで調べることの楽しさが分かった。
- ・基本的に大学基礎論と変わらないと思った。
- ・教育の心理学的視点のおもしろさを感じることができました。
- ・教育を学ぶ者として、双方向のコミュニケーションを通じて他者と話すことの重要さを感じた。
- ・教員によってやっていることが異なるので、何とも言いがたい。
- ・教員によってレベルの差が激しい。レポート提出の引用の方法などが身につけていない場合があるので、徹底した方がいいと思う。
- ・興味のあるコースの概要を知り、それについて調べることができたので、興味を深めたり新しく知ることができてよかった。
- ・グループディスカッションをする場として良い。
- ・グループディスカッションを通して学びを深められる場だと思います。
- ・グループでどう課題解決していくか意見を出しあい、授業外でもグループで話しあい自ら学び、解決していくことを授業で学んだ。
- ・グループワークの力が少し向上したと思う。
- ・グループワークをよく行った。プレゼン力はついたと思う。
- ・グループ分け後はパソコンの作業を機械的にやっていただけだったのであまり意義を感じなかった。
- ・研究内容、研究の面白みを知れて良い。
- ・憲法で学問の自由が保障されていて、研究の自由、教授の自由とあり、好きなことを勉強し、研究してよいとのこと。私はその中で大学生活を過ごし感じたことは、この憲法が成立した時から時間が経ち、高度経済成長も終わり、長い不景気に入っていて、世の中は色々変化してきている中で、本当にこの憲法の内容のままで良いのかと思う。研究するならばもっと世の中の役に立つ、社会貢献できることを前提とした内容へと発展していくことの重要性、そして社会に出て働くために入った大学でもあるので、そのサポートをする機関であること、学部を越えて日本でも死め私達にとって必要な日本の知識などを授業に取り入れることも大事ではないかと考える。
- ・効果もったとは思えない
- ・後期だったので、コース分属にあまり役立てられなかった。
- ・高校までの授業内容とまったくちがうなとき感じました。
- ・コース決めのきっかけになった。
- ・コースごとに分かれて演習を行う形は良かったです。
- ・コース説明があり、将来について、しっかり考える機会になったと思います。また、自分が受動的ではなく、能動的に学んでいけなかつたと感じました。
- ・コース選択に役立った。
- ・コース選択を考える機会としてはよかった。
- ・コースについていろいろ知れたため、コース決めにやくにたちました。
- ・コースの説明については良かったけれど、休んでいる人が毎日多かったので出席についてもう少し厳しすぎたと思う。
- ・コースの先生と交流できて良かった。

・コースの特色等が見えて、2年生以降に学ぶ内容の参考になった。

・コース別に分かれておこなわれるグループワークなので、自分が興味を持つ分野に近い事に興味を持つ人と話せてよかったと思います。また、農学部では、1年の終わりにコースの選択があるので、それにに向けて自分がどんな事に興味があるのか知ると言う意味でもよかったです。

・コースを決める前にコース毎のオリエンテーションをすれば良いと思った。

・コースを選択するために役立つ授業であった。

・国府先生の講義で、英文を訳す機会があったのですが、今から考えてみると、その機会が英語文を読む前段階の練習になったので非常に良い経験になりました。

・これはコースごとに分かれていて、話が進みやすかった。実際に選択したコースと異なったコースでも、目的が分かりやすかったため、大学基礎論よりも楽しかったと思う。

・時間枠(授業時間)に余裕がないと感じた。各コースの先生の話す時間がたった90分というのは先生、学生相方酷すぎるかと。

・自分が選んだ学科の内容を詳しくきけるのと興味がわいた。

・自分が進みたいコースを考える大事なものだったと思う。

・自分が専攻したいと思う分野の内容が知れてよかったと思います。

・自分が専攻する教科に興味を持てた。

・自分が大学で何を学んでいきたいかを考えていくためのいい基盤になったと感じた。

・自分が何を学びたいのかを考えるよい機会になりました。

・自分が学びたい分野について理解を深めようとするのをできるようにしてくれた。

・自分たちでプレゼンテーションを作ることの基礎を学ぶことができた。

・自分で調べる課題を見つけることが難しかったが、そこから考えるということができるようになって良かった。美術ならではの内容を自分で調べることはとても楽しかった。

・自分で資料をつくって学べた。

・自分の意見を伝えることは大切であることを感じた。

・自分の関心のあるグループに入れなかったため、楽しいとあまり思えなかった。やっていたことの内容もよく覚えていない。

・自分の希望するコースではあったけれど、紹介された研究内容が1つの研究室だったので他の研究内容も見えたかった。また、グループ活動では自分の希望するコースではないからといって課題に取り組み意欲が薄い人がいたので、非常に活動しづらかった。

・自分の興味のある事柄を探し出し、自分で資料を集め、プレゼンをする方法の基本的なことを学べる授業であったし、また他人がどういう事に興味を持っているかを知ることができて面白かった。

・自分の興味のある分野だったので、抵抗なく取り組みました。

・自分の知らないことをたくさん知ることが出来る授業でした。事前に調べなければならぬことがとても多く、とても大変でしたが、授業時間が(1年生の時と比べて)多くなっている時だったので、大変でしたが楽しかったです。

・授業内容にもよりますが、私が行ったものは本の要約だった。個人である範囲の要約を行って、次週に発表という形式の授業だったので、得たものは少なかった。主体的に学ぶような授業を展開するのであれば(教育学部ならば)現在あるいは過去に起きた教育関連の事件や事故等の事例について調べ、討論したり何らかのテーマに沿って討論するなどの教授対策に近い授業、あるいは実習のために模擬授業や指導案を書く練習をすればよいと思う。

・授業をいよいよはした方がよいと思うが、学問基礎論で学んだことを真剣に受け止めている人は少ないと思う。

・授業を積極的に取り組みれば、レポートは楽だ。

・少人数グループでの議論は、コミュニケーション能力や、積極的に意見を言う練習になった。

・少人数グループの発表の場としてよかった。

・少人数制の授業の感じに慣れておけるかなとは思った。

・少人数だったので、指導がすごく行き届いていたと思う。

・情報についてより専門的な知識が身についたと思う。

・将来の方向性が理解できた。

・しょーもない。これに効果があると思う大学の気がしれん

・資料の調べ方は身につきました。

・信頼って...すごい

・心理学の分野でアンケートの集計をした覚えしかない。

・進路の厳しさについて教えてもらったのは良かった。

・数学希望だったのになつたのがよくわからなかった。

・少し専門的な事を学ぶことができた。

・ゼミのイメージをつかもうとしていた気がする。

・前述と同じ(大学基礎論のことです)

・前述の通り

・先生によって内容の充実度の偏りが大きい。

・先生によってやる内容が異なるので、受ける人によって学ぶ内容が異なるので、ブレが生じると思う。

・先生によってレベルに差がある。

・先生抜きで、皆で集まったり課題をこなすことが多い

・先生のやる気が感じられなかった。学生のやる気も感じられなかった。

・先生を指導できたので、自分がどの分野にしたいか考えるきっかけになっている。

・前半は学部全体、後半からコースに分かれてやっていたがその理由がわからなかった。

・専門科目を学ぶための第一歩となるもの。

・専門教科の講義をたくさん履修する方が勉強になったと思う。

・専門的な議題が多く関心が持てた。

・専門的なことができて、楽しかった。

・専門的な内容で楽しかった。

・専門的に勉強することができたので深い理解ができる点ではよかったと思う。

・専門に対する意識が少し変わったように感じる。専門科目の大切さがわかったきっかけとなった。

・専門の他の授業とあまり変わらなかった。

・専門分野についての話が主で、興味をもてた。

・専門をするうえで必要な部分もありました。

・卒論に進むための前段階として、とても為になった。

・その学問についての基本を、GWで学ぶことによって、一人で偏る思考をすることなく考えることができた。

・それぞれ興味のある専門分野に分かれたので大学基礎より具体的な学びの場となった。

・第一希望の先生の講義に参加できたので楽しかったです。しかし、自分が関心をもつ専門分野の講義がなかったため、そういうものがあつたらいいと思いました。

・大学基礎論が学問基礎論があまりよく覚えていなくても、グループを作ってプレゼンをする機会を授業を通して得られたので、パーポイントを使ったり、話し合ったりできる場があつてよかった。

・大学基礎論と同じ。主体的に課題を設定、解決しようとするには他の講義が多すぎる。例えば、最たるものの1つである卒論にとりくむときはそれだけに集

中するし、講読などのゼミがある学生も、コマ数は大分少なく、それに集中 & 自分の興味に近められる時間がとれるようになっていく。  
 ・大学基礎論と同じです。  
 ・大学基礎論と同じです。  
 ・大学基礎論とさほど変わらなかったイメージ。意見のまとめ方(ポストイットを使ったまとめ方等)がわかってよかった。  
 ・大学基礎論と同上  
 ・大学基礎論と内容が同じで意図がわからない。プレゼンをした後の発展性がない。  
 ・大学基礎論と内容が重なるところが多かった。  
 ・大学基礎論との違いがよくわからなかった。  
 ・大学基礎論との違いが分からない。  
 ・大学基礎論の感想と同じ。  
 ・大学基礎論より専門的になり、自ら考えることが多くなった。  
 ・大学基礎論よりも自分の興味が反映できたので良かった。  
 ・大学基礎論を発展させたようなものに感じた。  
 ・大学と地域との関係を考える時間があり、大学・農学部の意義を考えさせられました。  
 ・大学に入る以前に身に付けておくべきことが多くあったと思います。  
 ・大事だと思う  
 ・大変でした。  
 ・他学部の最終的な研究内容結果の比較ができたらいと思う。  
 ・他コースに人と密に接する最後の機会になった。  
 ・他のコースの子と話す機会が増えてよかった。  
 ・他のコースの事を調べてみたが特に参考にならなかった。  
 ・楽しかった  
 ・多様な人の話を聞くことができよかったです。  
 ・担当教員の専門を生かした授業を受けることができるのは良い点であるが、さらにそのバリエーションがあった方が、学問の興味を深める上では必要だと思う。  
 ・担当する先生の個性の出た授業だったのでよかったと思います。  
 ・知識の差がありすぎて、ついていけないことが多かった。全員が同じ知識レベルでないことを分かってほしい。  
 ・続けてほしい。  
 ・特に覚えていない。  
 ・とても難しかった。  
 ・どの分野に進むのかという心構えができた。  
 ・どんな点に注意してもの考えるべきかに気づくことができました  
 ・どんな授業だったか忘れませんでした。  
 ・内容を覚えていない。  
 ・なくてもいい  
 ・何もかんじない  
 ・何をしたか覚えていない。  
 ・何をしたか覚えていない。  
 ・何をやったのか思い出すことができないので何とも言えないし、役に立つことはなかったと思う。  
 ・初めて「研究」的内容に取りくんだ授業だったので、とまどいもあったが、今思えば大学で勉強する上の良い経験になったと思う。  
 ・初めて多くの文字のレポートを書いた(8000字)。  
 ・はっきり覚えてません。  
 ・早い段階で演習を体験できるのは良いことだが、担当してくださる先生によって課題の難易度が違うのはどうか、難易度を均一にしたほうがよいのではないかと。  
 ・必要がない。  
 ・藤田前学部長の話が印象に残っていて、大学の間にたくさん本を読むことや、1単位=1000時間の勉強が必要であるという話が良かったです。  
 ・普段から意識して物事を見るようになったと思う。  
 ・普段はしない話題について、話し合うことができるともためになった覚えがあります。  
 ・プレゼンテーションによって、発言力が身に付きました。  
 ・文章(論文・レポート)を書くにあたって必要な知識を得られた。ただ、教員によってやる内容が全く異なるのは良くないと思う。  
 ・文章の書き方を学びました。現在でも役立つと思います。  
 ・文章を書く訓練ができてよかった。  
 ・勉強したい分野を詳しくやれるので意欲がわいた。  
 ・他の人と専門的に話しあえる。  
 ・本当に自分が興味あるものを定めることができた良い機会になった。  
 ・毎回古文の文献を読んでくるという作業はよく意義がわかりませんでした。(古門先生)  
 ・全く覚えてない。  
 ・全く思い出せない  
 ・学ぶ先生によって手法が多少偏り気味な気がする。  
 ・自ら課題を発見する機会があった。  
 ・自らの考えで行動し、課題を深めていくことのよききっかけとなった。また、基本的なレジュメの作り方やプレゼンの方法を学ぶことができた。  
 ・自ら学ぶことができたように感じる。  
 ・目的が分からない。  
 ・もっと深い内容がほしかった  
 ・もっと有意義な時間の使い方があったのではないだろうか。  
 ・問題発見、課題解決に向けてどのように行えばいいかに気付くことができた。  
 ・問題を解くことをメインに行われたような気がするので、問題を見つけていくような講義を行った方がよいのではないかとと思う。  
 ・やはり自分の専門分野について、プレゼンしたりで、グループワークをよく覚えている。  
 ・よかった  
 ・良かった印象  
 ・よく覚えていない。  
 ・よくわかりません  
 ・より深い分野を学ぶことができた。  
 ・理科教育に関する英文の論文を訳して発表するという授業形式だった。理科教育というよりは、英文読解の授業であり、特別理科教育に関する知識も与えられず、ひたすら「英文を訳す」作業で、ほとんど得るものがなかった。  
 ・留学生も含め、靖国神社問題などを話し合うことができたため、有意義な授業だったと思う。  
 ・レオナルド・ダ・ヴィンチの手記を読み、先人が述べている中で自分が興味を持ったことをとことん調べ、私の場合、普段なかなか関わることのない他学部の先生にもお話しして頂けたので、とても身に残っているように感じます。  
 ・レジュメの作り方や書き方、発表の仕方など細かく教えてもらったので役に立った。  
 ・レポートの書き方やレジュメ作成などをあまり教えてもらえませんでした。資料を配られて、少し説明を受けただけであったので、残念でした。  
 ・論文・レポート課題の書き方はこの授業で学べたが、それ以外の上記4-2にあるような効果はあんな短期間で身につけられるものではないと思う。  
 ・論文の基本的な書き方を学べたのでよかったと感じる。

論文を訳した記憶しか残っていない。  
 ・私の「学問基礎論」のゼミでは、地域活性化に関して取り組む活動的なものだったので、上記の他にも様々な学ぶことがあった。  
 ・今になって振り返ってみるとよく覚えていない

## 課題探求実践セミナー

・「環境ボランティア」や「地域ボランティア」を通して、子どもたちや地域の方々とふれ合うことで、教師の視点から全体をみることでできたので、3年生での教育実習につながったと感じた。

・子ども祭りという行事で、大学生が小学生を肩車してあげていたのを教員が見て、次の授業で思いきり、「そんなことをするのは幼稚なコミュニケーションだ」と否定されたことが非常に印象的でした。これ以降、誰一人として肩車やおふんなどをする人はいなくなったので、それくらい心に効く一言だったと思います。

・1つの事について皆で調べて、それについて自分たちの意見を持って話し合ったりすることが今まであまりなかったので、そこが印象に残っています。

・1年生の時に受講したので、ある程度看護の勉強をした後に受講していたら、グループの際にも違った意見が出ていたと思うので、おもしろそう。

・1晩つかって自分の「脱〇〇」についてのプレゼン準備をしたこと。グループ内での意見交換など印象に残った。

・2回生で受けたので少しレベルが高くなっていた。

・3・4と同じ、自学のキリになった。また、グループ学習でもあったため、チームワークや仲間と協力することの重要性も知った。このとき同チームであった子は今でも交流がある。

・JICAの方の話をはじめてきたことはとても印象に残っていますし、自分が何をすべきか深く考えるきっかけになりました。初年次科目の中でこれが一番役に立ったと思います。

・あまり覚えていない。

・あまり面識のない子に接するときにためらってしまい、子どもたちに助けられました。

・犬、猫の殺処分場に行ったこと

・いろいろな考えを持った人がいるんだと思いました。

・うまく言えませんが、意味がありません。

・大川村に行ったのがとても良かった。

・多くの人が自分の興味のあることを考えグループ内で話していたので楽しくやれました。

・訪れた先で、とにかく人があたたかかったこと、自然が我を忘れそうなくらいきれいだったことです。どこの施設(宿泊、たきづくりなど)に行ってもやさしく受け入れてくれたことがとても印象的でした。

・同じグループの人と意見が合わず、話し合いに苦労したこと。

・覚えていない

・思い出せない。

・かき氷を使った実験で、友達の間が広がった。

・学教の生徒が子どもを肩車したできごと。お兄さん、お姉さんと先生は違うということを実感した。

・課題探求セミナーでは、グループのみんなで考え合い、話し合い、実践したりして、苦労もありましたが、楽しかったです。

・課題探求セミナーでは、本来の自分の専攻と全く関係のないものを受講したが、現地に行って実際にその場所の人と話聞き体験し学ぶという、自分の専攻では体験できないことが出来たのが楽しかった。また、高知の田舎の方へ行ったので、自然を肌で感じるものが出来たのが良かった。

・課題を協力して解決していく楽しさ。

・合宿

・合宿があつてとても印象に残っており、密度の濃い時間が過ごせたと思います。

・合宿が大変で、自分がこれからどうい人間になっていくか寝ずに考えた。

・合宿が楽しかった。

・合宿やディスカッションが楽しかった。

・環境ボランティア活動で、初めて子どもたちの前に立って、いろいろと指示を出したこと。

・環境ボランティアでのレクリエーションの企画の重要性を学んだ。

・頑張ったわりに成績が今一つだったこと。

・教授や学生サポーターのやる気も高く、自分が言いたいこと、聞いてほしいことを聞いてくれて自分の気持ちによりそってくれた。導いてくれるのが上手かったと思う。

・グループ学習が良かった。仲良くなるきっかけ作りになった。

・グループ学習はみんなで協力するとずばらしいものになる。

・グループ活動等々

・グループが分裂しそうになったが、話し合いにより解決された。

・グループ間で多少のいざこざがあったが、結果的にコミュニケーション能力を発達させる点において役立ったと思う。

・グループ間で話し合い、個人の意見を集団の意見としてまとめていく上でコミュニケーション能力の向上及び自ら学ぶという姿勢を身につける手助けとなった。

・グループごとに自分で学ばせたいことを考えて学習教材を作ったこと。実際に他のグループの教材を利用することで、自分のグループの教材の改善性などを見つけていくことができた。

・グループ作りから始めて、問題提起、解決まで自分達で協力してこなしたこと。

・グループであるテーマについてゲームを作って、楽しかった。

・グループで意見を出し合い、話し合うことは良い学習になったと思う。

・グループディスカッション等、意見を出し合い一つの結論を出す機会が多く設定されているためになった。

・グループで木の枝の本数や葉の数を数え、発表の時に理論的に説明出来たこと。

・グループで自己啓発の発表を合宿で行ったこと。

・グループで授業時間外に集まって、資料を作った時間がとても充実していて、楽しかったのを覚えています。

・グループで調べてきた内容を発表するときどこが付け込まれるかなども考えながらやったことが良かったと思う。

・グループでの話し合いを授業外でも行ったこと。

・グループで話しあつたり発表したりして、人とコミュニケーションをとる機会が多くて勉強になった。この3年間では数少ない機会だったので、このような場が重要だと思った。

・グループに分かれて、資料を作成し、発表しました。発表するための資料が、模造紙だったので、プレゼンを作成するよりも時間がかかり、大変でした。

・グループの人と協力して、一つのことを求めるという大変さを学びたい経験ができた。

・グループのみんなで調べてまとめたこと。

・グループ発表のためにグループの皆で自転車をこいで遠出をしたこと。

・グループワーク

・グループワークが多く、友達はできた。パワーポイントの使い方があまり上手くできず、たいした発表ができませんでした。

・グループワークで「シカの被害をどうするか」という課題でプレゼンを行った時は、その時はまだよく知らなかったシカの食害や問題について勉強になったので良い機会となった。自分の取り組み方に関しても、本を探して情報収集する

など、割と積極的になれたと思う。

・グループワークでの意見がなかなかまとまらなくて大変だった。相手に伝える能力が大切だと思いました。

・グループワークでみんなの意見を出し合ったりして1つのものを完成させた。

・グループワークをして、自分と違う意見を持つ人が多くいることを知り、視野が広がった。

・グループワークをよくしていたが、グループでの集まりに全く参加しない子もいて困った。

・グループワークの大切さを学んだ。

・黒潮町でカツオのタキをつくりたり、ピーチコーミングをすることでメンバーが仲良くなった。その後、その中から黒潮町でキャンドルナイトをする活動が始まったこと。

・黒潮町にいた人々のホスピタリティーが感動的で忘れられません。

・黒潮町の廃校を利用した宿泊施設に泊まったこと。

・交通の便の悪い地方の廃れ具合を見て危機感を感じた。

・後輩だらけの環境でやりましたが、皆が頑張ってくれたおかげでサクサクグループワークをすすめることができました。

・コースが決まった後で、やりやすかった。

・国際協力入門は実際JICAの人と話せて良かったです。

・答えが一つに定まらない問題を、周りの人や地域の人に聞いて人の心理など読み取ることが大変だった。

・子どもたちと活動するために、どうやったら楽しく、安全にできるだろうかという課題等を活動前にグループで議論したり、活動後も振り返りをして、反省点をグループで見つけ、次に活かせるようにした。

・子供たちとの触れ合いの後、全体に「肩をまはするな」と言われた。子供との接し方を教師の視点から考えなければいけないと感じた。

・子どもたちと触れ合いながらの授業、経験が出来、自分自身の実践力向上に繋がったと思う。

・子どもたちと触れ合うことが多く、たくさんの子どもたちをまとめることの難しさを知りました。また、無口な子や暴力的な子など様々な子どもたちへの対応の仕方でも悩みました。

・子どもたちとふれあえて楽しかった。

・子どもたちとふれあえる機会があるのでとてもよかったです。

・子どもと触れ合う時間が多くて、また子どもをも楽しませるために、どうしたらいいかをみんなで必死に考えたりして楽しかった。

・子どもと触れ合って、一緒に万げ鐘を作ったこと。

・子どもにどう対応していいかわからず環境ボランティアでは当日ぎくしゃくしながらやっていたと思う。

・子ども祭りや地学ボラなどで子どもと触れ合えたことは自分の教師への夢を再確認する機会になった。

・コミュニケーション能力がついた。

・こんな発想があるんだと驚かされた。

・サイコロ1万回振った

・ささいなことでも子供にどんな影響を与えるのか、授業全体を通して考えさせられた。

・させつ……

・様々な子どもがいて、関わり方が難しかった。

・様々な問題に対する意見をたくさん聞いて、そういう考えもあるんだと思うことが多かったです。

・自主的に発言することや、自分の意見を持って行動することなど、実践的でいい授業だったと感じた。

・実際に子どもたちと加わることから学ぶ部分が多いということを教えてもらったように感じている。

・実際に児童・生徒と関わったので、すべて印象に残っています。

・実際に林業が衰退して機能をはたしていない森を見に行ったこと。

・実践する上で、子どもとの接し方やリスクマネジメントなど班のメンバーと話し合いながら取り組んできました。価値観や考えの異なる学生たちとの意見交換をしていく中で、自分自身物事を多角的な視点でみる能力が高まったと感じています。

・自分達で課題を設定して調べてまとめたなどの作業をみんなでやって楽しかった。

・自分たちで課題を発見し、調べていく過程での難しさ。

・自分たちの思考や考え1だけで「答えがない」ものを見つけたというのは非常に大変ではありましたが、それゆえに自発的な形成や仲間との協力性などを身に付ける点においては大学生活の中でとても役立っている。

・自分でも何か学びを創る難しさを知りました。

・自分のアクションプランを考えて、みんなの前で発表したことが印象に残っている。あと合宿に行ったこと。

・自分の地元である高知の良さや特色を授業を通して見直すことができ、改めて高知が好きになった。

・自分の作った問題が後で自分の首を絞める問題だった。

・社会人の方々が興味をもっていない経験も多く話してくれたことです。それによって多くのことに興味をもつことができました。

・自由探求学習は課題設定から調査方法や発表に至るまで、全てが自由に自分達で考えなければならぬので、とても大変だが、とても意味のある授業だったと思う。

・授業以外にもグループで集まり発表の準備をして結構大変だったです。しかし、発表後は課題も解決でき達成感でいっぱいでした。

・授業時間内で終わらそうと多くの授業時間が確保されていたが、課題の内容に差があり、ムダな時間を過ごす時があった。

・授業だけでなく、実際にフィールドに出ていくことはとても重要だと思う。理解は確かに必要だけど、実感しなければそこにもなかなか行きつけないと思うからである。

・受講する意義が見いだせなかった。教育学部だから、子どもとふれあうイベントを行うというのは安直すぎる気がする。もっと語学や論文の書き方に力を入れてほしい。

・主専攻とは違うセミナーになったので、つらかったことを覚えている。違う専攻の人と友人になれるよい機会になったが、できれば、自分が専攻している科目のセミナーに全員が行けるようなものにした方がよいと思う。

・準備などが忙しななと感じた。

・小学生との交流がメインで、地域の学校にボランティアとして行き、一緒に清掃活動等を行った事で、たくさん学ぶ事があった。

・小学校に行ったり、小学生に大学に来てもらったりして、子どもたちと接することができたことが、教育実習等につながったと思う。

・小学校に行くと、ゴミ拾いなどを行っていた。大学に入って初めての現場での子どもたちとのふれ合いに、大学に来た実感がわいたのを覚えています。

・小学校を訪問してゴミ拾いをし、後に体育館でゲームをして遊んだこと。小学生は一生懸命にゴミ拾っていたし、体育館では楽しそうにレクリエーションをしてくれた。ケガをした子がいたが、その子供と遊んでいる子供の方を見なくてはいけないのが教師が大変な仕事だと思ったのを覚えている。

・しょーもない

・食肉のDVDを見た

・食についての講義がおもしろかったことを覚えている。

・知らない人たちと毎回変わっていくメンバーと話し合っただけで最終的に自分で結論を出していく過程!!

- ・自律協働入門では、今までのわたしではまだまだだめだと分かったとともに新しい自分・考え・コミュニケーションを身につけることができたと思います。特に、合宿では社会人の話を聞いて良かったです。さらに、コラーパーやFTの方と仲良く話せてよかったです。そのため、私もFTもやりたいと思えることができました。そして、人間性を身につける土台になったと考えています。
- ・自律協働入門は良かった。
- ・数学志望で数学のあるセミナーを選んだが、情報も同じ授業内であって、こちらの方に興味をもてた。
- ・すみませんが覚えていません。
- ・セミナーで行った合宿でのプレゼンテーション作制。
- ・セミナーはテーマがテーマだったので嫌な思い出はありません。
- ・その年次の人間文化学科で「課題探求実践セミナー」を受講したのが私1人で、社経の人たちと一緒に6人くらいでやったのが女子1人だったので、すごくさみしかった。
- ・大学・学問基礎論となら変わるものがなかったので失望した。
- ・大学基礎論と変わらん。全て地域協働入門のようにすべき。
- ・大学生だけでなく、社会人の方や高校生の子もいて年齢層幅広い方々の意見をたくさん聞くことが出来、多角的なものを見方を学べたように思います。
- ・大学で1番始めにグループワークに取り組んだ授業です。佐賀町に行ってカツオのタタキ作り体験、砂浜美術館に行ったり田舎すしを食べたり、すごく地域と密着し、その地域の問題に取り組めて視野が開けました。
- ・大学に入って初めて、グループで集まったりしたので思い出深い。またクラス(~組)以外で初めて友達が出来たと思う。
- ・大学の初めて授業でこの時間を取り入れてあったことはとても意味があったと思います。
- ・他学部の人と共同して課題を解決するために議論することができたのはよかったです。
- ・他学部の人と交流できたよかったです。
- ・他学部の人との関わりは新鮮で良かった。
- ・他者との相互理解のためのコミュニケーション能力を培うことができた。
- ・他人にまかせられる人が多いたときにどの方向に向かわせるかを提示する人が必要だと思います。
- ・他の分野と協力することの大切さがわかった。
- ・地域・学校ボランティアで、それ自体を企画し、実行したことが楽しかったし、いろんなことを学べた。また地域の方々との交流の機会もあったのでよりよいものとなった。
- ・地域学校ボランティアで子どもとふれ合い、お兄さんお姉さんではなく教師としての対応を求められたことを覚えています。
- ・地域に対して、実際に見学することで教室だけではできない学びを体験できた。
- ・地域ボランティアや環境ボランティアで、児童とふれあえたのが1番楽しかったです。特に、環境ボランティアでは、自分自身が仲間と協力してゲームを作り、行ったことが印象に残っており、その小学校の地域の方々と話をすることができました。
- ・チームのみんなとコミュニケーションをとることによって授業が円滑に進んだ。違う学部の人ほとんどだったので、全く考え方が違う人が多く、話し合いがとでも充実していた。
- ・地学ボラ担当で、青少協の方と協力しながら進めることができた。
- ・地学ボラで準備が大変だったこと。出会った男の子が自分の絵を描いてくれたこと。
- ・地学ボラにてゲーム係を経験し、いい勉強になった。
- ・地学ボランティアで三里小学校に行ってゴミ拾いをした。
- ・地方の田舎でも、自分たちの土地に魅力を見つけることで、若者がその土地から離れず、何か町のためにできないかと積極的に活動していたこと。若者が土地を離れるのは「企業がないから」だけではないことに気づいた。
- ・中学生でもできるような課題を与えられ、非常に困惑した。
- ・ディスカッションで他学部の人と話して、刺激を受けた。
- ・図書館の使い方を学んだ。
- ・とても楽しくて他の学部の人と仲良くなることもでき、自分の考えを言ったり、人の意見を聞いたりして、視野が広がった。
- ・とにかく準備が大変でした。綿密な準備をすることが成功への近道であると思います。
- ・泊まりに行ったのが楽しかった。
- ・どんな授業だったか忘れませんでした。
- ・なかなか全員が集まることができなくて大変だったが、その日にいない人の分まで協力することができた。
- ・なかなか目的としているものにたどりつけなかったが、時間外に集まりある程度まとめることができた。
- ・夏休み中に何らかの活動をしてそれをプレゼンとしてまとめて発表しました。夏休みに色々な活動をしたことをよく覚えています。国際協力入門を受講しましたが、実際世界で活動している方達の話を聞いて、自分で物事を考えられて楽しい時間でした。
- ・入学してすぐに合宿があり、他学部の学生と交流を持てたこと。また、同じ回生の子が、どのような目的を持って大学に来ているかを知り、大きな影響を受け、考えさせられた。自律協働入門は私にとって一番良い意味で影響力のある、一番学びの多い授業であったと言える。
- ・初めて子どもとふれあう機会でもドキドキしたのを覚えています。
- ・発表が何度もあり、決められた時間で話し合いをし、意見をまとめるということがたええられた。ディスカッションに少し慣れたのではないかな。
- ・パワーポイントを作成し、プレゼンの練習をみんなでして、発表の難しさを知った。
- ・パワーポイントを使ってプレゼンした。そういうのを使ってプレゼンするのは得難いと思う。
- ・パワーポイントを用いての発表
- ・人にてきかくに物事をつたえる難しさを感じると思う。(1つの絵を見て、それを次の人に言葉だけで伝えていくゲーム?)
- ・プレゼンの難しさを知りました。
- ・プレゼン発表のとき緊張してうまく話せなかった。
- ・プレゼン等を作成するにあたり、あまりにも他の人が用事が多く、結局1人であらからたプレゼンを作成したが、周囲に受け入れてもらえず苦勞した。プレゼン自体は結局直前の深夜までかかるなど、ギリギリでの作成が多く、大学生同士での信頼ができなくなり、言い訳を聞かされるのにうんざりした。
- ・フレンドシップ事業のまとめをシンポジウムで発表するために行った班の話し合いで、それぞれが自分の考えを出しあって、何時間も議論したことが印象的でした。
- ・フレンドシップ授業やボランティアなど大学一年生でやる授業としては適切かと思えます。
- ・文学部の先輩の授業だったので、新鮮だった。地域の行事に参加できて良かった。
- ・別府温泉まで行った
- ・他の学部の方の話や、社会人の方の話を聞くことができ参考になりました。

・毎回班ごとに発表する機会がありましたが、自分が発表する時はとても緊張しました。これもいい経験になったと思います。

- ・毎時間グループワークをし、貧困や環境問題について考え、発表した。
- ・まだ農学についての専門知識があまりなく、課題についてグループで議論するには、知識が少なすぎた。そのため、大学基礎論、学問基礎論とあまり変わらないことをしただけとなった。
- ・無意味だったし、課題探求実践セミナーにさく時間を無駄だと感じた。結局やる人はやるし、やらない人はやらないまま終わってしまっている。
- ・メンバーのそれぞれの性格に合った役割が自然と分担されて、スムーズに話し合いを進め協力することができた。
- ・模造紙を壁にはって発表したのが印象的だった。とても緊張したが、ためになったと思う。
- ・問題は何かを自ら考えることができた。
- ・山の肥料をつくるころの異臭とその後の焼肉をみんなで食べたことです。
- ・よかったです
- ・私が受講したのは国際協力入門であったが、様々な知識、経験のある人と話し合えたのは楽しかった。学部の枠がないのも良いし、自分の見方・考え方の狭さはよかったです。
- ・私たちは生活している今この状態を当たり前のように生きていますが、世界にはもっと大変な国があり、その背景にはあらゆる歴史があるということを知りました。日本に留学に来られている話を聞いた時は「日本はやっぱりすごい国なんだ」と実感できました。そう感じられたことがうれしかったことを覚えていました。

### 3 課題探求実践セミナー分科会

副分科会長 木場章範（農学部）

課題探求実践セミナーにおいて実施された、授業評価アンケートおよび自己分析アンケートについて、量的データを概観したうえで、課題探求実践セミナーについて、セミナーの意義と学生の捉え方について確認する。

授業評価アンケート・自己分析アンケートは、自律協働入門、地域協働入門Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、自由探求学習Ⅰ、学びを創る、学びを考える、国際協力入門、人文学部、教育学部、理学部、医学科、看護学科、農学部においてにおいて実施された（後期開講科目は集計が間に合わなかったため、ここには挙げていない）。授業全体でみると、授業そのものについての評価は高い水準にあることが示された。また、授業内のばらつきはあるが、ほとんどの項目において、課題探求実践セミナーの意図が反映されている回答を得た。以上より、全体傾向からはおおむね良好な結果であることが読み取れた。さらに、自分を見つめ直したり、将来や次の活動を考えたり、協働することの意義・楽しさ・難しさを知ったりと、数字では分からない内容が多くでてきている。一方、学生からの意見の中には、今後の課題探求実践セミナーにおいて改善していくべき点を含むものがあった。また、課題探求実践セミナーを担当する教員の関わり方において、改善すべき点も浮かび上がってきている。これらの意見を参考に、次年度以降、課題探求実践セミナーの改善が望まれる。

以下に授業改善に参考となる代表的な意見を列記した。

- ・ こういう方向に持っていこうという先生を感じる（学生主体の活動なのに）。
- ・ 授業時間が守られてない。5限だけど時間通りに終わってほしいです。
- ・ 時間オーバーが気になる。シラバスにもともと書いてくれていたら良かったかな。
- ・ 学びのプロセスをもう少し意識した実習にすべきだと思いました。
- ・ 学生によって意識の差があることが残念です。
- ・ もう少し、先生からのアドバイスがほしい。
- ・ ほとんど全て任せられっきりですごく大変だった。誰かにだけ負担が重くならないように、皆が平等に作業できるように工夫してほしい。
- ・ ある程度はしかたないことだが、グループ内で仕事をする人としらない人の点数が同じなのはどうかと思う。
- ・ ダメ出しばかりして、なにか否定すればいいと勘違いしているように見える。教員の役割としては、及ばない面を指摘するのみでなく良い所を見つけ、それをのばすためのアドバイスをするとかいうことも必要だと思う。特に、過程で何か言ったりしても発表後、しかもグループがまだ前に立っている時点でグチグチと反省点を述べるのは適切でないと思う。

以上の学生からの意見を鑑みると、今後に向けて以下のような改善方策が考えられる。

- ・ 授業時時間オーバーや時間外学習をはじめ授業の具体的な進め方・取り組み方について、シラバスやオリエンテーション等で周知した方が良いと考えられる。
- ・ グループワークに全員が参加できるような指導が必要である。また、教員がファシリテーターとしての役割をうまく演じることも重要である。
- ・ グループワークに関して適切な指導を行うために、課題探求実践セミナーを単独で評価することに留まらず、大学基礎論や学問基礎論を含めたグループワーク型の授業に関する振り返りも必要である。

- ・ 学生から批判的な意見が出ているクラスは限られており、指導する教員のスキルや取り組みの差をなくしていく努力が必要である。
- ・ グループワーク型授業の指導法に関する FD が行われているものの、参加は一部の教員に限られる。授業担当者の FD 参加を促すことや新任研修等での FD の実施等、改善に向けた方策が必要である。

## 5 人文分野分科会

人文分野分科会副分科会長 田鎖数馬(人文学部)

人文分野分科会では、平成24年度の自己点検・自己評価活動として、「授業改善アクションプラン」を実施し、その分析を行った。「授業改善アクションプラン」は、5週目アンケートを実施して、その結果をもとに、アクションプランを作成し、その後、15週目アンケートにより検討するというプロセスからなる。1学期については、大石達良前自己点検・自己評価部会長の主導により実施していただき、2学期から、自己点検・自己評価部会が中心となって実施した。また、2学期のアンケートに関しては、人文分野で独自の質問項目を作成し、15週目アンケートに追加した。今年度の自己点検・自己評価活動は、2学期のアンケートの実施とその分析が中心となったので、その結果をここで報告することにしたい。

2学期に、5週目、15週目アンケートを実施した教員は、人文分野では4名であった。この4名の教員に対するアンケート結果を集計してみると、全ての質問項目において、受講生から極めて高い評価が与えられているということが分かった。例えば、「1.この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか」という質問に対しては、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した受講生は、回答者全体の約97%に達し（「はい」という回答は、約76%）、逆に、「どちらともいえない」「どちらかといえばいいえ」「いいえ」と回答した受講生は、僅かに3%であった。また、「3.この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか」という質問に対しても、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した受講生は、回答者全体の約97%（「はい」という回答は、約81%である。）で、「どちらともいえない」「どちらかといえばいいえ」「いいえ」は3%である。「5.この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか」という質問では、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した受講生は、回答者全体の約95%（「はい」という回答は、約69%である。）で、「どちらともいえない」「どちらかといえばいいえ」「いいえ」が5%である。「6.この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか」という質問では、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した受講生は、回答者全体の約95%（「はい」という回答は、75%）で、「どちらともいえない」「どちらかといえばいいえ」「いいえ」が5%である。また、授業改善アクションプランは授業をよりよいものとする効果があったかという質問に対しては、回答した受講生の約85%が、「はい」「どちらかといえばはい」と答えていた。これは、驚くべき数字である。4名の教員の結果を見る限り、受講生にとって有益な授業が展開されていたと考えてよい。ただ、そうした中で少し気になるのが、「4.この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか」という質問で、これに対しては、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した受講生は、回答者全体の79%であった。これは、数字としては高いのであるが、他の質問に比べればやや低くなっている。逆に「どちらともいえない」「どちらかといえばいいえ」「いいえ」は、21%で、そう回答した理由としては、「授業の予習・復習を促していない」、「学生が時間外学習を行うための課題を提示していない」というのが多い。つまり、授業には満足しているが、授業内容を深めるための自主的な時間外学習が教員から促されていないという思いを持つ受講生が、少なからずいるということが分かる。これは、意欲はあるけれども、教員から課題を与えられないと、時間外学習として何をすればよいのかが分からないと受講生が感じているということである。「自主的な学び」の姿勢を、教員からの促しによってしか得ることができないのであれば、それは「自主的な学び」とは言えないような気もするが、その点はおもかくも、そのように感じる受講生がいるからには、時間外学習を促すような課題を受講生にもっと与えていく必要があるのかも知れない。

人文分野で設けた独自の質問としては、共通教育の授業が専門分野の学習にどれほど有益なものかを受講生に感じられているのかを調査する項目を設けた。具体的にいうと、「1.この授業の内

容は、自分の専門分野である。もしくは、将来進む予定の専門分野の内容に該当する」という受講生に対しては、「この授業は、自分の専門分野を学ぶための基礎的な力を身につける上で、役に立ったと感じましたか」という質問に答えてもらい、「2.この授業の内容は、自分の専門分野とは異なる。もしくは、将来進む予定の専門分野とはちがう」という受講生に対しては、「この授業は、自分の専門分野を異なる視点から幅広く理解する上で、役に立ったと感じましたか」という質問に答えてもらった。しかし、残念ながら、想定外の事態が起こってしまった。というのも、1か2かどちらか一つの質問のみに必ず回答するよう、アンケートに書いていたにもかかわらず、相当数の受講生が1と2の両方ともに回答してしまったからである。これでは、こちらが必要とする調査結果を得ることはできない。とはいえ、一応、得られた結果を示しておく、1の質問に回答した受講生は、128名で、「はい」が44名、「どちらかといえばはい」が43名、「どちらともいえない」が36名、「どちらかといえばいいえ」が1名、「いいえ」が4名であった。2の質問に回答した受講生は、130名で、「はい」が18名、「どちらかといえばはい」が19名、「どちらともいえない」が30名、「どちらかといえばいいえ」が15名、「いいえ」が48名であった。上記のように、1と2の質問の両方に相当数の受講生が回答しているので、実質的な数字とは言い難いが、ある程度の傾向は反映していると仮定した上で、考えてみたい。まず、1の回答者の多くは、授業は自分の専門分野を学ぶ上で有益であったと感じていた。従って、教員は、専門的な内容に繋がるような基礎的な知識をしっかりと1の受講生に伝えることができているということになる。それに対して、2の回答結果を見ると、授業は自分の専門を学ぶ上であまり有益ではなかったと回答した受講生が多い。しかし、そうであるにもかかわらず、上記の通り、授業自体に対する満足度は非常に高いので、そう回答した受講生は、一般的な教養としての興味を授業から感じる事ができたということである。初めから予想できたことではあるが、授業内容を専門とする学生とそうでない学生にとって、授業に対する要求が異なっているということが、こうした結果には現れているだろう。共通教育の授業であるので、あまりに専門的な内容になると、その内容を専門としていない受講生には難解で、興味も感じられなくなってしまう可能性があるけれど、逆に、専門性をあまりに薄めると、その授業を専門とする受講生には物足りないものとなる。そのバランスの取り方が難しいところではあるが、今回の結果を見る限り、どの教員も適切なバランスで授業をしていたということになる。

## 6 社会分野分科会

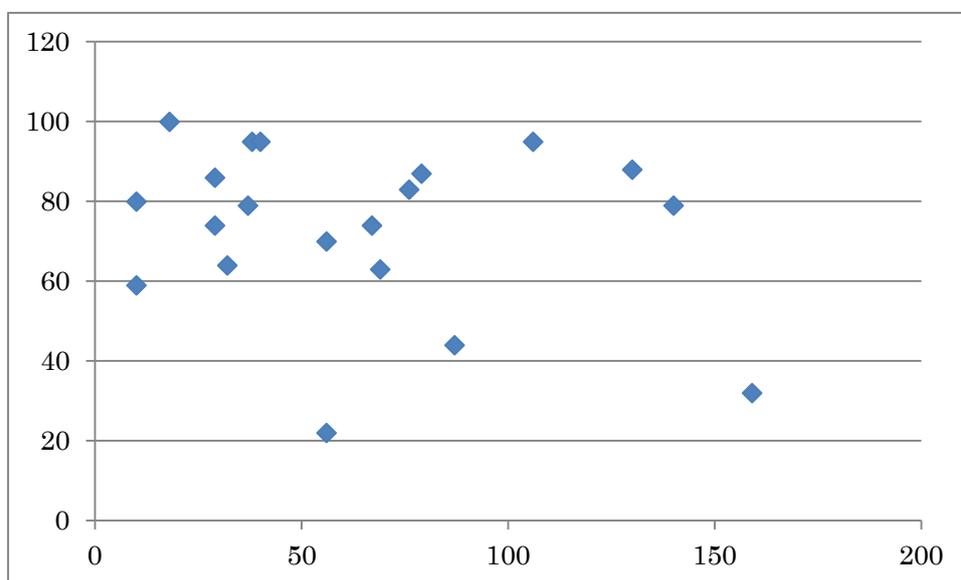
社会分野副分科会長 山崎 聡 (教育学部)

5 週目と 15 週目のアンケートを昨年より引き続いて実施。大体の授業において、概ねフィードバックによる改善が見受けられる。

平成 23 年度に提起された、教育効果に照らして一部の科目は受講者数が多過ぎるという課題に対応し、24 年度では、受講生 100 名以上の科目を対象に、授業評価アンケートを実施するなど、大教室講義の現状把握に努めた。すぐに理解されるように、講師側にとって、大人数講義が負担であることは明らかであろう。しかし、もう一方の受講側にとっては実際のところどうなのだろうか。ここでは、24 年度のアンケートを用いて、受講者数と学生の満足度に関するごく簡単な考察を試みた。その結果は以下のとおりである。

調査の方法は、極めてシンプルであり、受講者人数と受講者の最終的な満足度との相関を調べたものである(対象は 20 講座)。各講座の 15 週目のアンケートに基づき、項目「総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか」に対する「はい」「どちらかといえば、はい」の合計百分率を満足度と定義した。また、受講人数は、登録者数ではなく、15 週アンケートの回答者数とした。その結果をプロットしたものが下図である。

受講人数と満足度との関係



横軸: 受講人数 縦軸: 満足度(上限 100)

結論からいえば、上記の分析からは、受講人数と満足度の間に、はっきりとした関係(負の相関)があるとは断定できない(回帰分析による数値でも同様であった)。それでも、人数が 150 人超となると満足度が低下する傾向があるのかもしれないが、あくまで直観的予測に過ぎない。冒頭の提起にある「教育効果」の指標として、ここでは「受講生の主観的満足」を用いたが、(当然、指標

として適切であるか否かという問題はあるものの<sup>1)</sup> 受講人数の大小がそれほど満足度に影響しているようには見えない。だがこれには理由がある。結論からいえば、それは、統計処理の範疇外であるアンケートの自由記述部分に示されている。そこで、大人数講義(受講者 100 名以上)のアンケートの自由記述から幾つかの意見をピックアップしてみよう。

「うるさい生徒への注意も良いと思う」「もう少し先生はうるさい生徒にくぎを刺していいと思います」「教室全体がさわがしく、授業を進めるのが大変だったと思います」「話が伝わってこないというか、何ともいえない感じ」「話の語尾が基本的に聞こえにくい」「時々板書が見づらいところがあった」「私語を注意してくれるので授業に集中しやすくなった」「私語や遅刻に対して厳しくするのは当たり前なので、今まで通り注意していいと思う。大教室での講義だったけど、静かで比較的集中して取り組める環境であった」「私語や時間に厳しくてもいいと思う。社会に出れば、普通のことだと思うので、厳しくしても問題ないと思います」

大人数講義の場合は、特に、「講師の声が聞き取りにくい」「受講生の私語」「板書が見えにくい」などが問題であることがアンケートから分かる。こうした要因によって、受講者への教育効果が低下することは明瞭である。事実、自由回答で「騒がしい」という感想があった講義の満足度は低い傾向を見せている。表面的な統計処理では人数と満足度との相関は見られなかったものの、その背景には、大人数でありながらも静穏な環境を保った講師側の労力があつたからだと考えられる。やはり、教育効果、講師の負担、そして恐らくは受講者の満足等を鑑みて、受講人数には一定の限度が必要であると思われる。恒常的に人数が多くなる講座に関しては、コマ数を増やすといった措置が必要であるが、負担増の問題も含めて検討してゆかなければならない。

<sup>1)</sup> もう一つ考慮すべき点としては、「登録人数」と「受講者数=最終アンケート回答人数」との差である。ことによると、教室の人数が多過ぎることが原因で、途中で受講意欲を無くした受講生もいないとはいえない。

## 7 生命・医療分科会

生命・医療分科会副分科会長 野田智洋(医学部)

### 1. スポーツ科学講義

本年度も、岡豊キャンパス開講のスポーツ科学講義においてのみ、授業評価アンケートを実施した。(設問 12)全体としてこの授業にあなたは満足していますかとの評価は 4.44 と良好な結果を示している。

表 1 スポーツ科学講義(生命・医療分野)集計結果(評価項目と平均値および標準偏差)

質問項目	平均値	SD
(1)1 毎回の授業の目的や課題は、明確にされていますか	4.72	0.58
(1)2 教員の声や大きさや話し方は、聞き取りやすいですか	4.84	0.4
(1)3 教員の授業内容の説明は、分かりやすいですか	4.73	0.59
(1)4 授業の進み方や内容量は、あなたにとって適切ですか (①速すぎる・多すぎる、③適当、⑤遅すぎる・少なすぎる)	3.49	0.8
(1)5 配布資料・視聴覚教材・テキストなどは適切に利用されていますか	4.58	0.61
(1)6 教員は、受講生が質問や意見を述べる機会をつくり、それらに答えていますか	4.44	0.77
(1)7 授業に対する教員の熱意を感じますか	4.73	0.57
(1)8 あなたは、この授業に意欲的に取り組んでいますか	4.31	0.86
(1)9 あなたは、この授業の予習や復習をしていますか	2.31	1.31
(1)10 あなたは、この授業によってこの分野への興味・関心が高まっていますか	4.05	1.06
(1)11 あなたは、この授業で身につけることを期待した知識や能力を得ていますか	3.95	0.97
(1)12 全体としてこの授業にあなたは満足していますか	4.44	0.81
(2)A この授業はあなたの今後の生活の参考になるものでしたか	4.3	0.86
(2)B この授業を受けたことで、スポーツについての知識理解が広がりましたか	4.48	0.76
(2)C この授業を通して、スポーツについて改めて考えるところがありましたか	4.45	0.87

自由記述欄での個別意見も、おおむね上記の好評価が反映されている。目立った意見を以下に、例示しておく。

- ドーピングや肉体改造など、医学とスポーツとの関係について、色々と考えさせられることがありました。興味のある内容でしたので、毎回楽しみにしていました。
- 講義は手法がとてもよく、自分の発表の参考にさせていただいています。内容に関しては、普段結果だけみていたスポーツに対する考えが深まってよかったです。又、スポーツ倫理や身体に対して考えることで、今後の講義・その他の活動に対する視野が広がりました。
- 役には立たないが、つまらなくはない。
- 感想やレポートを書く時間がもう少し欲しい。
- 単にスポーツとしての問題だけではなく医療従事者として、どうスポーツに関わっていくべきかを考えさせられた。これからの我々にとって非常に有意義な授業であったと思う。

(以上原文のまま)

## 2. 健康

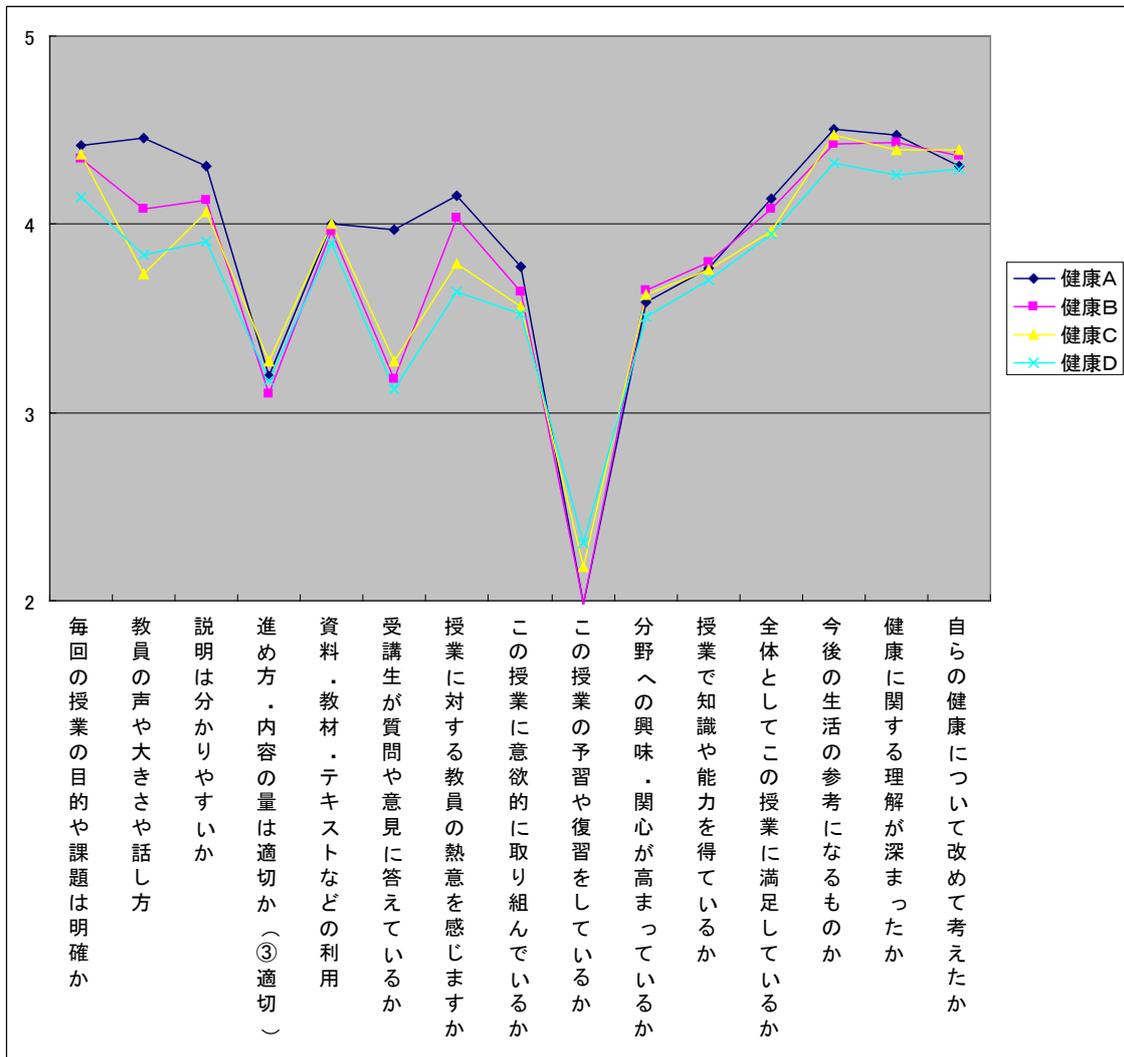


図1 平成23年度「健康」4クラスの授業アンケート結果

今年度1学期に行われた「健康」AからDを対象として学生による授業評価アンケートを実施し、4クラスの各質問項目の平均値を図1に示した。回答者数はAが183名、Bが131名、Cが160名、Dが205名であり、昨年度の165名、143名、121名、139名と比べて受講学生の人数がさらに増えている。

図のように各クラスとも、ほぼ同様の傾向を示しているが、「資料・教材・テキストなどの利用」、「質問や意見を述べる機会を作り、それに答えているか」の項目で、ややばらつきがあった。また、各項目の得点平均はほぼ、例年通りの傾向を示している。

本授業はオムニバス形式のため、この形式のアンケートで評価された内容が自分の担当授業の問題なのか、他の教員の問題なのかを特定できない。現在のアンケートで、集計や分析に多大なエネルギーを使っても、この結果が直接授業改善には結びつかない状況にあり、大きな問題だと感じている。

自由記述欄での目立った意見を以下に、例示しておく。

- 毎回先生ごとにテーマが違い、様々な角度から健康について考えることができました。特に最後の3回の授業は学生の意見を積極的に聞いたり、ぐるぐる歩いてもらったことで、最後ま

で緊張感をもって授業にとりくむことができました。他の授業でも、これまで高校や中学で学習した内容を深くほりさげてあり、新たな見解や知識を得ることができました。メンタルヘルス系の授業では、自分の中でモヤモヤしていた気持ちを変えていくための術を身につけることができたと思います。(健康A)

- 他の講義と違って教授が講堂(大教室)を歩き回り、生徒を指定して意見を求めるので面白いです。自分に解答権が回ってきた問題が、わからないものだと、少々がっかりしてしまいますが、このスタイルは、様々な意味(教授がどこにいるか探す、答えを考える必要がある。すきを盗んでのケータイ・飲食・おしゃべり)で、集中する必要があるのも、いいと思います。個人的には、好きです。教授にはこのような形態の授業を続けてほしいですし、教授を中心にして高知大に対話型講義を広めて欲しいです。(健康A)
- オムニバス形式の講義は初めてだったのでおもしろかったです。ただ若干内容がカブっていました。(健康A)
- 声がかきとりにくい先生もたまにいたので、それを気を付けてほしいです。(健康B)
- 最後の先生の授業は、4回とも、とても興味深い授業でした。考え方がとても変わりましたし、とてもためになりました。また、教え方も、さすが教育の先生だなと思いました。とても分かりやすく、かつ楽しい授業でした。(健康B)
- 今まで知らなかったことを学ぶ機会となり、自分の日頃の生活を見直したり、心身の問題に悩んでいることに対処する方法をつかむきっかけとなり、よかったです。(健康B)
- オムニバス形式のため色々な分野の話が聞けるのは良かったのですが、その分レポートなどの質問時に先生が替わっていたりしたので不便でした。(健康B)
- おもしろかった回とそうでない回の差が大きかった。もう少し、範囲を狭くして、1人の先生に4コマずつくらい講義してもらいたい。(健康C)
- オムニバス形式なので毎回出席しなくてはいけないうのは分かりますが、前半3回分の講義の小テストの日に体調をくずしてしまっ行って行けなくてそれがすごくショックです。同じ先生が3回やるとしても小テストは一括ではなく、毎回やってほしいと思いました。(健康C)
- 「健康」という幅が広すぎるので仕方がないと思いますが、具体的なものから抽象的なものであり、毎回の授業で少し大変だと思うこともありました。具体的→抽象的など、一定の流れがあればよかったです。(健康C)
- 1つ1つの授業は大変密度の濃い、充実したものであったと感じましたが、先生が頻繁に入れ替わるのは少しとまどいました。(健康C)
- 自分の健康に対する意識が変わった。毎回、授業を受ける中で、これから気をつけていこう、とか、もっと健康について知りたいな、と思うようになりました。(健康D)
- 高知大は、下宿生が多いので、このような授業を行って、生活習慣の改善に役立てればいいと思いました。(健康D)
- 先生によって授業方法が異なるので、少しとまどった。前のスライドをメモしているのに画面がきりかわるのが早すぎてたくさんの方がメモしきれなかった。自分の健康に対する意識が高まったと思う。(健康D)
- これからの生活で重要なことばかりであるので、いつも興味を引きつけられる。私の生活で、飲酒・喫煙、そして運動などは身近な問題である。これからも気をつけていきたい。(健康D)

(以上原文のまま)

## 8 自然分野分科会

自然分野分科会 副分科会長 池田徹（理学部）

平成 24 年度は対象学期を 2 学期とし、5 週目アンケートの集計結果、授業改善アクションプランの設定状況、15 週目アンケートによるアクションプランおよび授業改善アンケートの効果の集計結果を検証した。

### (1)5 週目アンケート

5 週目アンケートの集計結果を下表に示す。回答の「はい」、「どちらかというとはい」、「どちらともいえない」、「どちらかというといいえ」、「いいえ」をそれぞれ 5 点、4 点、3 点、2 点、1 点で点数化し集計した。全ての項目において 4 点に近い平均点であり、アンケートを実施した個々の授業についても 3.4～4.5 点の良好な結果であった。

設問	はい ←→ いいえ					有効 回答数	平均
	5 点	4 点	3 点	2 点	1 点		
学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めているか	38	55	37	4	3	137	3.88
知識・能力および授業に対するニーズを確認しながら授業を行っているか	42	53	30	9	2	136	3.91
分かりやすい授業をするように努めているか	37	50	35	9	5	136	3.77
意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしているか	45	50	33	5	2	135	3.97
授業をより良くするための試みをしているか	49	45	31	6	3	134	3.98
総合的に考えて、満足がいくものか	36	55	27	6	5	129	3.86

### (2)アクションプランと 15 週目アンケート

5 週目アンケートで問題点が明確化されたケースでは、アクションプランの全項目と 5 週目アンケートの結果との関連性が確認され、適切なプラン設定であると判断した。5 週目アンケートが良好で問題点が出てこなかった場合には対応が分かれ、抽象的なプランを設定したケースがある一方で、5 週目アンケート結果に依存しない問題の解決をプランに設定したケースもあった。後者のプラン設定は、教員が普段から抱えている問題意識を踏まえてアクションプランのシステムを有効活用したものと考えられる。また、15 週目アンケートを集計したところ、アクションプランの効果、授業改善アンケートの効果の両項目ともすべての授業で 3.2～4.1 点の良好な結果が得られた。アンケート項目は授業ごとに異なるため、以下に 2 つの事例を示す。

### 事例 1

朝倉キャンパス開講科目。15 週目アンケートの集計結果を下表に示す。授業改善アクションプランに設定された各項目について、5 週目アンケートにおいて根拠となったと考えられる集計結果や自由記述が見られた。全 5 項目のうち 4 項目は欠点を改善するためのプランであり、1 項目は長所をさらに伸ばすためのプランと考えられる。15 週目アンケートの結果が良好であることから、授業改善が効果的に行われたと考えられる。

	プラン／設問	はい ←→ いいえ					有効 回答数	平均
		5点	4点	3点	2点	1点		
アクションプランの効果	板書の字を大きく見えやすくし、重要項目の強調などで板書の工夫をする	9	11	13	5	3	41	3.44
	マイクを必ず使い、声を聞き取りやすくする	11	15	9	3	2	40	3.75
	教科書の予習復習など、学生の時間外学習を促し、学習意欲の向上を計る意味で小テストを続けて行う	7	16	12	4	2	41	3.54
	出欠を含めて終了時間を厳守する	18	9	8	2	3	40	3.93
	学生の学習履歴に配慮し、講義内容をできるだけ解りやすくする	8	11	15	3	4	41	3.39
アンケートの効果	アンケートに回答することにより、受講生の声によって授業が改善されたか	10	16	9	3	2	40	3.73

### 事例 2

岡豊キャンパス開講科目。15 週目アンケートの集計結果を下表に示す。5 週目アンケートの結果は全体的に良好であったため、教員本人が 5 週目アンケート項目を意識せず普通の授業活動において目指している課題を踏まえてプランを設定したものと考えられる。一部の受講生の自由記述では、履修前の学習状況のばらつきが授業の理解に影響しているという問題の指摘が見られたが、単一学期における授業改善では対処が困難であると考えられる。15 週目アンケートの結果は概ね良好であり、授業改善は効果的に行われたと考えられる。

	プラン／設問	はい ←→ いいえ					有効 回答数	平均
		5点	4点	3点	2点	1点		
アクションプランの効果	応用課題の内容ができる限り医学・生命現象に関連するよう工夫する	23	23	18	3	3	70	3.86
	各ユニットの冒頭あるいは全階に、そのユニットにおいて最も重要な概念が何であるかを明確に示す	26	29	12	1	2	70	4.01
	十分に理解できているかを確認しつつ、必要に応じて解説を加えられるよう、時間配分を工夫する	24	24	13	7	2	70	3.87

	有益な議論を引き出せるよう、ファシリテーションの仕方を工夫する	24	25	12	5	3	69	3.90
効果 の アンケート	アンケートに回答することにより、受講生の声によって授業が改善されたか	24	20	12	6	5	67	3.78

### (3) 今後の課題

全体的に「この授業で教員は、受講生の知識・能力および授業に対するニーズを確認しながら授業を行っていると思いますか」の設問に対して良好な回答結果が得られており、その理由として「授業開始時または授業期間中に学生の能力やニーズに関する調査(アンケートや小テストなど)をしている」の回答が多く見られた。各教員は様々な工夫をしていると考えられるが、他教員が実施している調査方法を具体的に知るためには、現状では授業参観などの限られた機会に頼らざるを得ない。しかし、全体的な集計ができれば、各教員が調査方法の選択肢を増やす効果が期待される。

前述の事例 2 では、履修前の学習状況のばらつきを問題視する自由記述があった。実際に、試験の成績が双峰性・多峰性の分布をなすことも珍しくはないだろう。履修前の学習レベルによってクラスを分けるのが望ましいが、現実的な解決策とは限らない。この場合、どのような学習レベルを想定した授業を行うかが問題となる。単にアンケートの集計結果が良くなることを目指すならば多数派のレベルを想定するのが有利であるが、教育的に正しいとは限らない。現状では個々の教員の判断に任されているが、全体的な傾向を調査できれば授業設計のための有用な判断材料になると考えられる。

## 11 スポーツ・健康分科会

スポーツ・健康分科会副分科会長 野田智洋(医学部)

### 1. スポーツ科学講義

平成 24 年度は、1 学期に岡豊キャンパスで行われた講義で授業評価アンケートを実施した(生命・医療分科会参照)が、2 学期に行われたスポーツ科学講義AからDでは実施できなかった。代わりに 2 学期は、新しい形式の 5 週目アンケート, アクションプラン, 15 週目アンケートによるプラン実施の効果検証を行なった。しかし、これについては、実施対象者が特定されるため報告書への記載は見送ることにする。

### 2. スポーツ科学実技

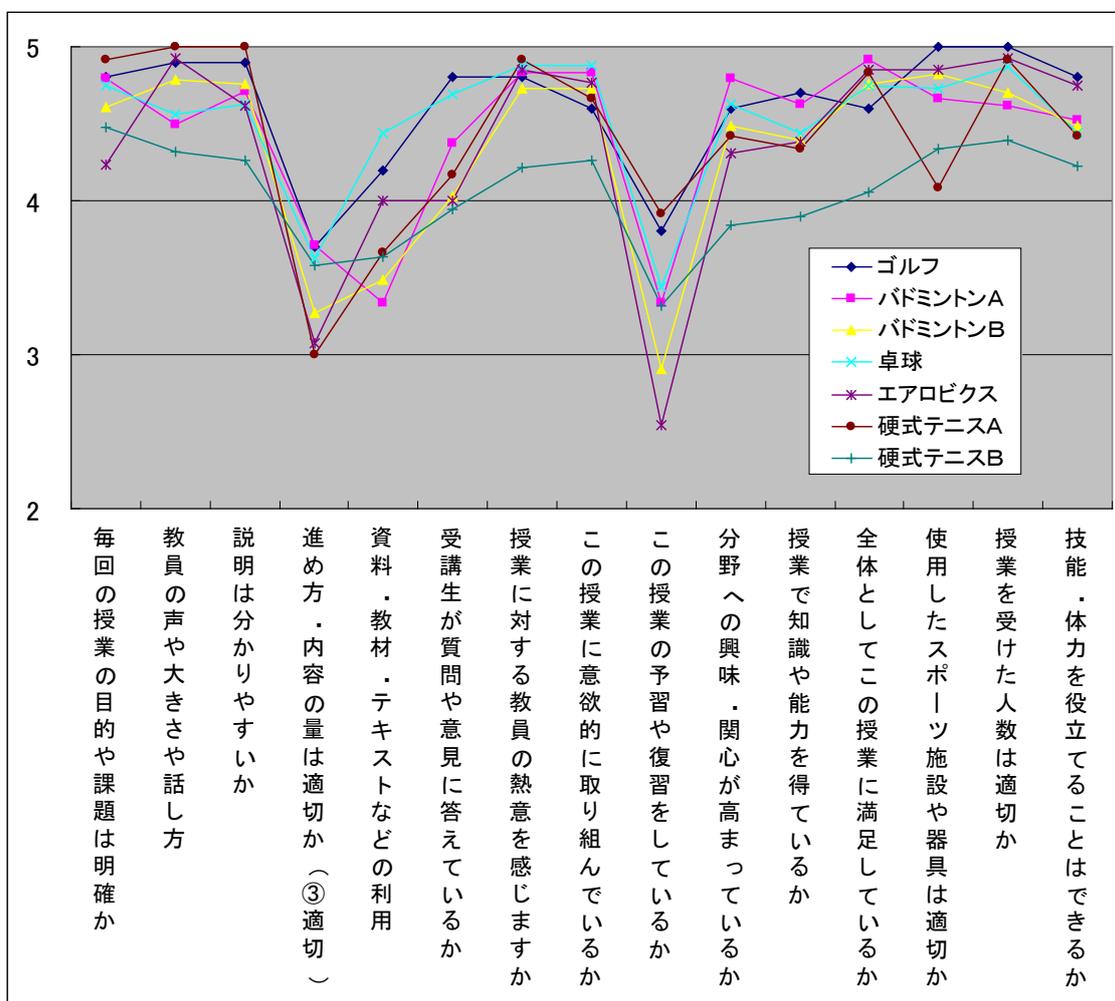


図1 平成 24 年度 1 学期授業評価アンケート集計結果

今年度は 1 学期のみ、すべての授業で授業評価アンケートを実施した。種目は、ゴルフ、バドミントンA、バドミントンB、卓球、エアロビクス、硬式テニスA、硬式テニスBである。

対象となった 7 科目の学生満足度(設問 13)「全体としてこの授業にあなたは満足していますか」の評価は、硬式テニスBが 4.05 とやや低いものの、2 科目あるバドミントンが 4.92 と 4.76、卓

球が4.75, エアロビクスが4.85, 硬式テニスAが4.83であり, 総じて高く評価されている. しかし, 図1のように, (設問 6)配付資料や視聴覚教材の利用が適切かどうか, (設問 10)この授業の予復習をしているかどうか, に関しては低い評価がなされている. これら 2 問については, いずれの種目でもほぼ同様の傾向が認められ, 授業方法に問題があるというよりは, スポーツ実技という科目特性に附帯する要因であると考えられる.

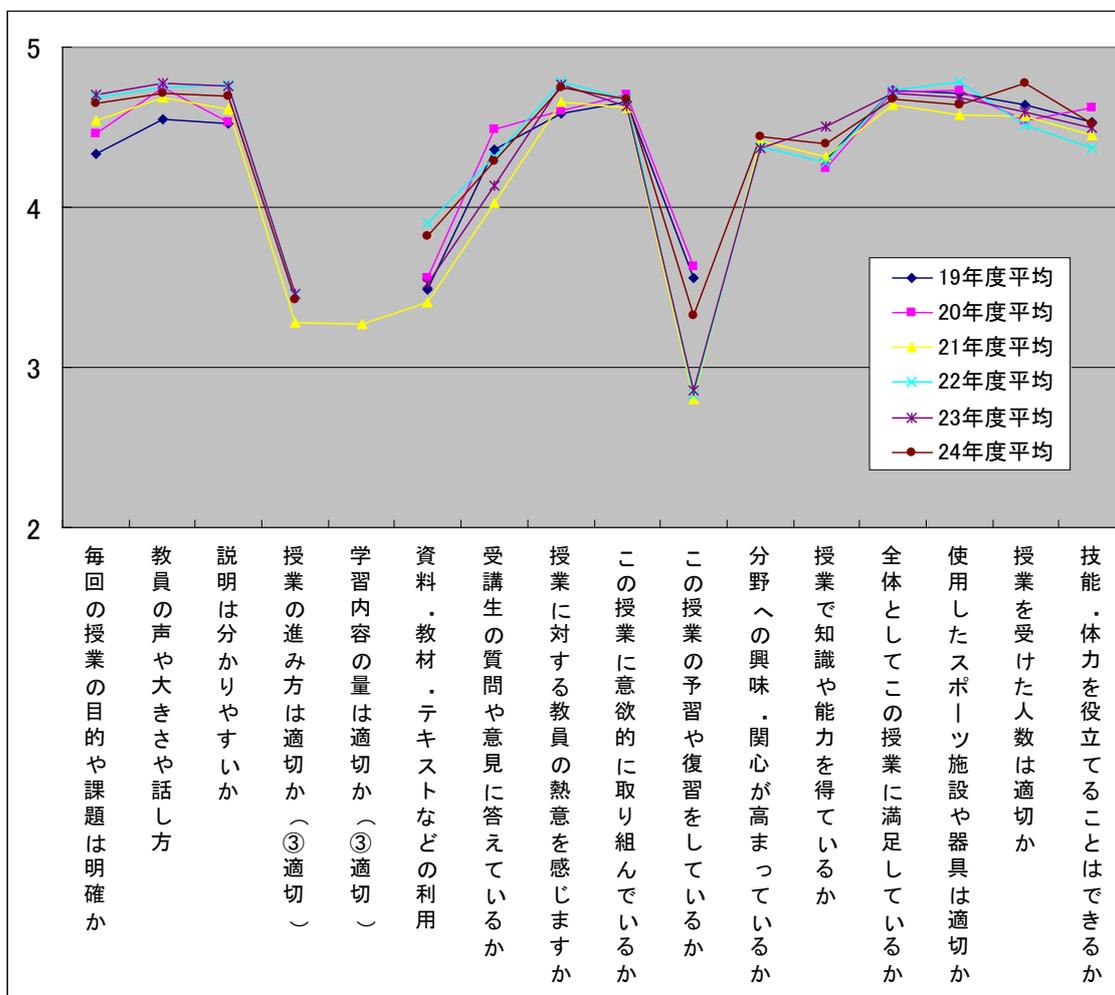


図2 平成 19 年度から 24 年度の学期末授業評価アンケート集計結果

図2は, 平成 19 年度と 20 年度の 2 学期に開講された 4 種目と, 21, 22 年度 15 種目, ならびに 23, 24 年度 1 学期 7 種目の授業評価アンケート平均値を比較したものである. なお, 21 年度はいくつか質問項目が変更されており, 19, 20 年度のデータがない項目がある.

図のように過去 6 年間の傾向は大きく変わっていない. 設問 10 の予復習に関する質問項目は, 19, 20 年度は「教員が予復習するよう指導しているか」との内容なのに対して 21 年度は「学生自身が予復習をしているか」であるため, 平均値が厳しくなったものと考えられる. 23 年度は「授業で知識や能力を得ているか」との質問に対する回答が 4.51 と過去最高を記録したが, 24 年度は残念ながら 4.40 に低下した.

現在のところ, 授業に対する教員の熱意, 学生の意欲ともに高い評価を維持しながら推移しており, 特別な支援や対策を講じる必要はないと考えられる. しかしながら, 実技を選択する学生の減少に歯止めがかかっておらず, 各学部学科の必修科目の時間割を調べるなどして, 実技科目

の時間割を履修しやすい曜日に変更するなどの対策が必要である。

また、スポーツ・健康部会では、スポーツ科学実技に関して昨年度までと同様、次のような独自の設問を設定した。

①「授業で使用了したスポーツ施設や用具は適切ですか」

学習意欲を喚起するためには重要な要素である。24年度は4.64と昨年の4.69に比べてやや低くなっているが、全体の傾向は変わらない(22年度:4.78, 21年度:4.58, 20年度:4.73, 19年度:4.72)。

②「一緒に授業を受けた人数は適切ですか」

授業の成果を上げるためには適正人数がある。多すぎると練習の回数や機会が制限され、技術の向上にとってはマイナスの要因にもなる。平均すると数字の上では今年度も4.77と高い評価を得ている(23年度:4.60, 22年度:4.51, 21年度:4.57, 20年度:4.54, 19年度:4.64)。

③「獲得した知識や技能、体力を今後の生活に役立てることが出来ますか」

これについては4.51と、昨年の4.50と同様の傾向だが(22年度:4.37, 21年度:4.45, 20年度:4.62, 19年度:4.53)、さらに生涯にわたっての運動実践や体力づくりなどの必要性を理解させるように工夫したい。

自由記述欄での個別意見も、おおむね上記の好評価が反映されている。目立った意見を以下に、例示しておく。

- ゴルフは生涯楽しめるスポーツなので、今後も楽しみながら続けていきたい。
- 回数を重ねることに、ボールが飛ぶようになり、だんだんと楽しくなりました。
- いつもは黒板をノートに写す講義ばかりなので、とても良い運動にもなりリフレッシュのできる楽しい授業でした。(バドミントンA)
- 楽しかった。グループごとにペアを組んだりして、いろんな人と戦えるのがよかった。自分は強くなくても、チームとして勝ち上がれたり、チーム内の強い人とできたりするのがよかったと思う。ありがとうございました。(バドミントンA)
- バドミントンに関して知らないルールがたくさんあり、新たな発見がありとても満足な授業でした。(バドミントンB)
- 大学生は、あまりスポーツを行う機会がないので、大切な授業だと思った。バドミンのルールや戦術について学ぶことができ、勉強になった。(バドミントンB)
- とても楽しかったです。週1の楽しみでした。(卓球)
- 非常に楽しめる授業だと感じています。(卓球)
- エアロビクスは初挑戦でしたが、とても楽しく踊ることができました。十分に体を動かすために大きく動くことが大切だと思いました。また、呼吸法もとても大切だと感じました。毎回この授業の後にはリフレッシュできていました。(心も身体も)
- 毎週1回の授業ですが、体が始める前よりすごく軽くなっている気がします。自分の生涯スポーツにしたいと考えています。先生も明るく元気で、毎週授業に来るのが楽しみです。
- 雨天時、南体育館下のスペースで実技をしたが、木材などが置いてあり、やりにくかった。片づけておいてもらいたい。(硬式テニスA)
- ダブルスでは互いに声をかけ合い、試合をしていない時は応援をしたりと気持ち良くテニスできて良かった。(硬式テニスB)
- テニスを通して、運動の重要さや楽しさを学ぶことができた。(硬式テニスB)

(以上、原文のまま)

## 12 日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情分科会副分科会長 大塚 薫(国際・地域連携センター)

### 1. 活動の概要

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」、「日本事情Ⅰ」、「日本事情Ⅱ」、「日本事情Ⅲ」、第2学期に「日本語Ⅲ」、「日本語Ⅳ」、「日本事情Ⅳ」、「日本事情Ⅴ」、「日本事情Ⅵ」が開講されている。

日本語・日本事情分科会では、2006年度～2008年度にわたって分科会独自の形式で授業評価アンケートを全科目の受講学生を対象に実施した。それにより、各授業の自己点検評価活動が行われるとともに、共通教育日本語・日本事情科目のあり方を考えていく基礎資料とすることができた。

それを踏まえて、2009年度以降は、日本語・日本事情分科会では「学期末授業評価アンケート」は行わず、「第Ⅱ期 教育力向上3カ年計画」に基づく「5・15週目アンケート」に関する自己点検評価活動を個人ベースで実施するとともに、2012年度は日本語・日本事情科目の特性である少人数制授業に焦点を合わせ、FD活動と連動させた「授業ピアレビュー」を中心とする活動を行った。「授業ピアレビュー」活動の詳細に関しては、2012年度日本語・日本事情分科会FD部会活動報告を参照されたい。

## IV FD部会

### 1 FD 部会の活動報告

FD 部会長 立川 明（総合教育センター）

#### 平成 24 年度活動の概略

共通教育における FD 活動は分科会が主体的に行っている。各分科会の実施状況詳細は各分科会報告を参照していただきたい。本年度は教員向けの研修について希望調査を行い、その結果を基に共通教育独自で FD 研修を行った。

#### FD 研修に関する調査

本年度1学期に共通教育授業担当者を対象としてメールにより「共通教育実施機構研修メニューのニーズ調査」を行った。結果の簡単な報告を共通教育実施機構広報誌パイプライン 40 号に掲載している。調査の結果、希望の多かったものは以下の通りである（比率は希望数を回答者数で割ったもの）。

- ・動機の低い学習者に教える方法(50%)
- ・大人数講義を魅力的にするテクニック(46%)
- ・レポートの書き方の教え方(43%)
- ・効果的なグループワークの技法(43%)

これらの結果を踏まえて本年度は共通教育実施機構として研修を計画・実施することとした。

#### FD ワークショップの実施

研修メニューのニーズ調査の結果を受けて以下の研修を実施した。

- ・学生参加を促す手法(12/5 朝倉, 12/18 物部)
- ・課題探求型学習担当者研修(2/19 物部・農学部共催, 2/20 朝倉)

学生参加を促す手法では、学生の能動性を引き出すための手法や大人数授業でも使えるグループワークの手法などをレクチャーとワークショップによる体験型の研修を行った。アンケート調査で希望の多かった「動機の低い学習者に教える方法」、「レポートの書き方の教え方」、「効果的なグループワークの技法」に対応した内容である。

課題探求型学習担当者研修では、3つの初年次科目の目的の違いによる授業内容の特徴についてレクチャーに、教員の役割＝ファシリテーションについてワークショップを行った。アンケート調査で希望の多かった「効果的なグループワークの技法」に対応した内容である。

初年次科目のうち大学基礎論、学問基礎論、課題探求実践セミナー、情報処理等でグループワ

ークを導入している。これらの授業はそれぞれ異なった目標が有り、授業形態としてグループワークを取り入れているが、そこで何をすべきかは当然異なる。しかしながら学生も授業担当教員もこれらの違いをはっきり理解していない様子が今回の研修で明らかとなった。

大学基礎論では、社会人講師による講義を実施し、そのふりかえりをグループワークで行うことが基本的な形式となっている。また、学問基礎論ではそれぞれの専門分野に関するレクチャーの後ふりかえりをグループワークで行うのが基本的形式である。これらは卒業後のキャリアを見据えて学部でどのように学ぶか、またそれぞれの専門分野でどのように学習を継続するかをグループワークで議論し、自分の内面にどのように落とし込むかが重要である。

情報処理でグループワークを実施し、課題探求型の授業形態を導入する場合は情報の収集や整理、分析、加工などを重視し、調べ学習とプレゼンテーションを行うのが良い。

これらの授業と異なり、課題探求実践セミナーではチームワークを体験するためにも課題の設定を異にする必要がある。すなわち、課題を「解決」することをミッションとする必要がある。多くのクラスで情報処理の授業で行うような調べ学習で課題達成としており、このため他の授業との差別化が学生にとって不明で、同じようなことを繰り返し“やらされてる”意識となり、モチベーションが維持できない原因となっているようだ。これを防ぐために、課題を決める段階で十分な時間をとり、何を持って課題解決とするか明確にしてから取り組んでいただきたい。課題決定の段階で合意形成を省略してみんなのやりたいことをそれぞれやるようなグループもあるようだ。これではグループワークをやっている意味が無い。合意形成とふりかえりを重視することもグループワークを行うすべての授業で意識していただきたい。

## 2 大学基礎論分科会

大学基礎論副分科会長 岩佐 光広（人文学部）

大学基礎論の FD は学部ごとに企画・実施した。たとえば教育学部では課題探求実践セミナー担当者との合同 FD が開催された。

## 5 人文分野分科会

人文分野副分科会長 武久 康高（教育学部）

FD 部会での審議と活動計画書をもとに、授業担当教員に対して人文分野独自の FD 企画案を募集した。その結果、以下の企画が決定した。

- 他大学の共通教育への取り組みを視察し、今後の共通教育のあり方を考える際の参考にする

そこで平成 24 年 12 月、人文分野分科会委員である田鎖数馬が大阪市立大学へ視察に行った。その内容は以下の通りである。

### 【授業の工夫】

- コミュニケーションカードの活用が、学生教員双方により効果をもたらしていること。  
（共通教育「日本の近代文学」の参観より）

### 【共通教育の特徴】

- 学生の主体性を重んじる傾向が強いこと。
  - ・卒業に必要な共通教育の総単位数・必修単位数が少なく、高知大学より自由に科目選択ができる。
- 教員が担当する授業時間が少ないこと
  - ・一人の教員が担当する共通教育のコマ数が少なく、全体のコマ数の半分以上を非常勤講師が担当している。

以上の視察の結果、特にコミュニケーションカードを活用した授業は大いに参考になった。コミュニケーションカードの活用とは、最初の 10 分ほどの時間を割いて、あらかじめ読むように指示していた教材（授業で扱う作品）についての感想や解釈をコミュニケーションカードに記入させ、それを出席カードにするという方法である。この方法は、学生の授業参加を促す効果を与えていた。実際、コミュニケーションカードに記入させた後、何人かの学生に作品についての感想を教員が質問したところ、学生はカードに記入した内容に基づいて、自分の率直な感想をしっかりと答えていた。自分の考えを整理するための時間を学生に与えることの重要性が改めて確かめられた。また、教員も、提出されたコミュニケーションカードの全てに目を通し、学生が作品をどう理解していたのかを把握した上で翌週からの授業を進めることになるので、学生の反応を踏まえた形で次からの授業を組み立てることができる。その意味で、このコミュニケーションカードを用いる方法は、学生と教員の双方にとってよい効果をもたらすものであると考えられる。

平成 25 年 2 月、こうした視察の結果を報告書にまとめ、人文分野の授業担当教員にメールで配布した。

## 6 社会分野分科会

社会分野分科会副分科会長 石筒 寛（人文学部）

社会分野分科会では、大人数授業についての改善策の検討を行った。平成23年度において、受講者数が100名を超える授業題目は、教養科目で31.1%、共通専門科目・基礎科目で57.1%であった。社会分野におけるノルマ数自体に大きな変動はないため、ここ数年で、大人数授業の割合に大きな変化はないが、授業担当者の実質的な減少などから、開講授業数の増加による改善は容易ではなく、各授業に対しての支援方法の検討を行った。第2学期に、受講者数100名を超える授業題目の一部で、授業評価アンケートを実施するとともに、授業担当者に対する聞き取りを実施した。分析が十分でなかったため、次年度において、引き続き検討を行うこととした。平成24年度において、受講者数が100名を超える授業題目は、教養科目で38.2%、共通専門科目・基礎科目で66.7%であった。

### 平成23年度における授業題目毎の受講者数の状況

受講者数	教養科目		基礎科目	
50人未満	22	48.9%	3	21.4%
51人～100人未満	9	20.0%	3	21.4%
101人～150人未満	5	11.1%	2	14.3%
151人～200人未満	7	15.6%	4	28.6%
201人以上	2	4.4%	2	14.3%
	45		14	

### 平成24年度における授業題目毎の受講者数の状況

受講者数	教養科目		基礎科目	
50人未満	27	49.1%	0	-
51人～100人未満	7	12.7%	4	33.3%
101人～150人未満	9	16.4%	3	25.0%
151人～200人未満	8	14.5%	1	8.3%
201人以上	4	7.3%	4	33.3%
	55		12	

7 生命・医療分科会  
11 スポーツ・健康分科会

生命・医療分科会副分科会長 本間 聖康（教育学部）  
スポーツ・健康分科会副分科会長 矢野 宏光（教育学部）

平成 24 年度共通教育 FD 相互授業参観（合同企画）について

日時:2013 年 1 月 10 日(木) 3 時限目(13:10~14:40)

場所:南体育館 2 階フロア

参観授業:スポーツ科学実技(フィットネス)

出席学生:8 名

参観者:2 名

【授業について】

本年度は、北体育館、ダンス室が耐震工事中のため、南体育館での授業となった。そのため学習環境に関して、ダンス室のように壁面に鏡が設置されていなかったため、受講生自身が自分の動きやフォームを確認しながら運動をすることができなかった。このこともあり、参観者からビデオなどを使って映像で見せてあげるとよいつのアドバイスもあった。

授業そのものは、担当教員にフィットネスインストラクターとしての経験もあり、また若くて活動的で、積極的に学生と係っていて、和気あいあいとしたムードで進められていた。受講生数も、多過ぎることもなく大変よかったと思われた。

内容的には、もう少し難度を高めても良いのではないかと思っただが、個々の学生の身体状況とお正月明けでもあることを考慮した展開であったようだった。

インストラクター・オブ・ザ・イヤーに選ばれた経歴のある教員の授業を、多くの学生が受講し、健康的な学生生活が送れるようになることを希望する。

## 【共通教育】相互授業参観のお知らせ

教職員 各位

生命・医療分科会 FD 部会 本間聖康  
スポーツ・健康分科会 FD 部会 矢野宏光

### 相互授業参観のお知らせ

この度、生命・医療分科会 FD 部会とスポーツ・健康分科会 FD 部会が合同企画した相互授業参観を開催する運びとなりました。この企画は、<「こころ」と「からだ」の健康づくり運動>をテーマとしながら、体験的な実践を通してより質の高い授業づくりの方策を検討していくFD活動のひとつと位置づけています。

本授業はフィットネスに関する理論と実践で構成されています。実践の内容には、①エアロビックダンス、②ピラティス、③筋コンディショニング、④ストレッチなどが含まれています。実際の運動時間は45分ほどを予定しています。初めての方でも支障ありません。

授業担当者の常行泰子氏(教育学部門講師)は、2010年のインストラクター・オブ・ザ・イヤ―優秀賞(株式会社クラブビジネスジャパン「月刊NEXT」)に選ばれた業績を持つフィットネスの専門家です。一般の方がこの授業を受講できる機会は少ないと考えられます。

是非、この機会に多くの教職員の皆さんの参観をお待ちしております。もちろん、見学のみでも結構です。以下に詳細・留意事項を記載しましたのでご参照下さい。

### 記

1. 日 時:2013年1月10日(木) 3時限目(13:10～14:40)
2. 場 所:南体育館 2Fフロア
3. 参観授業:スポーツ科学実技(フィットネス)
4. そ の 他:授業の参加には、運動できる服装でシューズ(上履き)を持参して下さい。また、タオルと水分補給用の水を持参されることをお勧めします。

\*その他、不明な点は矢野宏光(内線:8426, e-mail: h-yano@kochi-u.ac.jp)までお問い合わせ下さい。

以上

## 8 自然分野分科会

自然分野分科会副分科会長 池島 耕（農学部）

### 共通教育 FD 講習への参加と課題の検討

共通教育 FD 事業 開催テーマ「学生参加を促す手法」(12月18日(火)物部キャンパス)、および「課題探求型学習担当者研修」(2月19日(火)13:30~15:30 物部キャンパス) 農学部1号館大会議室、2月20日朝倉キャンパス)

の機会を利用し、自然分野科目の担当教員のグループ学習、課題探求型学習についての理解を深め、その進め方を学ぶと同時に、現状と課題を検討した。

学生参加を促す手法では、マインドマップなど具体例を体験し、授業にグループ学習を導入する際の効果的なグループ作りを学ぶことができた。参加した教員の多くが、グループ学習においては、グループの全員が参加し発言できる状態をつくることに不安を抱いていたが、「好きな物」についてのマインドマップを書き、それをグループ内で共有していく手法で、誰もが発言し易い環境を速やかにつくられる様子を体験し、不安の解消の効果は大きかったと推察された。いっぽう、グループ学習によって、学ばせたい課題についてどのように効果的に取り組ませるかという、次のステップについては、まだ不安が残っているようであった。

課題探求型学習担当者研修では、受講生としてブレインストーミングの手法を体験しながら、初年次科目のうちグループ学習と課題探求型学習の要素を含む「情報処理」、「大学基礎論」、「学問基礎論」、「課題探求実践セミナー」の目的、目標が議論された。ブレインストーミングにより、各授業についての教員のこれまでの認識の違いが明らかになり、その上でそれぞれの授業の目的・目標について文章に起こすことで、それぞれの違い、役割について理解が進むと同時に、グループ学習の有効性を実感することができていた。いっぽう、その過程で、それぞれの授業についての目標、学生の学習過程における役割の違いや、目標達成のための授業手法についても、明確にまとめられた情報が無いが、少なくともその理解は行き渡っていない状況も明らかになった。自然分野の科目を履修する学生には共通専門科目・専門科目で実験・実習科目を履修する学生が多く含まれるが、各専門分野の実験・実習科目はその多くがグループ学習・課題探求型の要素を含んでおり、初年次科目がその前段階の学習として達成すべき目標を、今一度確認する必要があるかもしれない。この点は本年度の活動として実施できなかった自然科学系の各講義を履修している学生の基礎学力の現状や問題点についての教員アンケートともあわせ今後の課題であろう。

## 9 外国語分科会

外国語分科会副分科会長 高橋 俊（人文学部）

本年度、外国語分科会では、FD 活動としてシンポジウムを行った。

**高知大学共通教育 FD**  
**「中国語教育の現状と課題」**  
**プログラム**

会場：高知大学  
進行役：高知大学 高橋俊

6 月 29 日(金)

15:00-16:20 共同討議「中国語教育のカリキュラム編成と課題」

高橋俊(高知大学)「高知大学における中国語教育の現状」

大東和重(関西学院大学)「関西学院大学における中国語教育の現状」

中野知洋(大阪教育大学)「大阪教育大学における中国語教育の現状」

杉村安幾子(金沢大学)「金沢大学における中国語教育の現状」

中野徹(近畿大学)「近畿大学における中国語教育の現状」

中村みどり(早稲田大学)「早稲田大学における中国語教育の現状」

【内容】各大学における初修外国語プログラムに関して、現状を紹介して議論を行うとともに、今後の大学教育における初修外国語のあり方について議論する。

16:30-18:00 公開授業

高橋俊「基礎教育中国語 I」

18:15-19:30 ピアレビュー・実践報告

【内容】高橋の授業内容について議論を行うとともに、参加者の中国語教育における様々な取り組み、工夫について紹介する

## 12 日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情分科会副分科会長  
林 翠芳（国際・地域連携センター）

### 1. 活動の概要

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」、「日本事情Ⅰ」、「日本事情Ⅱ」、「日本事情Ⅲ」、第2学期に「日本語Ⅲ」、「日本語Ⅳ」、「日本事情Ⅳ」、「日本事情Ⅴ」、「日本事情Ⅵ」が開講されている。

日本語・日本事情分科会では、2006年度～2008年度にわたって分科会独自の形式で授業評価アンケートを全科目の受講学生を対象に実施した。それにより、各授業の自己点検評価活動が行われるとともに、共通教育日本語・日本事情科目のあり方を考えていく基礎資料とすることができた。

それを踏まえて、2009年度以降は、日本語・日本事情分科会では「学期末授業評価アンケート」は行わず、「第Ⅱ期 教育力向上3カ年計画」に基づく「5・15週目アンケート」に関する自己点検評価活動を個人ベースで実施するとともに、2012年度は日本語・日本事情科目の特性である少人数制授業に焦点を合わせ、自己点検評価部会活動と連動させた「授業ピアレビュー」を中心とする活動を行った。「授業ピアレビュー」活動の詳細に関しては、2012年度日本語・日本事情分科会自己点検評価部会活動報告を参照されたい。

### 2. 全学FD講習会

「学生参加を促す手法」

日時：2012年12月5日（水）

参加者：林 翠芳（国際・地域連携センター、日本語・日本事情副分科会長）

### 3. 全学FDフォーラム

「次へのアクションにつながる教育評価～授業改善・学習成果の評価と活用～」

日時：2013年1月30日（水）

参加者：林 翠芳（国際・地域連携センター、日本語・日本事情副分科会長）

大塚 薫（国際・地域連携センター、日本語・日本事情副分科会長）

以上

## V 広報部会

広報部会長 玉木 尚之 (教育学部)

### 1. 本年度広報部会の構成

部会長: 玉木尚之(教育学部)

川本真浩(人文学部) 野角孝一(教育学部) 石川慎吾(理学部)

山脇京子(医学部) 齋 幸治(農学部)

事務: 徳弘靖人・三宮寛子・尾ノ上尚恵

### 2. 本年度部会の活動方針

広報誌「パイプライン」を発行し(年2回)、電子化した「パイプライン」の読まれ方に関する調査方法の検討を行う。

### 3. 本年度部会の活動報告

#### 3-1) 概要

メール会議2回を含めて4回の部会を開催した。

電子化した広報誌「パイプライン」の読まれ方について、今後どのような調査を実施していくかを検討した。また、編集発行作業の問題点について意見交換を行った。

第39号を5月に、第40号を平成25年1月に発行(掲示)した。また、第41号の編集作業を行った。

#### 3-2) 部会議事と関連会議事項

・第1回部会(メール会議) 平成24年5月30日(水)～6月6日(水)

1. 平成24年度の部会の活動計画について

※8月1日第4回常任委員会・8月6日第2回共通教育実施機構会議で報告。

・第2回部会 平成24年9月24日 10時30分～11時20分

1. 「パイプライン」第40号の発行について

2. 「パイプライン」読まれ方の調査について

※9月25日第3回共通教育実施機構会議で報告。

・第3回部会(メール会議) 平成24年12月17日(月)～12月20日(木)

1. 「パイプライン」第41号の発行内容案について

・第4回部会(メール会議) 平成25年3月12日(火)15日(金)

1. 「パイプライン」編集・発行業務の反省

2. 本年度活動報告書について

3. 「パイプライン」第41号の編集経過について

### 3-3)本年度の審議内容の概要

#### 3-3-1)「パイプライン」発行業務の自己点検・評価について

昨年度の「パイプライン」の改善と電子化を受けた 本年度の課題として、読まれ方の調査業務があることを確認し、まずは、Google アナリティクスを利用した訪問数の調査を実施してみることとした。

また、今年度の編集作業について、意見交換を行った。

#### 3-3-2)「パイプライン」の編集・発行について

・前年度に編集を終えていた第 39 号を5月に HP に掲載した。

・第 40 号を平成 25 年1月に HP に掲載した。

・特集は分科会で、「社会分野分科会」と「生命医療分科会」

次年度以降のローテーションを以下のように決めた。

〔外国語 日本語・日本事情〕→〔キャリア支援 スポーツ・健康〕→〔人文 自然〕→

〔大学基礎論 課題探求実践セミナー 学問基礎論〕→〔社会 生命・医療〕

ただし、教養の頁等とのバランスを考慮して変更する必要があることを了承した。

・教養の頁は、人→理→医→教→農のローテーションで、人文学部。

・FD 部会報告

・学生委員会の頁

原稿料は、学生委員会活動に対する謝金という形で支出する。内容は学生の創意工夫に任せる。

・第 41 号の編集を行った(発行は次年度 4～5 月)。

・特集は、共通教育科目で、「教養科目」

・自己点検・自己評価部会報告

## 4. 次年度(以降)の課題

・「パイプライン」編集・発行の時期や編集作業のあり方の検討(継続)。

・編集開始時期がやや遅い印象という意見があった。

・編集開始の部会で、「テーマ」と「内容」についての理解を十分に確認する必要がある。

・医学部では担当教員が少ないという理由で、学部ローテーション再考の要望があった。

・自己点検・評価活動として、「パイプライン」の読まれ方の調査の継続。

本年度は、Google アナリティクスでの訪問数確認を決めたが、後半の事務の交代による業務繁忙で行う余裕がなかったので、次年度はこれを確認し、他の調査も検討する。

・ホームページのあり方の点検。

## VI カリキュラム等開発部会

カリキュラム等開発部会長 石筒 覚（人文学部）

### 1. カリキュラム等開発部会のまとめ

#### (1) 環境人材育成に関する教育プログラムの実施

- 「地域協働実習Ⅰ」（集中講義）
- 「地域協働自己分析」（集中講義）
- 「環境フィールド実践」（集中講義）
- 「社会協働実践」（集中講義）

平成24年12月14日に開催された第2回環境人材育成研究交流大会「社会が求める環境人材育成と活用」（環境人材育成コンソーシアム主催）において報告を行った（報告タイトル：自律型人材育成を目指した社会協働教育プログラム）。

#### (2) 課題探求実践セミナーの授業改善及び開発

地域でプロジェクトを実施する方式の地域協働入門を開発した。また、本年度新規に開講した地域協働入門Ⅱ（着ぐるみを活用した地域社会貢献の検討）に関して、実施方法や内容の改善策を検討した。国際協力入門は通年での開講であったが、前期の開講回数を増やして前期開講とするための検討を行った。

#### (3) 課題探求に関する授業の開発

中山間地域におけるサービスラーニングの実施と振り返りを行う「サービスラーニング演習」を開発した（平成25年度教養科目・社会分野開講予定）。